

【旧版】 普通の人間ですけど…え、天才魔法使い？ 【新版はあらず  
じから】

不審者γ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

平凡な日常を生き、平凡な暮らしをする男子高校生。

そんな彼は不幸にも死んでしまう。

が、何故か記憶が残ったまま転生し、まさかの才能を開花させる。

リメイクしてます。こちらの更新はもうしないので、こちらから

新版

<https://syosetu.org/novel/3176>

# 目次

まさかの転生者	1
魔力測定	7
バグった転生者	14
スカービア家へ訪問	22
ウイルヘム魔法学校	30
楽しい楽しい毒魔法制作学校	38
ハプニング	45
日常の崩壊	53
光と陰	62
ただの対談	70
縁	74
第一章 魔王討伐(?)	
——が仲間に加わりました	81
急転直下	88
王宮での：	95
旅立ちの都&最初の町	103
町散策	110
ダンジョン	117
初陣とステータス	125
役職と野宿	132
トウキョウ	140
黒魔獣人 マーダー	148
撤退	156

何者	164
眞実	170
会議	177
お願い	185
決戦前	193
限界魔法	199
マ―ダー戦、終戦	208
10人目	216
出発、2つの再会	224
魔王降臨	232
魔王軍の裏事情	240
お知らせ	248

## まさかの転生者

「……………」

適当に睡眠をとり、適当に起き、適当に食事をし、それなりの成績をとって家に帰る。そんな感じの高校生活をやってた。

まあそんなことを深く考えることもなく、普通に生きてて、将来のこととか気にし始める。これからどうなるのかなー、とか。

いつも通りの登校中駅で自転車に乗り換え、建設途中の建物の前を通った時、

「危ないー！」

「えっ」

咄嗟で分からなかったけど、鉄骨が落ちてきたようだった。

人間、咄嗟のときは回避じゃなくて停止に追い込まれるんだな、つてその時初めて知った。

「！」

ガラガラガラガアン：

走馬灯なんてなかった。身動きができず、鉄骨の下敷きにされる。

息が、吐き出された息が、吸い込めない。

「まづいーどけるぞー！」

声は聞こえる。ただ、力が入らない。足の感覚もない。なくせに死ぬほど痛い。多分折れたかな…あ、意識が…

「……………」

とかさつきまで朦朧としてたはずなんですよね。ええ。

…目は覚めたよ、目は。

……………どこぞ？

家にも病院にもいない。森か林か山にいる。どこだここまじで。

あ、それと今気づいたけどどこにも痛みがないや。鉄骨だよ？鉄骨。鉄骨に挟まれて無傷なわけがいや、無傷ではなかったな。がつつり息吸えなくなってたし足やられてたし。とか考えてると視界の端

にふと、薄黄色の何かが見えた。

「!!？」

…籠だった。

自分の手を見る。小さい。

自分の足を見ようとすると。見れない。

体…には多分タオルみたいなのが巻かれてる。

………赤ん坊になってるんだけど。

いやちよつと待って、整理したい。

…ん？…んん？

「…えあう…う？」

はい、言葉喋れないです。言葉にならない言葉しか出なかった。

もしかして輪廻転生とやらかな…？いや、そうならまず、記憶は消してほしかったんだけど。

…いや、それよりこの状況不味くない？

周りに人なし、記憶だけある赤ん坊がたったの一人で森の中。

詰みじゃん。

と、

「あら？あなた、あれ……」

「籠か？…赤ん坊だ！」

「え…こんな小さな子を…」

30代後半位であろう男性と30前後辺りであろう女性…おそろく夫婦であろう二人が近付いてきた。

よつしや、人だ！

…いや人だ！ってなんだ。

「ひどいな……」

「…ねえ、家で育ててあげられないかしら？ルオリーとアベルも喜ぶと思うんだけど…」

「…元からそうするつもりだよ。こんなところに赤ん坊が一人でいたら死んでしまう。…ここにきていて本当に良かったよ」

と、男の方の人に持ち上げられる。うーわ、世界が広く見える。な

んだこれ。

まあ、とりあえず助けられた…ってことでいいのかな？

とか考えてるうちに抱えられて山？つぼいとこから抜けて、家に連れて帰られてた。…これ法律的に誘拐になったりしないのかな？とか考えてる間にも二人の間で話がトントン拍子に進んでいった。

いや、当人全然話聞いてなかったんだけど。

「この子の名前、どうする？」

「そうだな…アリス。この子はアリス・セナールにしよう。」

「アリス…いいわね。お人形みたいな見た目にも合ってるわ。」

え。

…ええ？

僕一応男なんですが。アリスって言われたら、まあ100人いれば100人…もしかしたら一人くらいひねくれ者がいるかもしれないから99人にしとこ。まあほとんどの人が女の子を思い浮かべるよね…？

それに、どこの国の人間だろ。不思議の国かな。それとも廃墟の国？まさか幻想の少女の国…は色々不味そうかも。

とか考えたけど、多分どれでもないと思うからそこはいいや。

しかし…名前はなあ。どうにかしてくれないかなあと思っても、喋れないし。どうしようもないや、と諦めた。結局名前はアリスになった。…慣れるかな…

「…にしても、全然泣かないわね、アリス」

「ああ…何か病気とかじゃないといいけど…」

どうやら両親となる二人は、僕が泣かないことを心配してくれてるらしい。確かに、赤ん坊は泣くもの…だけど、泣くのもできないんだよねえ…。不便なのか便利なのか…いや、不便だなこれ。

というか、泣かない子とかなら手のかからない子、みたいにされそうなものだけど、良い人達みたいだなあ。

「あー！赤ちゃん！お母さん、この子だあれ？」

「アベルとルオリーの妹のアリスよ。」

ふと聞こえてきた声に、答える女の人。

…うん、妹って言ったね。薄々感づいてはいたけど、これは…

「分かった！私はアベル。よろしくね、アリス！」

「……うあうえ…？」

はい、TSですありがとうございます。ごさいます。

もうこんなのTS転生性転換TSじゃん。二重にする意味ないって。

——5年後——

セナール家に引き取られて5年経った。

あ、今更だけどセナール家っていうらしいね。

容姿も確認したけど、やっぱり女の子になってみたい。

中々に顔は整ってて、両親から美人だ美人だと言われてちよつとくすぐったかった。正直なところ周りの顔面偏差値も高いからそう見るとそこまでする感じはするけど。

ただ、髪が白髪でその中に紫が入っていたり、目が赤がかった茶色だったりで、もし羽と尻尾があれば悪魔にでも間違われていたかもしれないと思う。あ、アルビノじゃあなかったよ。太陽の下に出ても問題なかったし。

まあそんなこんなもありつつ、兄さんのルオリーと姉さんのアベルも仲良くしてくれたお陰で問題なく成長していった。

声が高かったり、身長が低かったりで違和感を覚えることは結構あったけど、割と早く順応できたんだよね。まあ、元々なら全力で拒否るようなワンピースを着る時にもあんまり抵抗を感じなかったし、女の子らしいしゃべり方をする事に対して苦痛に感じたりする事も無かったけど…。何だろ、女装欲求でもあったのかな。

まあ苦痛を感じなかっただけで、かなりやりにくかったんだけど。まあ、あと5年もすれば中性的なしゃべり方に変えようかなーって思ってたとか。

あー、あと。前世の記憶がある、とはいったけど、前世の自分の名前とか交友関係、家族とかの事はなんでか思い出せないんだよね。一般教養とされるような事は覚えてるんだけど…。



「じゃあ、今日は魔法を見せよう。」  
そしてもう一つ。

この世界じゃ、科学より魔法っていうのが主流らしくて、魔物とかもいるらしい。

魔法の種類は魔法使いや魔物と同じくランク付けされてて、ランク1〜10まであるんだって。

5歳になるとランクの測定があるらしくて、僕ももうちよつとしたらランクの測定がある。

兄さんも姉さんも測定は終わってて、姉さんがランク3、兄さんはランク4。父さんのガーターはランク5魔法使いらしくて、ランク5は普通の人の中では高い部類らしい。大体平均的には4あたりらしいけど：なんで平均を5にしなかったんだろ。

ちなみに母さんのシャルが地味にランク6だったりする。魔法使いのランクを越える魔法は使えないらしいけど、ランク8以上の魔法使いなんかほとんどいないらしくて、途中でランクが上がることもそうない上にランク10とかになると存在してないからランク10魔法とかは机上の空論って言われてるんだって。存在はしてるでしよ。

「じゃあ、ランク2から見せよう。」

で、今日はその魔法を見せてもらうことになってる。

父さんは火属性魔法使いらしくて、それ以外の属性の魔法は使えない。あ、無属性魔法は除くってさ。なんでなんだろ。

と、父さんは手のひらに薄い赤の魔法陣を出して、頭の上に手を上げて：

「火2魔法、ファイアボール！」

何かを投げるように、その手を振り下ろしてそう言うと、そこから小さめの火球が投げられたように飛んでいって：

ドオン：

木をへし折った。

「…すごい…：…こんな感じかな…？」

いや、まあできるわけないんだけど…まあ、もしかしたらできるか

もしれないじゃん？腕に力を込めて、そのまま振ってみる…ん？なんか手の方が熱い…

ふと、視界の端に赤橙が見えた。

同時に父さんのファイアボールとは比べ物にならない火球が、これまた比べ物にならない速度で飛び出して…辺りの岩、木、草を焼き払った。

「……………え、」

「……………え!?!」

「…え、ええ!?!」

父さんも母さんも驚いてたけど…多分、誰よりも一番僕が驚いてたと思う。

だって考えてみてよ!?!魔法なんか知らないし感覚で腕振っただけだよ!?!なんかファイアボールみたいな宣告もしてないし、魔法陣すら出していないのにあんな魔法が出てくるとか思わないじゃん！

まあそんな感じで思考だけぐるぐる回って腕を下ろした状態でフリーズしてた。

「…あれ、ランク5位の魔法じゃなかった…?」

ポツリと母さんが呟いたら、はっ、と父さんが我に返ったみたいに詰め寄ってきた。

「…すごい…アリス…すごいぞー!」

「え、ええ!?!」

「スツゲー!アリス!どうやったの!?!」

と、どうやら衝撃音で気付いたらしいお兄ちゃんも出てきた。お姉ちゃんは…あ、学校か。

「え、見よう見まねでやってみたら…あんな感じに…」

「見よう見まねでランク5の魔法を…すごい…」

とまあ、こんな感じでまさかの才能が開花したわけ。元々なんの魔法も使えない人間だったんだけど…あれ、もしかして僕すごい?」

## 魔力測定

そして、あの魔法の一件があつてから一週間後…

「じゃあ、準備できたか？」

「うん！」

今日はランク測定の日だよ。

なんかそういう施設があるらしくて、その近くまでは父さんが転移魔法で送ってくれるらしい。転移魔法なんてのもあるんだ…完全にファンタジーだねえ。いや、そもそも魔法がある時点でファンタジーなんだけど。

「じゃあ、行くぞ」

と、父さんが下に向けて握った手を開くと、足元に青い巨大な魔法陣が展開された。周りに細々とした文字が次々と書き込まれていく。

「転移4魔法、テレポート！」

そう父さんが言うと、一瞬魔法陣が光って…

ヒュン

ヒュン

「着いたぞ。」

「…うわあっ…」

一瞬で目の前の光景が変わりました。はい完全に転移魔法ですありがとうございます。

それでやって来たのは首都、クリーフォール。僕達の住んでいる所からかなり離れた所にあるんだよね…イツキ村っていう名前らしいけど、割と田舎だよ。村って付いてるしね。

で、だけど…想像以上に賑わってるし発展してるね。人の多さとしては前世の東京とか大阪とそう変わらないっぽいかな。まあでも、使われているのが科学か魔法か、という違いはあるみただけど。

…あ、でも車っぽいのあるな…タクシーっぽいけど完全にオートの

運転みたい。運転手がない。

あとビル群もある。

いや本当に都会。大都会。

「さ、行こうか」

「うん」

で、その行き道に聞いてみた。

「お父さん、あの自動で動いてる乗り物みたいなのって何？」

少なくともあの村には乗り物って言っても馬車くらいしかなかったからね…この都会と田舎の発展具合の差よ。

「ん？ああ、あれは車っていうんだ。うちにも馬車はあるだろ？都会じゃ魔法とまた違う科学ってのがあってな、魔法と一緒に使ってもつと色んなことができるようにしてるんだ」

…魔力と科学の融合だあ。

なるほどね…一応この世界にも科学はあるんだ。魔法が存在してる時点で物理法則もクソもないような感じはしてたけど…

「おつと、ここだな」

「…」

とか考えてたら目的地に着いたらしい。

…着いたんだけど…一言で言うなら、宮殿。

いや、ほんとに宮殿。すつごいおつきい。どれ位大きいかといえば、本当に家10個分位大きい。いや本当に誇張なしで。…何こいつ語彙力死んでるじゃん。

それに、なまじ形も宮殿だからここに聖職者がいても全く違和感無いね…とか思いながら父さんの後について行ってる…

「こんにちは、アリス・セナールさんですね」

…聖職者だ。

白髪で黒のベールをかけてるシスターさんみたいな格好をした人がいた。いや前の世界でシスターさんとか見たことないけど、多分こんな感じだと思う。

…うん、神殿みたいな建物じゃなくてちゃんとした神殿だった。

「はい、よろしくお願ひします」

「ふふ、礼儀正しいのね、よろしくね。さ、こつちよ。お父様も、こちらです」

そうして通されたのは…

「……」

これまた広い部屋だった。机や椅子がある辺り、学校の教室にも似てる。とうかこれ教室じゃない？僕と同じ位の子が30人位いるし、内装だけなら学校に見えなくもないな。外装は完全な神殿だけど。

あー、あれか。宗教学校とかならあり得るかも。

とかそんなことを考えていた時、多分僕と同じく魔力の測定を受けるんだろう一人、やたらと女子に囲まれている男子がいた。覗いてみると、どうやらかなりのイケメンらしい男子がいた。この年齢で股をかけ始めてるっぽいけど…ませてんのかどうなってるんだ。

そう思いながら指定された席につく。別に絡む気はないかなあ…ちよつと友達にはなれなそう。そもそも根が陰キャだから…

それで、家から持ってきた本を読んでいたとき、ふと顔を上げるとその男子が意外そうな目でこつちを見てた。かまちよか？どうやら相手にされなかったのが心外だったようなので、軽くお辞儀だけしといた。

まだ見られ続けてたけど。

すると、

「ねえねえ、お名前何て言うの？」

「うん？」

隣の席から声をかけられた。

本に葉を挟んで閉じてそっちの方を向くと、緑の髪にエメラルドグリーン目の女の子が目キラキラさせながら話しかけてきた。うっ…陽キヤの存在を感知…

「…私？」

「うん、そう。あ、私バートっていうの。バート・スカービア」

バート…フランス語か何かで緑だっけ。いや、確かに髪と目は緑だけど…

「私はアリス。アリス・セナール。よろしくね、バートちゃん」

「うん、よろしく！アリスちゃん！…ところでだけどき、あの子、凄  
格好良くない？」

元気な感じでニコニコしながら返してくれるバートちゃん。いい  
子だ。

と、例の少年をさして彼女は聞いてきた。あー、うん。

「あー…確かに格好良いね」

「？興味とか無いの？」

確かに格好良いとは思うけど、残念ながら中身が男なんだよねえ。  
それに、そもそも色恋話等にほぼ興味のなかったような人間だったし  
…そういうのは無いか。

あとああいう人が単純に苦手。

「うーん…あんまりないかも」

「へえー…でもさっきからアリスちゃんの事チラチラ見てるよ？気に  
なってるんじゃない？」

それは気付いてた。視線を感じて顔上げるたびにこちらを向いて  
るんだから、そりや気付く。というか一種の恐怖さえ覚えてる。

「ええ？」

「いや、だってアリスちゃんも凄いかわいいもんな」

…なんかからかい口調で言われた。

「バートちゃんもかわいいよ」

「えへへー。ありがとう」

調子を合わせたほうがいいかな、と若干からかい口調で答える。

…うん、苦手だ、このテンション…

そもそも前世でこんなこと言ったら速攻でガチャンだったし、言  
うような相手いなかったし…あれ、目から汗が…

と、そのとき前の戸が開いて二人の人が入った来た。

一人は60前後くらいのおじいさん。もう一人はシスター風の格  
好をした、案内をしてくれたあの人だった。

「はい、本日、測定をさせていただきます、ランク5聖師、ソーラス・  
ロベルと申します。よろしくお願いします。…まず、方法を教えま

す」

礼儀として最初に名前を言うこととかの後、測定方法を教えらるる。

測定は、測定器になるあの玉水晶に手を当てて、魔力をできるだけ高めるだけなんだってさ。それだけで玉水晶が魔力を感じ取って水晶の中に魔力の測定値が出るからそこから計算してランクが決まるらしい。

便利なものもあるんだなあ。

「じゃあ、まず一人目、どうぞ」

そうソーラスさんが言うのと、例のあの少年が出てきた。

「シユウ・アルバートです」

その瞬間、部屋がザワツとした。：けど、何がザワザワする理由になるのか分かんない。：聞いてみよつか。

「ねえ、あの子って有名な家柄とかなの？」

「え、知らないの？アルバート家って有名な魔導師団の家柄だと思うんだけど…」

聞いたことすら無かった。まあ田舎だし：いや、言い訳になんないや。正直勉強サボってました。すんません。

「：なるほどな：それならあれだけ人が集まってもおかしくないか」

誰にも聞こえないレベルでぼそつと呟く。まあ、そのレベルの地位に容姿が付いたら少々性格があれでもモテはするか。：決して僻みじゃない。決して。

「では、こちらに。玉水晶に手を当ててください。そして、魔力をできるだけ出してみてください」

そう言われて彼は台に上り、水晶に手のひらを付けた。と、部屋の中に弱くも風が吹いた。玉水晶の中には164000の数字。また部屋の中がザワザワする。

「：ランク6です。」

ランク6。ランク4が平均と言われる中じゃ高かった。

やっぱり魔導師団長の子供だけある：と言いたいところだけど魔力量って遺伝するのかな。

まあそこはどうでもいいや。

と、次々と測定する人が呼ばれていく。

「では…次の方」

「あ、私だ。行ってくるね」

そう言つてバートちゃんが前に出た。

台の上でもにつこにこで自己紹介をする。

「はーい！バート・スカービアです」

「はい。では、こちらに」

シユウと呼ばれた少年と同じように水晶に手を当てる。53000の数字。

「…ランク4です。」

これでも一般人の中でもちよつと上の方だ。そう考えると父さんとかも割と上位だよな。少なくとも周りで転移魔法使つてるのは父さんくらいしか見たことないし。

「凄いね」

「えへへ…」

バートは若干顔を赤くして頬をかいた。

「じゃあ、次の人」

おっと、僕の番だ。

「はい。アリス・セナルです」

流星に少々緊張した。人の前だし…こんな大勢の前で何かするのととかなかつたからなあ…

で、これまでの子と同じように水晶に手を…その時、パチツ

静電気みたいなのが水晶と手の間に流れた。まあ気のせいかな、と思つてそのまま手を近づけて…玉水晶に触つたその瞬間。

ミシ…

「ん？」

…なんか嫌な音が聞こえた。

こう、なんとというか木が切り倒される直前の軋む音みたいな…

チラ、と水晶を見ると、まだ魔力を上げてもないにも関わらずな



んかヒビが入っていた。

本能的に察知する。

これはまずい予感がする。

と、次の瞬間。

「うわっ!?!」

バキン!と嫌な音が響いて玉水晶が破裂し、中から雷のような魔力の奔流が暴れながら、僕を飲み込もうとする勢いで襲いかかってきた

…

## バグった転生者

「危ないー！5光魔法、セラー！」

雷の波にギリギリ飲み込まれる寸前、ソーラスさんが防御魔法を展開してくれたおかげで、怪我はなかった。…が。

「!!?!」

何か色々あり得ないものを見るような目で見られた…心外だなあ。

「えっ…」

「…神官、測定不能です」

「うむ…この精度では少々無理があったのか…？7辺りまで計れるはずなんだが…まあ、最後にまた来てくれ」

ソーラスさんや神官さんも動揺しまくってるらしく、ヒソヒソと方針の相談をしていた。でも確かに備品壊したとかなったら問題になりそう…かな？

「は、はい」

まあでも今のところ何かできることはないしなあ…と思いながら席に戻る。

「アリスちゃん、凄いよ！玉水晶が割れるなんて始めてみた…！」

と、席に戻ると隣からバートちゃんが話しかけてきてくれた。

「まさか破裂するとは思わなかった…」

まさかね。

原因はわからないけど、話の断片とかこういうラノベとかの展開的には強すぎて普通の道具じゃ耐えきれなくて…みたいなのがテンプレになりそうだけど…

そしてその後のランクは2、3、4辺りが出て、時々5が出てざわついたりして最後に5が出た感じで恙無く終わった。最後にソーラスさんが前に出て、少し話していた。

「では、測定はこれで終了です。お疲れ様でした。これからの皆さんの生活に神のご加護があらんことを。アリス・セナールさんは後でこちらに来てください」

と言われて人が散り散りになっていく中、呼ばれたからソーラスの

ところに行く。

と、「ちよつとついてきてね」と別の部屋に案内された。そこには、先程の玉水晶と色の違う、赤い玉水晶が置かれていた。というかなんか扱いの差がすごい。

さっきの玉水晶とかは普通の台に置かれてたけど、こっちはなんか床に固定されてるタイプの祭壇みたいなのに赤の布を敷かれた上で丁寧に置かれてる。

「こっちなら大丈夫なはずだから、もう一回同じようにしてくれる?」「はい」

そう応えて、同じように玉水晶に触れて魔力を高める。

突然、アリスを中心とする魔力の暴風が発生した。窓ガラスが割れるでなく、フレームごと吹き飛ぶのは予想外すぎたが、まずあわててアリスは玉水晶から手を引つ込める。

ふと見るとソーラスが目を見開いていた。

「…ランク…:9…!?!しかも、10に差し掛かりかけてる…」

ふと見えた、玉水晶に映った数字は…

「526000」

「なっ…!?!」

ランク9魔法使い。しかも、ランク10に差し掛かりかけているよなものはほぼあり得ない領域の魔法使いだ。

理由はよく知らないけど、少なくともランク10の魔法使いの話なんかは聞いたこともないし…

「ランク…:9…私が?」

その凄さは重々承知してた。

ランク9魔法使いと言えば、現在実在している人の中で、アリスが知っているだけでは国家権力級の魔導師二人位しか知らない。

ランクは生まれつきのもので、変化することはそうない。

不変の事実。

「…では、これで測定は終了です。お疲れ様でした。…たまに来てくれると嬉しいわ。ここの神官、私の祖父なんだけど、貴女の話聞きたがると思うの。」

「え、あ、はい！」

そう言うと、ソーラスさんは柔らかく笑顔を浮かべて、僕の頭をポンポンして、去っていった。

そして部屋から出ると、緑の髪が目に入った。

「あ、バートちゃん…」

「アリスちゃん！結果どうだった？何か爆発音してたけど！」

バートちゃんが壁にもたれて立ってた。

…待ってたのか。

「……ランク9だって」

「きつ、9!?魔力はどれぐらいだったの？」

「52万位…」

「ごっ、ごじゆうにまん!?私5万位だったのに…凄いや！」

「あ、あんまり大きな声で言わないで…」

若干おろおろする。

いやだって。予測つくでしょ？

人並み外れた魔力を持つてるのが知られたら広報やらなんやらに広められて云々。

絶対めんどくさいことになる。

「何で？自慢すべきことだよ！」

「いや、だって何か恥ずかしいから…」

「むー…私のパパとママ位には言っても良いよね？」

少し頬を膨らませながら言うバートちゃん。

んー…

「お父さんとお母さんが別の人に言うかもしれないからなあ…お父さんとお母さんに、他の人に言わないように言ってくれるなら」

「もちろん！じゃあ、またどつかで会おうね！」

と、ぱあつと顔を目を輝かせてうん！と首を振り、満面の笑みで手を振って走っていった。

「うん、またね」

僕も小さく手を振った。

…なんか、元気な子だったなあ。

——  
——  
バートちゃんと別れて神殿から出る。…けど、父さんが見当たらない。

「あれ…？」

どこかにいないかと歩き回ってみるが、見つからない。

「あれえ？」

その時、

「わあっ！」

「ひゃあああっ!?!」

突然の事で、えらくかわいらしい悲鳴をあげてしまった。よくよく考えてみると父さんの声に似てる…気もする。

「はははー、引っ掛かったー。」

と、後ろに父さんが。

…どうやら隠密魔法を使ってたみたいだ…なんか空間からスーッと出てきた。ほんとに魔法って何でもありなんだなあ。

「お父さん…それ心臓に悪いから止めて…」

「む、それより、結果、どうだった？」

「うん、…ランク…9だった」

「!!」

と、父さんの目が見開かれる。

「本当か！」

「…うん」

「凄いじゃないかー！」

「あ、あんまり言い触らさないですよ？」

「ああ、そこら辺のアリスの性格は分かってるから言い触らしたりは

しないさ」

父さんは頭をワシヤワシヤして言う。

なんだかんだでみんなそこらへんは考えてくれてたりするんだよね…理解のある家族で良かった。

「ふう…よかった…というかお父さんどこいたの？」

「ああ、どつかの一室から窓ガラスがフレームごと吹き飛んできたから処理してた」

あ、あれの下にいたんだ。

「窓ガラスが割れるとかなら分かるが、何でフレームごと降ってきたんだか…」

それは本当にわからない。フレームの耐久性がガラスの強度より低かった…ガラスは固すぎるしフレームは脆すぎることになるね。魔力で強化すれば固くはなれども脆くはならない。脆くする魔法はあったとしても使いどころがない。せいぜい相手の武器とかを壊れやすくするくらいかな？…割と有用かも。

「まあいいか。さて帰ろう、今日はご馳走だな。転移4魔法、テレポ―ト。」

そう言つて父さんは魔法陣を展開する。

相変わらず、帰りも数秒で終わった。

「ただいまー！」

「お帰り、アリス」

「どうだった!？」

玄関先に転移してくると、兄さんが興味津々といった感じで聞いてきた。すごい目がキラキラしてる。

「えーとね…」

とりあえずあったことはだいたい全部話した。

バートちゃんの事から魔力が高すぎて玉水晶が割れた事までだい

たい全部。

「…つていう感じだったよ。」

「ランク9……」

「聞いたことしかなかった…」

「まりよくちごじゆうにまん…すごいね」

「ルオリー、語彙力と変換能力どこに忘れてきたのよ」

呆然としている兄さんに突っ込みをいれる姉さん。メタいよ。

「で、そのできたお友達って何ていう子なの？」

「えーと、バート…バート…えーと、」

母さんが聞いてきた。けど…だめだ、いかんせん緑のインパクトが大きすぎた。と、ふと父さんが横から口を開いた。

「もしかして、バート・スカービアか？」

「！そう！何で知ってるの？」

え？…なんで父さんが知ってるの…？

話を聞くに、どうやら父さんの会社の同僚さんにバート・スカービアというお子さんがいるという話をよく聞かされていたみたい。

まあ父さんも父さんでボクの話もその同僚さんにしてたらしいけど…

まあともかく、同年代でバートという名前からそういうことがあるんじゃないか、と思つたらしい。聞いたところ特徴も合つてた。

「じゃあ…明日にでも行ってみるか？」

「！うんー！」

やった！

…なんか反応が幼くなつてきてる気がするのには気のせいかな。

「……………新しい人生…また変なことになったもんだなあ…」

その日の夜、ボクは部屋で一人、窓を開けて空を見ていた。空には赤い月が上つて、少し不気味に世界を照らしていた。

「戻りたいかって言われるとこつちのままでもいい気はするけど…前ははどんな人間だったんだろうな…」

一息、ため息をつく。

「……一回死んじゃったし、こんな事を言うのはあれかもしれないけど、家族とかは心配してないんだろうか？ いや、死人に心配するってのも変な話か。にしても、どんな人かも覚えてないってのが変だよね……よし」

立ち上がって窓を閉め、ピンク色のパジャマの上に少し羽織るものを羽織って、廊下をそつと歩いていく。

一室の前に立ち止まって音を立てないように戸を開けると……それなりに広いスペースに本棚がぎっしりと詰められた書庫が現れた。

「どこら辺に……」

探すのは記憶を復元する魔法。記憶系統の魔導書を探してみる。

他の一般常識が残ってるのに自分に関する記憶だけが抜け落ちてるなんて、そうあることじゃない。しかも少しでも関連の有りそうな項目なら念入りに消え去つてるところから、多分作為的じゃないかなと思っただからだ。

「これは……違う。記憶……思考かな？ いやあここらへんに……これか……読めない……」

それっぽい本は見つけたけど、よく分からない字で書かれていた。なーにこれ。

「……うん……思考回路……記憶……脳……？ わかんないや、片っ端から見てもよいか」

そうしてそこら辺を探すこと20分。

「……これとかに載ってるかな？」

それらしき魔導書を見つけた。パラパラとめくってみると、しつかりと読める文字で思考や感情に関する魔法がずらりと書かれていた。これなら……と読み進めていき、一つのページで手を止める。

「……うん、あつた……けど……これ、ランク10魔法……」

ボクのランクは9。自身のランクを超えた魔法は使えないからランク10の魔法は使えない。そもそも魔法自体をほぼ使ったことがなかったから、多分ランク8魔法すらロクに使えないだろうね。

「……どうするかな」



ラノベとかだとスキルやらレベルやらでバンバン総魔力とかも上がったりするけど、ここじゃそうは行かない。

そもそも魔力量はそう上がるものじゃない。

総魔力量っていうのは要するにその体が受け止めきれれるレベルの魔力。肉体をガラスのコップにして、魔力を水にしたときに言えばそのコップに入る限界の量の水が総魔力量、っていう感じ。

器がガラスだから拡張されるわけじゃないよね、っていうやつ。

まあ成長過程で多少増えることはあるらしいけど、一生に増えて数十。そういう系統の魔法薬もあるけど、飲んでも毎日飲んで年に20程度。ランクが上がることは「可能性はゼロじゃあない」程度のレベル、もう奇跡的な確率だ。

まあ：一時的に、ならその器をぶっ壊す覚悟で跳ね上げる方法もあるらしいけど：

まあそれより。

更に言えば記憶復元魔法は属性を持たない魔法。火や風等の属性を持つ魔法よりも無属性魔法は難しいって言われてるから、つまりこの記憶復元魔法とやらはランク10の中でも結構上位の魔法らしい。どうにせよ特訓で魔法に慣れるのは必須だ。まあ何があるかわからないし、鍛えるに越したことはないしね。

そこまで調べてから魔導書を棚に戻して、図書館を出た。そして来たときと同じように、音を立てないように部屋に戻ってベッドに潜った。

## スカービア家へ訪問

夢を見た。

薄いすりガラス越しに映像を見ているような、ぼんやりとしたものだったけれど。

なにか黒いような、紫のような縦に長いものがある。

多分、人みたいな形をして、動いてる。

それを押しつけるように、白い何かが出てきた。

いや、生み出された、のほうか正しい？

その人のようなものは小さい白い物に、何かをしていた。

ふと、目が開いた。

「…起きたか」

うーわ気になるところで目が覚めた…しかもたまにあるしっかり残る系の夢だあれ…

まあそんなことを考えながらも、パジャマから着替えて居間に行く。と、もうお姉ちゃんは起きてたらしい。

「お姉ちゃん、おはよう。」

「あ、おはよう、アリス。」

朝食を待っているのか、本を読みながら、こつちに目をくべて薄く笑った。

「あらアリス、おはよう。思ったより早かったわね…朝ごはん、もうちよつとだから待ってて。」

と、母さんもキッチンから顔を出し、言った。

「うん」

「…あ、そうだアリス。ちよつとこつち来て」

「？なあに？お姉ちゃん。」

お姉ちゃんに手招きされて、自分の前に座らされる。ふと髪を触られる感覚。と、少し髪が引っ張られる感覚。

「…はい、出来た。見てごらん。」

手鏡を渡され、見てみると髪がポニーテールにまとめられてリボン

で束ねられていた。青い線が何本か流れている。

「あ、リボン…」

「アリスは髪長いからさ。それと、ちよつと魔力を込めたお守りみたいなもの。プレゼントよ」

「わあ…ありがとうございます。」

「ふふ、どういたしまして。」

姉さんはまた薄く笑って赤い髪を揺らして、また本に目を向けた。  
…器用だなあ…物に魔力込めるのって難しいんだよ？込めすぎるとその物が壊れるし、少なすぎると効果を発しないし。

「お、アリス。早いな。」

と、洗面所から顔を洗っていたらしい父さんが戻ってきた。

「おはよう、お父さん。」

「ああ、おはよう。今日スカービアの所に行くからな。」

「うん…」

いや、正直言っただけ忘れていた。一日で色々ありすぎた為か、新しい情報が上手く入っていなかったのだ。

「(トク)？」

「ああ。」

ピンポーン

「はいー？」

ガートルェより、少し高めの男の人の声がして数秒後。

ガチャ

「おお、セナール。…と、娘さんか？」

また若い男の人が出てきた。

「ああ。そっちの「あ！アリスちゃん！」おっと、」

「！バートちゃん！」

家の奥から緑の髪、バートが飛んできた。実際に飛んできた。

「ああ、バートが言っていたアリスちゃんってセナールの娘さんだった

のか。」

「うちも昨日聞いてな、特徴を聞いてみたらお前のところの娘と同じだったから聞いてみればピッタリだった、って訳だ。」

「なるほどな。さ、玄関でなんだ。上がりな。」

「アリスちゃん！こつち！」

「あ、お、お邪魔します…」

バートに手を引かれ、アリスは慌てながら靴を揃えて上がる。

「…えらく腰が低いな。本当にうちと同じ5歳なのかね。見習って欲しいものだが。…にしても、お前

あんなに落ち着きなかったのになあ。落ち着きのおの字もなかっただろ。」

「ああ…そうだなあ。まあ、血は繋がってないからな。」

「ああ、そうだったな。その時からほとんど泣かない子だったから心配だーって言ってたもんなあ。」

「まあな。で、こうなつたわけだが。」

「にしても…ランク9ねえ…凄いな。」

「ああ。俺も若干信じきれねえな。…アリスはそういうのを周りにあんまり言いたくない感じだからまだ良いが…あいつらはどこからともなく湧いてくるからな…」

「そうだな。」

「パパー、どうしたのー？早く来てー！」

「ちよ、バートちゃん、腕が、腕が大変なことになるから！」

アリスは抜けるほど腕を引っ張られていた。

「あら、いらつしやい。」

居間に招かれて、行ってみると、優しそうな翠の目の女性がいた。

「ママ…」

「お邪魔してます。」

どうやらバートの母親らしい。

にしても、バートの声が一瞬震えた気がしたのはアリスの気のせい

だろうか。

「……………なるほどね。…バート、あなた。少し外してもらえるかしら？…あとガーテさんも。」

「え？」

「何でだ？」

バートの父親も訳が分かっていない。

「ちよつと彼女と話したいことがあってね。」

「は、はあ…」

バタン

で、アリスは死ぬほど緊張している。何を言われるものか、と考えていると、バートの母親は紅茶を淹れ、アリスと自分の前にカップを置き、急に話しかけた。

「…さて、ここでは女の子のふりをしなくても大丈夫よ。アリス・セナルさん。…正確には、その殻を被った青年さんかしら？」

「!?な、何の事か…」

必死に動揺を隠そうとするが、無駄だったようで、

「私はね、生まれつき人の心の奥が見えるのよ。隠し事はできないわ。」

遺伝なのか、バートと同じような、目は吸い込まれそうなほど深い翠だった。

「……………はあ……………そうでしたか。」

アリス…もとい、中の青年はため息をつき、答えた。

「ええ。ずっとそれであるのも疲れるでしょう？」

「…いえ、もう慣れましたので。5年もこうやってるんです。…まあ、中性的な話し方がよく分からなかったことはありましたが…」

この人には言っても大丈夫な気がしたから。理由はその程度でいいと青年は思っている。それなら周りにはばれても自業自得となるから。

「ふふ、まあ、そりゃあそうよね。それにしても、別の世界…ですか。」

「はい。僕自身もそう覚えてるわけではないんですけど…」

「そう。…あなたは、こういう状況…記憶が一部のみ残され、更に性別

まで変わった状態で別の世界に転生してしまったことをどう思っているの？」

「…どう…とは…？」

急な質問に少し反応が遅れた。

「そうなつて良かった、もしくは嫌だった、感想は何でもいいわ。まあ、個人的な興味で聞いてるだけだから別に答えなくてもいいんだけど。」

「…そうですね。僕は…ここにこれて良かったと思います。」

「ほう…何故？」

少し意外そうなバートの母親。

「そりゃあ向こうでも楽しかったりしたんでしょうけど、向こうは分からないことが少なすぎたんです。あらゆるものを科学で証明してしまつて、分かることが当たり前になっていました。正直言うと、楽しかったのはそうでしょうけど、面白くはなかったんです。毎日ほとんど同じことしかしなかったの。…そこから言えば、ここは分からないことだらけでした。だから、面白い。そう思っているからです。」

前世の自身に関する記憶は抜けている。

しかし、そこだけは分かった。

「……………そう…そうですね。別に何か答えがあるわけでもないし、答えたからと言つて何も出来る事はないけれど、面白い話が聞けて良かったわ。…ところでいきなりだけど、だけれど、いきなり男性から女の子に変わつて、性的な方の感情とかは入らないのかしら？」

「グフツ…ゴホツゴホゴホ…」

いきなり過ぎる質問に、飲んでいた紅茶が気管に入った。

「ゴフ…ほ、本当にいきなりですね…」

「ふふ、で、どうなのかしら？」

「…残念ながらそういうのは無いんですよ。あくまでも僕の仮説ですが、今、僕の状態は脳がこの僕の状態で、魂…とでも言うんでしょうか。その部分が、この体…私の部分になつてるとだと思えます。考えたりするのは僕が考えて、考えたことに対する批評や、突然の反応は私がする…といったところなのではないかと。そう考えれば、最初、

女の子の着るような服を着たとき、違和感がなかったのも頷けます。」  
「…なるほどね。…でも、私が考えるには、ちよつと違うわね。その考え方でいけば、あなたが今、青年として話していることにかんりの抵抗が感じられるはず。それがないってことは、あなたは、アリスだけではなく、元の青年の部分の魂も持ち合わせている…あなたは今、言うならば二つの魂を持ち合わせている状態…と、そう考えるのが妥当だと思わ。」

驚いた。その通りだ。自分の事ではないのにまるで自分の事のように的確な仮説を述べられる。

青年は、ただただ凄い、と思った。

「…あの子と…仲良くしてあげてね。」

突然言われた言葉に、青年は少し驚いた。

「…ふふ、何で急にそんなことを言うのか、って顔してるわね。…あの子、近所でいじめられてたのよ。…いいえ、今もね。見かけでは気丈に振る舞ってるけど、私にはわかってしまう。」

「…そうだったんですか…」

「原因は分かってるわ。私。…私に変な体質だから、バートも同じよくなやつなんだ、っていじめられてるみたいなの。…貴方みたいな優しい人に会えて、あの子も幸せだと思わ。私から、お礼を言うわ。ありがとう。」

バートの母親は目を柔らかく閉じ、お辞儀をした。

「い、いえー！そ、そんな大したことしてないですよ！むしろ、お礼を言うべきなのはこちらの方です。…ありがとうございます。素敵な友達を作らせてくださって。そして、言うのも躊躇ったであろう秘密を話してください。」

同時に、バートの声が一瞬震えた理由も分かった。

アリスという、せつかくできた新しい友達にまで嫌われたくなかったのだろう。

「……そういえば、もうすぐ魔法学校に入学になるのよね。」

「あ、そうですね。あともう一、二月ほどで。」

ここには魔法学校というものがある。まあ、小、中、高校の複合型

学校みたいなものであり、習うものとしてはアリスが元々いた所とあまり変わらず、理系の科目が魔法に変わる感じである。：重要性はさ  
ておき。

「多分バートとも同じところだから仲良くしてあげてね。」

「はい、もちろんです。」

「ふふ、ありがとう。：じゃあ、たまにでもいいからここにも来てちよ  
うだい。アリス・セナルとしても、中の一人の青年としても。」

「……………ありがとうございます。」

「：で、そこで聞き耳を立てているお三方は何を？」

「！」

「ありや、バレたか。」

「まずい。聞かれていたか、とかなり焦ったアリスだったが、バートの母親は、

「ふふ、大丈夫よ。何も聞こえてないはずだから。」

「あ、そうですか…。」

「察してくれたのか、または読まれたのかは分からないが、ひとまず  
安心した。」

「アリスちゃん、ママと何の話してたの…？」

「アリスは、静かに、少し首をかしげて言った。

「人の内面について、かな？」

「？」

「世の中には知らないほうがいい事もあるけど、知った方が良いこと  
もあるってこと。」

「ふーん？」

「あ、私の事、アリス、でいいよ。」

「！じゃあ私もバート、でいいよ！よろしくね、アリス！」

「どこか安心したように笑うバート。

「うん。よろしく、バート。」

「えへへ♪」

アリスより、少し背の低いバートは笑っていた。しかし、あの話を



聞いてしまったからかアリスには、どこか影がかかっている気がして  
ならなかった。

言うなれば、それこそが「脳は笑うが、魂が泣く」状態なのだろう  
か。

## ウィルヘルム魔法学校

「持っていく物ほぼ無いの？」

「初日はクラス分けだからね。」

「ということだ（どういうことだよ）アリスは今日から魔法学校に通うことになった。」

通うのは、ウィルヘルム魔法学校というところ。

「あ、クラス分けっていうのは実力とか優勢魔法とかで決まるからねー。」

優勢魔法というのは、要は一番その人に合っている魔法ということ。

大体の人はその優勢魔法のみを専攻して他の属性の魔法を使えないようにする。しない人もいるが、しない場合はだいたい魔法の精度が落ちるらしいが。

優勢魔法は、大体の人が火、水、土、草、大気で、極稀に闇や光といった物を操る人がいる。

ちなみに、入学前に算数や国語は大体教えられる。

「じゃ、俺らは先行つとくからねー。」

そう言つてルオリーとアベルは家を出た。

ちなみに入学式とクラス分けの時は保護者同伴が原則条件のため、仕事のガーテの代わりにシャルが連れていってくれることとなった。

「じゃあ、そろそろ行くっか。」

「うん。」

これが意外にも緊張しなかった。恐らくアリスの彼女の部分は普通にこの年代の緊張を知らない年代なのだろう。

「あ、大きい…」

主要な建物は大体バカでかくなるのだろうか。魔力測定の間所もほぼ（というかそのまま）神殿だったが、この学校も中々である。まあ、6から18歳までの人がいるからでかくもなるか。

「あ、そうだ、先週ぐらいに校長先生に相談してアリスのランクは4辺りってことにしてもらってるからね。」

「あ、ありがとう。」

心を読めるのか、それともこれが親心なのかシャルはアリスの性格からして高ランク帯のところにいるのを嫌がるだろうと思い、一週間前、校長先生に直談判しに行っていた。

まあ、五回ほど断られてそこにあつたスタンドライトを魔力でパリンして脅したのはアリスは知らなくていいことである。

「じゃあ、ここからまっすぐ行って、あのお姉さんの所まで行ったら案内してくれるからね。」

どうやらシャルは適度に甘やかし、出来るところは自分でさせる感じの教育方らしい。まあ、アリスからすれば、それぐらいなら問題ない。

「うん。」

「はい、行ってらっしゃい。」

「行ってきます。」

そう言つてアリスは向こうで立つて案内する人の所に歩いていった。途中途中で泣き叫ぶ声が聞こえるが、まあ、保育園や幼稚園のないここでは親と離れるのは恐らくここが最初になるだろうから無理はないか、とアリスは思いながら歩いていった。

その時、

「邪魔なんだよー！」

ドサツ

罵声と一緒に何か倒れる音。思わず振り向いたアリスは、

「ちよつとー！」

思わず声を出していた。

そこにいたのは、まあいかにもヤクザみたいな男と、突き飛ばされたバートだった。バートの両親も慌てて駆け寄っている。

「あ？何だガキ。お前もぶつ飛ばされてえのか？」

「バート、大丈夫？……何でそんな思考になるんだろうね。バートが何かしたの？」

アリスは男を睨んで言った。

「俺の前に立つてて邪魔だったんだよ。」

周りがざわざわする。が、止めようとはしない。まあ、大体の人ならそうだろう。面倒ごとには首を突っ込まないのが一番、そりゃあそうだ。そこには別に腹は立てない。

「…そう。じゃ、私の前にも立ってるから、

邪魔だって倒してもいいんだね?」

「ぶっ…くく…ああ…そうだなっ…くくく…お前に出来るならな!」

笑いながら言っている。

少々灸を据えてやってもいいだろう。そう思い、アリスは男の前に手の平を出す。

「あ?」

その瞬間、

ブオオオオン!

突風が吹き、男が吹き飛ばされた。

「ゴホ…」

「…言ったもんね、やっていいって。…行こう? バート。」

そう言つてアリスはバートの手を取つて歩いていった。

ちなみに、あの男は14歳で、前々からの悪行もあつて退学になつたとか。

「…ここでクラス分けするんだよね?」

「うん…そう聞いたけど…」

「渡されてた番号何番?」

「えーと、56。」

「私は74だから…あ、ここらへんだね。えーと、バートは前から…五列目の左から6番目だね。」

「アリスは?」

「私は…八列目の一番左だ。」

「あー、流石に近くじゃないんだね…」

「まあね。じゃあ、また後でね。」

「うん。」

まあ、入学式は言つてもアリスの前世とそう変わらなかつた。基本的に校長先生と教育委員会(やっぱここにもそういうのあるんだ

なあ)の人の話で8割5分2厘ほど埋まった。

で、いよいよクラス分けである。

まずは優勢魔法を調べ、その後、ちよつとしたバトル(とはいっても大体キヤットフアイトになるらしい)でクラスが決まると言う。バトルは:どちらかと言うと遊び感覚でやれ、とのことだと言う。親睦の一種なのだろう。

「じゃあ、この列の人ーこっち来てー」

まずは優勢魔法の検査。前の人が火だったーとか風だったーとか言っているのを聞きながらアリスの番が来た。

「じゃあ、じつとしてね。」

少し年配風な感じの女性に言われ、力を抜く。すると、

「:~:~:~:~:~:ちよつとごめんなさいね。」

何かあったのか、少し手元の紙を見て、さらさらと何かを書き、

「はい、貴女の優勢魔法は:~:~:~:~:~:」

:~:~:~:~:~:毒です。」

うん?

「:~:~:~:~:~:毒:~:~:~:~:~:ですか?」

「ええ。ちよつとよく分からないけれど、そう出たからね。前例のな  
いたった一人の優勢魔法よ。大事にしてね。」

毒。どく。ドク。Poison. ?韓国語。

「あ、はい:~:~:~:~:~:」

いまいちピンときていなかった。いや確かに、優勢魔法の中でも有名なのが七つって訳で、他にもあることはあるのだが、しかし毒魔法。

いや、確かに、アリスは前世、趣味で生物等の毒について調べたりしていた(何故かこれは覚えている)。

が、ここでは毒魔法なんて聞いたことすらないし、そんなものがあるのかすら分からない。もし、無いのであれば作る必要がある。

アリスは、まあ、まずは家の図書室で調べてみるか、と思っていた。「ありがとうございます。」

アリスはペコリ、とお辞儀をして部屋を出た。

「…で、キャットファイトの会場は…」

もうバトルとは呼ばなくなった。これから行う親睦競技はキャットファイトと呼ぶ。

「…ここか。」

そう呟いてほぼほ体育館らしき建物に近付き、受付らしき人に番号と名前を伝えて、何故か小さな風船のようなものを渡されて中に入る。

「…あ、そういう感じね。」

思いの外広かった。

中では恐らく偶数の人と奇数の人で分けられていた。どうやら番号の連番二人でやるらしい。

勝敗の決め手は、腕に付けた風船が割れば負け、ということ、五分かった場合は引き分けだという。

まあ、大体かかっても2分ほどで終わるらしいが。

幕の外から内を見ると、今丁度バートがやっていた。思いの外中々強いようで、思いつきり魔法を撃ちまくっている。

そのまま相手の腕の風船をパン。

どうやらバートの優勢魔法は水らしい。

その約二十分後…

《次に、73番と74番です！》

番号を呼ばれ、出るアリス。

向こうからも同じように薄い青の髪の少年が歩いてきていた。

「スノア・リードだ。」

「…アリス・セナル。よろしく。」

「……………」

なんだ、挨拶もしないのか、とも思ったが、残念ながらその程度で

怒るほど短気でもない。

「では、はじめ！」

「…風2魔法ウィンドアロー！」

「おっと、」

ドオン

先手必勝か、思いの外ちゃんとした魔法の勝負を申し込まれたようだ。

アリスは風の矢を横にずれて躲す。

「俺はキャットファイトをするつもりはないからな。甘く見てると怪我するぞ。」

どうやらアリスと同じようなことを考えていたらしい。

「…そうだね、分かった。」

「もういつちよ、ウィンドアロー！」

ドオン

「まだ…まだまだ！」

ドドドドドド

ただただひたすらに周りにウィンドアローを打つスノア。この物量ごり押しが意外と厄介だったりする。何せ矢だ。風船に当たれば割れるだろう。守りつつ、攻撃せねばならない。

「くっ…近寄れない…」

「力尽きるオオオ！」

「！」

まるで何かに憑かれたような顔だ。いわゆるこれが必死ってやつだろう。アリスはふっ、と止まり、呟いた。

「そろそろいいかな。」

「…？」

「さて、物量もいいけど、狙い位は定めないとね。ランク1無機物操作。」

アリスが手をスノアに向けると…

ウィンドアローによって壊れた体育館の床の破片が全てスノアに向かって飛んでいった。

ランク1で、軽いものを動かすというだけの魔法。だが、

「!がつ!」

「狙いが定まっていれば、ランク1の魔法でもランク2よりダメージを与えられたりするんだよ。」

「ちつ…俺は…お前より強い!風4魔法ウィンドミサイル!」

ウィンドアローよりもかなり大きな風のミサイルがアリスに向かって飛んできた。

「…火4魔法ファイアオール。」

アリスは火の障壁を作り、ウィンドミサイルを飲み込む。更に火力を上げ形を変えて虎のようにし、少々脅す。

要は勝ちの基準は風船だ。むやみやたらに傷をつける必要はない。

そのままからだを作り、咆哮させる。

一応見た目はものすごい頑張っているように見せかけておく。実際はそんなに疲れもしていないが、一応書類上はランク4の上側となっている。結構それでこれを作るのはきついだらう。

「ひ…ふええ…」

「!」

スノアが泣いたのを確認し、アリスは炎を伸ばし、風船を割り、炎を収める。一応疲れた、ということまで仰向けに倒れておいた。

すると、向こう側からスノアの父親と思われる人が来て、アリスを一瞬睨み、舌打ちをしてスノアを連れて帰った。

「…?」

どうやら良く思われなかったらしい。

まあ、息子を負かして泣かせた相手を良く思わないやつもいるか、と割りきり、アリスは立ち上がった。同時に母親が後にいて、お疲れ様、と言ってくれた。

その後、クラス分けが発表され、アリスはCクラスとなった。

何の縁か、バートもCだった。何気に結構共通点が多かったりする。

まあ、同じクラスというだけなら当たる確率は1/5といったところか。あり得ない訳ではない。



が、何故かアリスが泣かせたスノアもいる。なぜこうなった。まあ、そこはいいとして。

担任の先生も決まり、色々話なども済み、配布されるものは渡されて、今日は帰る。

本日より、アリス・セナールはここ、ウィルヘルム魔法学校で新生となった。

## 楽しい楽しい毒魔法制作く学校

只今家の中の図書室。毒魔法について書かれている本を搜索中。  
が、

「…無い…」

見つからない。本当に存在しないのかもしれない。その場合どうすべきか…毒魔法を作るより他あるまい。優勢魔法が使えない魔法使いはある意味でレアらしいが、そんなことを言っている場合ではない。

「でも毒魔法ってどんなのを…」

魔法に毒の効果でも付けておけばいいのだろうか。そういうわけにいかない。というかものによつては死ぬ。有名どころでいくとテトロドトキシンとか青酸カリウムとか。

「…毒を操るって意味ならどうなるんだろう…無毒を毒にしたり毒を無毒にしたり…とか？」

そうなるならかなり強い気もする。

「…まあいいや、参考では鈴蘭毒のメデイスの弾幕急造で借りよ…」  
とりあえずアリスは、東方Projectのキャラクター、メデイス・メランコリーの弾幕を少し借りることにした。

「…急造の器としてだからちよつと借りますね…」

記憶の中から何とか引つ張り出してきてとりあえず一つ、イントウデリリウムは出来た。

名前を捻れと？ 思い付かんかった。後でどうせ名前もつけるし、まじはこんな感じでいいだろう。が、出せるかどうかは怪しいため、とりあえず外で試射してみよう、と思い、アリスは外に出る。

「スウ…フウ…よし、毒魔法…イントウデリリウム。」

自分の回りから大きな光る魔力弾と、紫の霧のようなものが出ていく。

この紫の霧は移動速度低下と共に、幻覚、若干の錯乱を引き起こすようにした。まあ、とは言ってもそこまで強力なものでもなく、毒霧から出れば晴れるようにしているし、死ぬような毒じゃない。精々弾

幕が二、三倍の量とか大きさに見えるぐらいだし、ちよつと正気を失わせるぐらいだから。

更に、魔力弾は少し立つと20個の小弾幕に分裂するようにしてみた。

「…よし、こんな感じでいいか。…消費魔力は…うん、ランク6魔法の下ぐらいだね。」

これでまず一つ完成、毒6魔法イントウデリリウムだ。

「…まあ、そのうち名前も変えて他のも作るし、まずは一個でいつか。明日が学校であることもあり、アリスは今日は寝ることにした。」

---

### 《翌日》

今日から本格的に学校である。

一応制服もある学校で、昨日配られた制服を着る。なんと言うか…こんな感じなんだなあ、といった感じだった。

「アリスー。準備できたー?」

アベルの声。一緒に行くことになっているからだ。

「うん、できたよー。」

アリスはそう答えてアベルのところに行く。

「…よし、じゃあ行こっか。行つてきまーす!」

「行つてきます。」

ウィルヘム魔法学校は家から歩いて30分位の所にある。大体皆飛んで向かうことが多いが、今日はアリスを連れているため、歩いて向かっている。

ちなみに、箒で飛ぶ、というのは結構前の発想らしく、最近は何も使わずに飛ぶのが主流らしい。まあ、飛ぶ練習をする時に箒を使うことはあるみたいだが。

「…アリス、疲れてない?」

「うん、大丈夫。」

「疲れたら歩くの遅くするから、言つてね。」

「分かった、ありがとう。」

まあ、歩くのにも少し魔力を含めるだけでかなり楽になるもので。そのまま学校に到着した。

「どこの教室か覚えてる？」

「うん。1年のC組だった。」

「オーケー。じゃあ、私は中棟だから、また帰りにねー。」

「うん、じゃあね。」

そう答えてアリスは教室に向かう。が、

「…誰も来てない……」

誰一人として来ていなかった。教室間違えてないよね？等考えた  
が、教室も合っているし、登校日も間違っていない。

要は早く来すぎた。そういうことだ。

「…本でも読んどこっかな。」

そう呟いて本を取り出そうとしたとき、

ガラガラガラガラ

一人男子が来た。何なんだろう、この安心感。

やけにビビられている気もするが、多分気のせいだろう。うん。

が、一人、二人とその後来たが、揃って避けられている気がする。ま  
だ何もしてないどころか初対面だろうに、

と考えていたとき、

「あ、アリスー。」

バートだ。

だから何なんだろうこの安心感。知り合いがいるっていうのはこ  
こまで安心することだったか。

「おはよう、バート。」

「うん、おはよう！」

ふと視線の先にぎよつとした感じの人が見えたため、一度バートに  
聞いてみる。

「…何か私避けられるようなことした？」  
すると、

「あー…何かね、昨日、アリスが私を助けてくれたときに男の人を吹き

飛ばしたのと、最後の勝負(?)の時に泣かしたのがあってか、すごい気性の荒い人みたいに見られてるみたい。ほんとは違うのにな。」

「あー…あれかあ…」

ちよつとイラツとしたのと、できるだけ傷をつけずに勝つ方法をとった結果、こうなったわけだ。…ある意味自業自得か、とアリスは苦笑いした。

「ま、でも私はアリスがそんな感じじゃないってのは知ってるからね！」

「…ありがと。」

まあ、心から優しい人はこういう人を言うわけで。

「あ、そういえばさ、アリス、自己紹介とかどうする気なの?その…ランク、とか。」

「あ、それはね、お母さんが校長先生と話して書類上は私ランク4になってるから、大丈夫。…周りには秘密だよ?」

「もっちゃん!」

バートは明るくて結構おしゃべりだが、大事な秘密等は勝手にしゃべったりしないし、人の嫌がることはしないタイプの人だ。それは信用できる。

「そうだ、バートは優勢魔法何だった?」

「私は水だったよ。アリスは?」

「…何か、毒って言われたけど…大方草みたいな感じだね。」

今使える毒魔法なんか鈴蘭毒1個しかないし、大体毒は虫とか草とかだから無理矢理こじつけで草でいいだろう。

「…毒魔法なんてあったっけ?」

「…昨日調べたけど無かった…だから1個作った。」

「…え、作ったの?」

「うん。参考書手本にして結構…というかなかなり時間かかったけど。実際、あれを作るだけで4時間かかっている。昨日寝たのは1時だった。…寝たの今日だった。」

「凄い!普通作れないよ!魔法なんて。」

「頑張ったからね。」

まあ、参考物があつたからイメージも出てきたのだが、他のやつどうしよう。

まあ、そこは置いておいて、アリスはバートと話していると、ガラガラガラ

担任の先生が入ってきた。

「はい、席についてくださいーい。」

先生の号令で全員が席につき、朝の会を始める。

まあ、色々話があつてルール等を話し、朝の会は終了。まず一時間目である。

「えーと、一時間目は……」

前に書かれたのは、一時間目から総合という時間割。まあ、初めだからこういうことになる。

「じゃあ、それぞれ自己紹介をしてもらいます。出席番号、名前、優勢魔法の後に何か一つ自分の特徴を言ってみてね。どんな食べ物が好きー、とか何とか呼んでねー、とか何でもいいからね。」

アリスは出席番号は2番である。まあ、アから始まるから前半にもなるだろう、とは思っていたが、前に一人いたんだな、と思った。

「じゃあ、言うこと決まった人から手を上げて、当てられたら立って、言つてね。」

先生がそう言うと、アリスの目の前で手が上がった。

「はい、じゃあアイネさん。」

「1番、アイネ・カランです！ランクは5、優勢魔法は草で、好きな動物はハムスターです！」

また元気な。

というかア、イの並びとか出席番号1番不可避じゃないかな？

その後も色々情報が飛び交った。

印象に残ったのは饅頭って呼んでくれていった少年。よく言ったな、それ。それと、好きな動物でガラガラヘビって言った少年。猛毒蛇じゃないか。もしかしたら召喚できるかもしれない、等考えていた。

さて、そろそろ手を上げておかないと最後に言うはめになって面倒

なことになる、とアリスは判断し、手を上げる。

「はい、アリスさん。」

「2番、アリス・セナールです。ランク4、優勢魔法は毒、好きな花はカラーです。」

色々ざわざわする。

カラー。結構形は有名だったりする花。アリスは個人的に結構好きなのだが、どういう偶然かこの花、死ぬほど強い毒性を持っているらしい。齧ったりしたら最後、口の中が使い物にならなくなるほど痺れて痛くなるらしい。

まあ、そこじやなくて多分優勢魔法の方だと思うが、そこも変に追求されることもなく、全員の自己紹介が終わった。

「はい、じゃあ、仲良くしてねー。…先生の名前覚えてる人ー?」

確か昨日言っていたはず…あれ、何て名前だったか…とアリスが思い出していると、

「ユーヌ・アイオライドー!」

誰かが言った。

同時にアリスは、ああそうだ、と思い出した。アイオライドっていう宝石があったため、それで覚えた気だったのだ。

「お、覚えてくれてたんだ。はい、じゃあ私も改めて自己紹介をしようかな。ユーヌ・アイオライド、ランク4で、優勢魔法は石、特技として先生ね、すごい体が柔らかいんだよ。」

そう言いながらユーヌは右足を持ち、バレエのように上に持ち上げる。

「わー!すごい!」

これはすごい、とアリスは思った。足が180度開いている。

「まあ、こんな感じだね。じゃあここから2年間、よろしくね。」

「よーろーしーくーおーねーがーいーしーまーす!」

「じゃあ、一限目はそろそろ終わりね。」

この学校の一時間授業は40分だ。

そのため、少々終わるのが早いのである。

そうとは言えども黒板に書かれた時間割にある、初日から体育とか

いうハードワーク。

「ひー…五限目か…」

二、三、四限はいつでも難しいものではない。そもそもこの世界では国語と簡単な算数、魔法ができていればなんとかなるため、社会等はそのままできつくもない。だが、体育は運動と称して魔法の練習の一つでもある。一年であろうと魔法の勝負もあるらしい。

まあ、アリスが何を言いたいかというと、ここでは体育、算数、魔法が特に大変だということである。



## ハプニング

体育の時間である。

まさか一発目から1キロ走らされるとはアリスも思わなかった。いや、1キロつて少なく感じるかもしれないが、中身と違い、体は小一程のため、一步は小さいし体力は少ないしで結構大変らしい。

いや、そういうと先生が何かヤクザみたいな感じで竹刀肩にかついでオラオラいつてる感じのすごい怖い人想像する可能性はあるが、人としてはすごいいい女性。というか、そもそもこれぐらいはできる体力がないと生き残ることにすら支障が出る可能性があるから、これも優しさってことらしい。

まあ、それでも中々キツイのだが…

「はあ…はあ…はあ…っ……………終わったあ！」

で、何とかゴール成功。

まあ、これでもクラスで中盤ほどだ。

「はい、お疲れ様。」

そう言つて回復魔法をかける先生。やはり優しい。

そのまま休憩すること10分……

「はい、お疲れ様でした。キツかったかしら？」

そりゃあキツかったに決まってるだろう、とそこにいる誰もが思った。

「ふふふ。でもね、体力がないと、魔物に襲われたりしたときとか、非常事態の時とか、逃げなきやいけないとき。そんないざ、つてときに力が出せないとうしようもなくなっちゃうでしょ？だから、大事なこともあるの。大変なのは分かるけれど、ちよつと頑張つてちょうだいね。はい、号令！」

「しせい！れい！」

「二あーリーがーとーうーごーぎーいーまーした。」

そのあとに散り散りになって教室に帰っていく。ここには体操服とかそういうのはなく、基本制服でやる。ただ、この先生は回復魔法が使えるため、汗もそんなに気にならない。出た汗もなかったこと

にできる回復魔法ってどんなだろう、と考えながらアリスも教室に戻っていった。

そして、帰りの会も終わり、帰る。  
アベルを待っていると、

「あ、アリス。」

「、バート。どうしたの？」

バートに呼び掛けられた。が、どこかさっきまでの元気がない。

「えーと……いや、何でもない！」

「えー？絶対なんかあるでしょ？いつもの元気が無かったし。」

「ほんと、大丈夫だから！じゃあね！」

「…うん。また明日。」

何があつたのだろうか、と考える。が、答えが分かるわけもなく、そのままアベルと帰っていった。

そして、家でお使いを頼まれ、家を出て、少し離れたところに行っている途中、

「…が………なんだよ………のく………！」

「…うん？」

妙な声が聞こえてきたため、アリスは足を止めた。

「…こつちかな？」

声のする方に行ってみると…

「おらー！」

かなりの数…30人ほどいそうな人の群れが何かをしていた。

「つたく…気持ち悪いんだよ。」

「！ち、ちよつとー！」

「あ？」

ふと見ると、その大衆の前にはバートだった。

「バート！大丈夫!？」

「んだ、そいつのダチか？」

リーダー格と思われる奴が聞く。

…見た目が某世紀末の漫画に出てくるモヒカンの敵モブなんだが

…

「…だったら何？」

「じゃあてめえも魔物の一種か！」

「…？」

「知らねえのか？どつかの国にはなあ、心を読む魔物がいるんだとよ。こいつもそんな気持ち悪いやつだから退治してやってたんだよ！」

確かに、覺妖怪ってやつはいる。が、それは違う。

「…そう。…そうね…確かに、そういう魔物もいるわ。でも……………」

この状況じゃあんたらが一番魔物なんだよ！」

「はっ？ぐほあっ…！」

一瞬でアリスは移動し、一人の鳩尾を殴って気絶させる。

「あんたら、バートに何かされたの？何か彼女が問題を起こしたの？違うよね。あんたらが言ったのはただ、「気持ち悪い」それしか言っていない。それに、彼女自身はそんな能力も持ってない。持ってるのは彼女の母親。」

「親が魔物なら子も魔物になるだろ…へへ…」

「…その理論でいけば…あんたらの親も根拠なしに人を殴って楽しむような外道になるけど？」

「この…調子にのりやがってガキが！火4魔法フレアショット！」

内一人がアリスに火の弾丸を撃ってきた。

「…水7魔法ウエーブスネーク。」

「！」

が、アリスの放った水の大蛇に飲み込まれ、そのまま男達もろとも吹き飛ばされた。

「がはっ…何だよこいつ…こいつもやれ！」

「…うおおおお！」

一人を除いた全員がアリスとバートに襲いかかってくる。同時に大量の魔法を撃ってくる。が、全てアリスは弾く。一部一部送り返したりしながら全く被弾せずに終わらせる。

「死ね！草6魔法リーフソードレイン！」

空から大量の刃が降ってくる。その時、

「…そろそろ出してやるか。バート、ハンカチか何かで鼻と口押さえてて。毒6魔法イントウデリウム！」

バートに指示をして、ハンカチで押さえたのを確認してから、アリスは新作の魔法を打つ。

紫と緑の霧がどンドン広がっていき、同時に七色の大きな弾幕が四方八方に飛び散る。

「!!?」

更にそれが20の小弾幕に分裂し、襲いかかる。男達には量と弾幕の大きさが3倍ほどに見えている上、行動制限もかかっているため、かなり狂気的な沙汰になっている。

「う、うわあっ！な、何だこれ！」

「こんな魔法…見たことないぞ！」

「ぐっ…う、動きにく…ぐわあっ！」

そうして効果時間が終わる。

ほとんどが満身創痍となっているが、その中のリーダー格が口を開いた。

「はあ…はあ…俺の兄を知ってるか…？ランク8の…この町の支配者だ！言いつければお前ごとき簡単に「じゃあ」…！」

全員がピクツ、と動いた。アリスの発した声そのものがものすごい圧力を発していた。

「言いつけられない体にしてやろうか？」

男達から見れば、アリスの目が赤黒く光っていた。否、光っていた、というより、赤黒いオーラを発していた。更に左目辺りに緑色の多数の蛇の形をした紋章が浮き出ている。

守られているはずのバートでさえ蛇に睨まれた蛙のように、勝手に体が震えてきていた。

「ひ……」

「所詮あんたは何の権力も持ってない。お前の言ってるのはお前の兄が凄いただけでお前は何も凄くないだろ。…そういうの、何て言うか知ってるか？虎の威を借る狐って言うんだよ。」

「ぐっ…てめえ…火6魔法フレイムゾーン！」

男は恐怖を振り払うように大量の火柱を男を中心として高速で広げていく。が、

「…諦めが悪い。リクフアクション<sup>液</sup>・フェノメノン<sup>化</sup>。」

「！」

男達の足元の地面が水のように波打ち、炎はかき消され、男達は沈んでいった。

「ぐっ！があっ！た、助け…」

「うがあっ！」

そして、途中でそれが終わり…

「！ぐ…ぐぐ…」

「…ま、せいぜいそこで喚いてな。人目のないところでやってたのが運の尽きだな。」

全員が首辺りまで浸かって、そのまま地面が元に戻ったお陰で、そのまま固められた土に埋もれていた。

「ぐぐぐ…てめえ…」

「…あ、」

そこで正気に戻った。同時に目から出ているオーラらしきものも止まり、紋章のようなものも消えた。

そしてアリスは片手で顔を半分隠してうつむいた。

「(やっちゃったあ…いや、確かにキレかけたよ？キレかけたけど…いや、この状況で戻しても後が面倒になる…)」

その時、

「…つつ…」

「！バート！」

バートがお腹の辺りを押さえてうずくまった。

「バート、大丈夫!?…痛がり方と箇所からして…肋骨辺りがヒビが入ったのかも…蹴られてたし…ちよつと待って。」

アリスは集中し、緑色の魔法陣を展開する。

「…ヒール」

するとバートが黄緑色に一瞬光り、震えが止まるとお腹から手を離



「あの…アリス、」

「うん？」

「ありがとう、助けてくれて。」

「…ふふっ、どういたしまして。」

放課後に言おうとしたのはこれの事だったのだろうか、等とアリスが考えていると、

「…あ、笑った…」

「？」

バートがふと呟いた。

「いや、アリスってあんまりそうやって笑ったりしないから…」

「あー…そうかな？」

確かに、思い返してみてもあまり笑った記憶が少ない。

「…今日言おうとしたのはそれなんだよね。せつかく友達になったんだし、良い顔授けられてるんだからもっと笑った方がかわいいよーってね。…あんまり人にそういうのは言わない方が良いかなーって思っっちゃって言えなかったんだけど…」

「……………」

驚いた。

本当に優しい子なんだな、と心の底からアリスは思った。同時に本当に重要な事を隠していることも少し心が痛んだ。だが、それよりも…

「……うん、ありがとう、バート。そんなに思ってくれてるなんて思わなかった。」

嬉しかった。本当に嬉しかったのだ。勝手に顔が綻ぶのを感じていた。

「…ところで、アリス。」

「うん？」

「…その籠、お使いの途中じゃ…」

「……あっー！」

すっかり忘れていた。

「あはは、まあ、私を助けてくれてたんだしね。」

「分かってないなあ…助けられたのは私の方だよ。…じゃあね、また明日！」

できるだけだけの笑顔でアリスはバートに手を振った。

「うん！また明日ね！」

バートも憑き物が落ちたような顔で笑っていた。



## 日常の崩壊

あれから4年ちよいたった。

現在、アリスは10歳である。

周りの環境も少し位変わった。まず、一応友達は出来た。ただ、親友と呼べる人は未だバート一人である。

そして、そのバートだが、血筋なのか若干心が読めるようになってきたらしい。今のところは簡単な感情：喜怒哀楽辺りらしいが。

そして、魔法の事だが、アリスは結局専攻はしなかった。それなりの魔法は使える上、そもそも毒魔法自体を作らなければ使えない状況で専攻する必要がないと考えたからだ。

とまあ、そんな感じで（どんな感じだよ）今日もいつも通り学校に行き、帰っていた。

「きゃあああああー！」

「!!？」

突然悲鳴が上がった。

何やらすごい胸騒ぎがしたアリスは、急いで走っていく。

「!!」

その男がいたのはアリスの家の前だった。魔法で作ったのだろう、赤い剣のようなものを持っている。その前にいるのが…

シャルとガーテ、ルオリーだった。

しかし、それだけならまだ良かった。

三人とも、血まみれだったのだ。

「…っお、母…さん…？…お父さん…！…お兄ちゃん！」

「…アリ…ス…逃、げ…」

シャルが言いかけた瞬間、男はそのままニタ、と笑い、アリスに向かってきた。

「……………」



男は仰向けに地面に叩きつけられ、更に地面が波打ち始めて、どんどん男は沈んでいく。

そして、顔が地面から出るギリギリのところで止める。

「ぐっ…ぐあああうっ！」

もがくこともできない、意識が朦朧とするところで魔法を解く。

「ぐっ…はあ、はあ、はあっ！この…ガキ…！」

本当にイラつくが、いまここで手間取っていれば手遅れになりかねない。

そう思い、三人に近づくが…

「はっ……」

ガーテとシャルは心臓の位置を貫かれていた。

ルオリーは喉をやられていた。

「はっ…はっ…はあっ…！」

呼吸ができない。吸えない。

三人とも…脈がない。シャルは何とか魔法で防御した跡が見受けられたが、殺されていた。最後にアリスを逃がそうとした直後、死んだのだろう。

その時、

「な、何だこれは!?!」

突然背中から声が出た。

複数声が出ているところからも、どうやら警察が来たらしい。恐らく埋められているあの男の事だろう。

同時に、

「アリスっ…！」

アベルの声が出た。シャルとはまた違う、優しい声が、ふわっ、とアリスを後ろから抱き締めた。

「…アリス…ごめんね…私が…もうちよつと早く帰ってたら…」

「…違う…何で…何で…お姉ちゃんが…謝るのさ…」

声が震えているのはアリスも分かっていた。

「全部…悪いのはあいつだ…！」

神速。

例えるならそれが正しいだろう。アベルの腕から離れ、一瞬で男の所に跳ぶ。そして…

「ああああああああああアアアアアアアア！」

魔力を固め、刃のようにした物を男の出ている顔目掛けて一突—

ガシッ！

できなかった。アベルがその腕ごと再びアリスを強く抱き締めていた。

「…感情のままに…そんなことしても…あいつとおんなじ奴になっちゃうだけだよ…私は、そんなのいや。アリスは…アリスのまま…私を守る。だから………！」

力が、抜けていく。刃は霧散し、無くなった。

髪も墨が抜けるように黒から白と紫に、目もいつもの赤茶色に戻った。

「……ありがとう、アリス。」

「……え？」

「生きててくれて…私一人じゃ…多分生きていけない…。」

「…お姉ちゃん……」

その後、男はこちら辺で起こっていた通り魔事件の犯人で、ランク7の墮魔導師だった事が分かった。そして、アリスとアベルは、あの三日後に施設に引き取られることになった。

親戚に引き取られる話も出たが、既に子供がいて、あと二人も見れない人や、二人の事ではなく、遺産の事しか見ていない人しかいなかった（流石に前者の方が多かった。とはいっても7：3程。）ため、

施設に行くことになった。

施設と言つても、そこにいるのは学校に行けなくなった子、捨てられてしまった子、親がいなくなつてしまった子はもちろん、まさかの半獣人までいた。

―施設―

「はい、じゃあ、今日からここのお友達になります！アリス・セナールちゃんと、アベル・セナールさんです！仲良くしてあげてね！」

「はーい！」

「よろしくねー！」

「よろしく…お願いします…」

上がアベル、下がアリスである。

こうしてアリスとアベルの施設生活が始まった。

《三日後》

おかしい、とバートは思っていた。

三日前からアリスが学校に来ていないのだ。クラス替えがあつても、二人ともクラスが変わらなかつたため、同じクラスにいるが、三日前の帰りに会つたときからアリスの姿すら見ていない。どうしたのだろうか、と。

しかも、この間担任の先生にアリスの事を聞いていたが、「あー、今はちよつと訳あつてお休み中でねえ…」しか言われなかつた。絶対何かあつたんだろうと思うが、父親からも「今アリスちゃん家は忙しいみたいだから行つちやダメだよ」と言われている。

そんなとき、一つ、会話が聞こえてきた。

「ねえねえ、知ってる？」

「んー？何を？」

「E組のアリスつて子、人殺しかけて謹慎食らつたらしいよ？」

「え、そうなの!?アリスつてあの…超成績優秀才色兼備の？」

「…やたら何か言ってるけど…うん。何かうちのクラスの人が見かけたつて。男の人を埋めて魔法の剣みたいなので顔狙つてたんだつて。警察の人とかいっぱいいて、女の人に止められてたんだつてー。」

「嘘ー！そんなことしそうにないのにねー。」

「人を見かけによらないって事じゃない？怖いねー。」

…え？

そんなはずはない、アリスはそんなことしない。そう思い、バートは走っていた。

気がつくくと、職員室に飛び込んでいた。

「あの一！」

「!?ああ、バートさん。どうしました？」

「E組の担任の先生はどこにいますか!？」

「ああ、ライ先生は今中学職員室にいるよ。」

「あ、ありがとうございます！」

そう言つてバートは中学職員室に急ぐ。

その途中、

「！ライ先生！」

前からアリスの担任の先生…ライが歩いてきていた。

「お？君は……」

「バート・スカービアです！あの……」

「…ああ、アリスさんの事かな？」

黄色い目がバート心を見てくる気がしたが、今はそれどころではない。

「っ！はい！あの、アリスが……」

「……ここではなんだ。もう少し静かなところで話そうか。」

「、あ、はい……。」

そのままライに誘導され、バートは職員室の隣にある生徒指導室（空気がなかったらしい）に入った。

「…で、アリスさんの事だがね…お姉さんから他人には言わないでくれ、と言われているが、彼女の親友の君にしたら良い、とも言われている。…彼女は、この間家族…お父さんとお母さん、お兄さんを、例の通り魔に…殺されたんだ。」

はっ、と息が詰まった。

「その後…彼女は施設に引き取られたんだが…どうにも、ショックが

強すぎたみたいでね…しばらく休むと彼女のお姉さんから連絡をもらったよ。」

「じ、じゃあ、アリスが…人を、こ、殺そうとしたっていうのは…」「これにはあまり関係ないだろうね。…でも、殺しかけたのは事実だ。まあ、正当防衛ってことになってるけど…いやはや、ランク4でランク7を倒そうとするとはね。でも、それで実際倒されかけたんだから、相手も相当油断してたんだなあ…」

ランク7…それならランク9のアリスには敵わないだろう、とバートは思った。本気で戦えばこの学年の生徒全員を相手できるかもしれない程強いのである。桁外れの魔力に前例のない毒魔法使い。更に専攻してないため、他の魔法も使える。そりゃあ勝てない。

「どこの施設か分かりますか!?!」

「えー?ちよつとそこまでは分からないなあ…」

ライは首辺りをかきながら答える。

「そうですか…分かりました。ありがとうございます!」

「あ、分かっているとと思うけど、他の人に言っちゃダメだからね?」

「、分かっています。」

「よろしい。」

ありがとうございます、とバートはもう一度頭を下げ、部屋を出る。

アリスの家近くにある施設は一つしかない。帰りにそこに寄ろう、と思ったのだ。しかし、バートが教室に戻ったとき…

ザワザワザワザワ…

妙に騒がしかった。少し見回してみると…アリスがいた。だが、感情は読めなかった。真っ黒で塗りつぶされているような、そんな感じになっていた。

アリスは重い足を動かして学校に来ていた。もう少し休んでもいいとアベルに言われていたが、既に三日休んでいる。真面目なアリス

は何か学校に来ていた。まあ既に2限目は終わり、3限目前の休み時間だった。

アリスが教室に入るなりザワザワと一段うるさくなっていたが、特に気にしない。アリスの耳にはほとんど入っていないからだ。

「よお、怪物。遅かったなあ。ま、人殺しかけたのを考えれば早い方か。」

一部の人から笑い声が聞こえるが、特に気にしない。アリスにとっては気にしている場合でない。

「……………」

「なんだ、人の言葉も分かんなくなっちゃったか？お？」

アリスには何か言ってるな、位にしか聞こえていなかった。が、次の言葉ははつきりと聞こえた。

「…怪物…？」

よく聞く声。が、いつもはこんなに暗く、沈んだ声じゃなく、明るくて元気な声だった気が…

「…何で？」

ふとアリスが顔を上げると、バートがつかつかと歩いてきていた。

「…あんたら…アリスの状況が見えないわけ？何でこんなに憔悴してるか察せないの？」

見るからにバートは憤慨していた。アリスも、バートのここまで人を傷つけるような顔は初めて見た。

「あ？何だよ怪物。…ああ、そうか。化け物と魔物はいつもセットか。」

また一部から小さく笑いが起こる。

「……………分かった。」

すつ、とバートは自分の後ろに水の槍を構える。

「…水3魔法、ウォーターズピア。」

ヒュン

「うおっと！遅いなあ。へへ…へへ！」

ガン！

とアリスの机が蹴られる。バートが口を開こうとしたその時、



「……………して…」

「あ？」

「…黙って…いい加減にして…！」

ドン！

アリスが立ち上がると同時に、アリスを中心に突然現れた水の流れに男子が吹き飛ばされる。

「ガハッ！」

アリスの目から流れた水は本人の意図しないままに形を作って蛇になり、更に翼が生え、足が生え、龍になった。

「!？」

「もう……………やめて…」

アリスはずつとうつむいていた。そして絞り出すような声をしながら頭を抱え、水の龍が崩れたとき、バートにも、この一瞬だけ感情が見えた。それはこの年齢で持つには大きすぎ、そして深すぎた「哀」。

そこまでバートが考えたときには、アリスは走って教室を飛び出していた。



『ふふふ…』

「わ、…私…?」

もう一人のアリス…否、正確に言えば、黒で塗られたようなアリス…言うなれば陰がいた。

『ほら、もうこうしているのもかなり辛いでしょ？死んだらもう嫌な思いもなくなってすむし、思い出したくない記憶もさっぱり忘れられる。楽になれるんだよ。』

「っ……………」

それでも依然、アリスは陰を睨みながら抗う。陰は少し驚いたような顔をして、

『まだ抗えるんだ…………ふふ、でも、もうあなたの心はボロボロ。私にも壊せるよ。』

「っ！」

すつ、と陰が手を伸ばしてくる。アリスは逃げようとするが、上手く体が動かない。

『ふふ、無駄。…もし心が折れちゃったら死んじゃうけど、私が代わりになってあげる。ちゃんと代わりになってあげるから心配しないでいいよ。』

「う…やめ……………」

『じゃあね、バイバイ。』

そのあと、陰はアリスの何かを掴み、手に力を入れ、

パキン…

やけに乾いた音がした気がした。ガラスのような何かが割れるような音と、糸のようなものが切れるような音。

「……………」

アリスは何も言わなかった。否、言えなくなった。ただ何も言わずに、何とか起こしていた上半身を倒し、崩れ落ちた。そのあと、立ち上がって崖の方に歩いていっていた。そして、崖の上に立ち、一度下を見て右足を出しそのまま落ち…

ガバツ！

「！」

なかった。誰かがアリスの腕を掴んでいた。そこにいたのは、やはり見たことのある緑の髪と目。

「アリス！」

バートがいた。何となく安心できるような声がしている気がするが、アリスはそんなことを考えていなかった。

「……………」

生きることに対して心が折れてしまったアリスは死を求めようになっってしまった。

「ダメっ……！」

「…何で…？何で…止めるの…!?!」

アリスは右手に魔力を込め、光弾を打ち出そうとする。

「っ…確かに、私にはアリスに死ぬな、なんて無責任なことはいえないし、言う権利もない…と思う…。アリスがどれだけ苦しいか、どれだけ悲しいかなんて、私には計り知れないから…でも、個人的に…というか、私が、アリスに死んでほしくないから…アリスにいつも隣にいてほしいから…！止める理由なんてそれぐらいでいい…！」

「…もう疲れたんだよ…！」

右手を出す。

魔力弾が飛び出し、バートに当たる。が、  
「疲れたんだったら…休めばいいんだよ。無理して進もうとなんかしなくたっていいでしょ？でも、だからと言ってリタイア<sup>死</sup>なんてダメだよ…」

それでも、彼女は手を離そうとはしなかった。

確かに、あれに人を殺すほどの威力はない。が、当たれば相当な痛みも生じる。それでも彼女は手を掴んだまま、アリスに話しかけ続けていた。

「…………もう諦めたんだって…」

「…違う…！」

そのバートの声は明らかに怒りを孕んでいた。

「私の知ってるアリスはそんなに弱気じゃない！いつも優しくして、ちよつと無愛想に見られるような所もあつたりするけど…私より

ずつつと立派な人でしょ！」

「……！」

少し、アリスの目に光が宿る。

「いつでも私の側についてくれたのは誰？私の横で笑ってくれたのは誰？私を助けてくれたのはどこの誰!？」

「……………」

アリスは何も言えなかった。少し意識がはつきりしてくる。バートは涙を流しながら言い続ける。

「アリスだよ。…私の一番の親友で…たまにちよつと抜けてるような…最高の同級生…。そんな…そんな私の…大親友を…奪わないで！」  
その声が響くと同時に、陰が吹き飛ばされ、アリスから離れた。同時に、反動で二人は崖から離された。

「！アリス！」

「バ…バート…」

『っ…！何が…！こうなったら…！』

陰が高速でバートに近づき、鎌のような腕を振り…

陰の腕が吹き飛んだ。

『っ?!な、何が…！』

バートの前にいたのは、アリス。毒を身に纏い、霧の羽織を来た、天人のような彼女の目の縁には少し水が浮かんでいた。

「…もう惑わされない。」

ぐっ、と手を握る。

「…もう死にたいなんて思わない。」

光球が体の周りで回り、どんどん加速する。

「…もう、誰も死なせない…！」

目が右が真紅、左が茶色に分かれる。

「！」

「…だから…いや、これが…」

決意を込め、一拍――

「LIGHT OF DETERMINATION…！」

その瞬間、辺りがあり得ないほど眩しく光り始めた。太陽の光が全方位から照りつけるような、例えるならば、神光。

『が…っ！ぐあ…がああああ…！』

陰は叫び声を上げ、ボロボロと形を崩していき、しまいにはそれこそ影も形も無くなっていった。

「…はあ……ありがとう…ごめん、バート。」

「良いんだって…いてて…」

「あ、…ちよつと待ってて。」

アリスは緑色の魔法陣を展開し、バートに向ける。あの時と同じように。

「…ごめんね。」

ふとアリスが口を開いた。

「…ううん、大丈夫。アリスが謝ることなんかないよ。…助けようと思つたら逆に守られちゃったしね。」

「いや、バートがいなかったら私とつくに死んじゃってたよ？正真正銘、バートが助けてくれたから私はここに生きれてるわけだし。」

「…良かった…はっ…」

「？バート？」

「う…しろ…！」

「？…！」

バートが指差した方を見ると、さつきバラバラになったはずの陰が、魔力弾を打ち出したところだった。

「っ！」

ドガアアアン…

何とかギリギリでアリスがバリアを張ったため、光弾は通らなかつ

た。

『はあ…はあ…やりや…がったな…！この…！』

「っ…」

アリスは体勢を整えようとし、

『はああっ！』

「！」

一瞬隙ができた。そこに陰は魔力を固めた剣を…

「水4魔法、ウエーブスピア！」

ガキイン

バートが荒ぶる水の槍を陰に向かって投げた。それを破壊しようと剣を振った瞬間、

「油断したな…！毒9魔法…オオズメバチの猛攻！」

六角形の魔法陣から蜂のような弾幕が大量にばら蒔かれ、更に追尾してくる。勿論魔力で作っているため、生きているわけではないが、オオズメバチの毒と同じようなもので作っているため、止まられるだけで同じような症状が出てくる。

『くっ…な、何だ…これは…っこんなもの…ぐうっ…』

更にアリスが解除しない限り執拗に追いかけて続ける&殺してもすぐに新しいのが出てくる。が、これにも弱点はある。

「……………っ…」

まず、魔力の消耗がかなり早いのだ。持続して使役しているような状態のため、結構消耗が激しい。さらに、水に弱い。これは、オオズメバチそのものの毒の特性で、水溶性だ。陰は一応生き物…と言えば生き物のため、毒は効くのだろうが、水を使われるとどうしようもなくなり、ただ魔力を浪費しただけになる。

『この…水6魔法、フローウィングリバー！』

…こういうことだけ運が良い。本当になぜそうなる。

「…っく…」

威力が高いため放ったが、下手に魔力を使いすぎるのは得策ではなかったらしい。

「アリス！」

「はあ…はあ…っ！」

『くっ…散々手こずらせてくれて…どうもありがとうね！』

陰が大量の魔力弾を打ち出す。

終わった、二人がそう思った瞬間、

「日5魔法、サンレーザー。」

ドドドドドドドオン……

『なっ……！』

レーザーが横から飛んでき、影弾を打ち消した。そして、

『あ、あんたは…』

「…その二人はうちの学生だ。とりあえず、消えてもらおうかの。」

ウイルヘム魔法学校校長、老人のような見た目だが、実力は確か。元魔法騎士団、ランク8日魔法使い。今年350歳ジャスト、ラシル・イハトールン。

「日8魔法、バーニングフレア。」

ヒュウウウン…ドガアアアン…

熱弾幕が陰を覆い、周りを飛び回りながらどんどん近づいていつて、触れた瞬間爆発した。

「…ふう、大丈夫だったかな？」

「は、はい…」

「すみません…色々…」

すっ、と校長の後ろからライ担任が出てきた。

「まあでも、怪我がないように良かったよ。…よくあれを相手できていたね。」

「あれが何か…知ってるんですか？」

バートが聞くと、校長は少し頷き、

「…シャドー。精神状態の不安定な者をそそのかし、自殺させて成り代わりを働く魔物。平均的にランクは3〜6とされておる。あいつは恐らく5辺りじやろう。」

「ランク5…ですか。」

アリスはふと呟いていた。

「ああ。さて、早く戻りなさい。…アリス・セナールはとりあえず、今



日は帰った方がいい。もし心配ならば、勉強はそのお友達から教えてもらうといい。」

「…はい、そうします。」

「じゃあ、バートさんは戻って、アリスさんには転移を使うよ。」

まあ、この二人がこのあと、めっちゃ怒られたのは言うまでもない。

## ただの対談

あの事件の後…

「…校長、」

ライは校長室にいた。

「彼女…アリス・セナールは何者ですか？…ランク7の魔導師を一人で瀕死にさせ、更にランク5の魔物を不安定な精神状態で防ぎきれ。…ランク4、しかも子供に出来ることではありません。」

「何者もなにも、彼女は一人の少女じゃ。10歳のな。」

校長…ラシルは静かに答える。

「…そういう事では「分かっている。」っ、」

「ああ、分かっているとも。彼女が本当にただの魔法使いか、じやろ？」

目付きが鋭くなる。腐ってもランク8ということだろう。

「…はい。山に入った時に響くような声で宣言された毒9魔法、オオズメバチの猛攻。そんな魔法はこの世に存在しません。そもそも毒魔法そのものが発見されていません。更に、毒9魔法…誤解の宣言か、もしくは…」

「本当にランクが9…と言いたいのか？」

「……はい。そう考えれば様々な事に合点がいきます。それほどの魔力があれば、新しい魔法も作り出せるでしょうし、ランク7の魔導師を倒すこともできるでしょう。それに、毒魔法などと言う未知のものを制御しきれられるかもしれません。」

ライは少しうつむき、答える。

「…そうじゃな。が、感じたものはそれだけではないだろう？」

しゃべり方が変わる。これがラシルの本来のしゃべり方だ。これを出すということは、即ち相当重大な話だ。

「！……はい…彼女からは二つの気配が感じられました…一人の人間から二つの気配がするなんて事はあり得ません。気配というのは、魂が発するものなのですから…一人の人間に二つの魂を宿すことは出来ません。」

「それは私も会った瞬間に感じた。恐らく、彼女には彼女しか知らない秘密があるはずだ。…誰にも見抜けない…いや、見抜かれてはならないような、そんな、な。」

「ラシルも、全く分らない、といった様子でこめかみを押さえた。………」

「それに彼女、何かがおかしい。そもそもあれほどの魔力を使いこなせている時点でかなりおかしい。まだあれほどの年代では簡単な魔法を使える、もしくははある程度の方向矯正しか出来ないはずだ。…あんな大量の魔力の塊をバラバラに動かすなんて子供どころか、そこから辺の魔法使いでも無理だろう。」

「あのとき、アリスの出していた弾幕は50を下らなかつた。精々一般の魔法使いは10の魔力の塊を操るだけでも精一杯なのだ。」

「ただの才能で出来ることではない、と?」

「…ああ。…可能性としては、人並外れた天才の子供が人並外れた努力をした…もしくは…転生した…」

「転生…ですか。しかしどうにせよ、分からないことが多すぎます。」

「…4年E組1番、アリス・セナール…それに、同じく4年E組19番、バート・スカービア…か。」

「そう呟くと、ラシルは手元に二つの書類を出現させた。」

「、バートさんですか?」

「彼女は感情が読めている。…そういう能力は遺伝もあるが、受け継いだのは彼女の15上の兄の方のはず。…彼女には遺伝子上は受け継がれていても、量が少なすぎて発現することは無いはずだった。…にも関わらず、能力が発現した…」

「そう。スカービア家のような特殊能力を持つ家系は、年長の子供が受け継ぐようになってる。にも関わらず、バートは能力を出現させることができた。」

「アリスさんの魔力に当てられ、能力が発現した、と?」

「可能性は無きにしもあらず、だ。…要観察なのは変わらないが。」

「そうですね…」

「…にしても、それでもいくつか疑問は残るな…」

「と、言いますと?」

「まず彼女、気づいていない可能性もあるが、魔法を使う時に若干魔力とは違う、何かが紛れ込んでいる。」

正確には、とてもよく似ているが違う何か、液体で例えるなら、水の中に無色のアルコールが溶けている物を見ている感じだという。

「…はあ。」

「次に、魔法の名前。普通魔法は古くからの呪文となった言葉を引き金とする。が、その名前は大体片仮名で表される。それがどうだ。彼女は言葉を切り抜いたような物で扱っている。呪文も何も使っていない、アレはただの宣告しているだけ。」

最初の魔法の宣告としていっているもの。あれもれっきとした呪文なのだ。それによって魔力を安定、変形させ、魔法を扱う。が、アリスの宣告は本当にただの宣告。何の意味もなく、言うなれば「こういう魔法を使いますよー」みたいな感覚に近い。つまり、魔力を安定させなくとも高威力の魔法を扱う事ができているのだ。

「……………」

「最後に、彼女、若干ではあるものの、魔眼を持っている。ただ、その性質も不明だ。」

あの目の色が二つに別れた瞬間、シャドローの魔力が著しく低下した。恐らく魔眼の能力だろう。

「…！魔眼も…これは…やつらの標的にされますね……………」

「そんなことが無いようにしないと。」

やつら…とは、人買や人攫い、誘拐魔といったやつらだ。あれほどの魔力を持つ少女はとんでもない高値で売れるのだろう。まあ、そんなじよそこらの人攫い程度なら軽くないなして逃げれるのかもしれないが。

「…本当に…何者なんでしょうか?」

「それは私にも分からない。が、何らかのイレギュラーであることに間違いは無いだろう。」

「…はい。」

「ま、それも戦力の一つじゃ。まだまだあれは蕾のようなもの。それ

を開花させることができるのは、儂達大人しかおらんのじゃから、やるしかないの。」

再び、元のしゃべり方に戻る。つまりこれで話は終わり、ということだ。

「…その花が…綺麗な普通の花となるか、もしくは毒花となるか、それを決められるのは過程に与えられる水や肥料でも決まる。…責任重大ですね。」

「だから担任をライに頼んだんじゃがな。頼んだぞ。」

「…はい。」

そう答えてライは校長室を出た。その後にはいたのは、場所も異なるも刻は同じ。

「…アリス・セナール…か。」

## 縁

「~~~~♪」

突然だが、アリスは結構散歩が好きだ。まあ、理由としては頭の中で余計なことを考えずに、自分の好きなことを考えながらできる簡単なことだから、らしい。が、もはや規模が散歩の域を越えて転移を使ったレベルまでになるとどうだろうか。

ちなみに、今彼女がいるのは山の中。施設の裏の山ではなく、その一つ奥の山である。そこで探検がてら散歩していた。

その時、

「~~~~い何かいる……？」

微かに何かが動く音がした。アリスは鼻唄を歌っていたが、周囲からの音にもそれなりに敏感だ。魔物の類いならとりあえず臨戦態勢をとっておきたい。そう思いながら慎重に歩いていると、

「……………い」

一匹の魔物が倒れていた。

…これが普通の魔物ならそつと離れるのが常であろう。

……………何故、龍がいる？しかも、その中でも強い部類の影龍。サ

イズは…20メートル程あろうか。

影龍というのは、龍族の中でも指折りの上位に入る龍だ。主に闇を操り、というか自分の体の一部を闇と同化させることもできる。その爪や鱗は光を飲み込むような漆黑で、薬や装飾などにおいて重宝され、密猟が後を絶たない。現在そのせいでこの世界に100もいないとされている。そのため、危害を加えるのは禁止されたはずなのだが

…

「…………寝てる……？」

一瞬そう思ったのだが、寝ているのではなかった。  
ふと視線を落とすと、赤い水溜まりが広がっていた。

「っ！怪我してる……！」

すぐにアリスは近寄り、怪我の箇所を魔力を通じて探す。  
すると、

「……あつた……でも、多すぎる……！」

縄張り争いにでもやられたのだろうか、もしくは密猟者か、とてつもないダメージを負っていた。が、死んではない。

「光7魔法、ヒール……！」

急いで黄色い魔法陣で影龍を囲い、治療に当たる。すると、

「グオ……グアアアアアアア！」

傷が痛むのか、咆哮をした。その勢いだけで吹き飛ばされそうになるが、耐えて治療を続ける。

「頑張つて……もうちよつと我慢して……絶対治すから……！」

「グルル……」

その時、

『……才い、人間。』

「！」

ふと声があった。が、誰の声かは分かる。

「……何？」

『なにを……しテイる？』

影龍だ。怪我のせいとか、思念の言葉……というかイントネーションがおかしい。

「治療に決まってるでしょ……ちよつとでいいからじつとして……」

『……回復したら……お前を喰い殺すかもしれないゾ？』

「その時はその時。対抗できる力を持ってなかったっただけ。……というか、そんな気があればそんなこと言わないでしょ？」

『……クク……ソウか……そうだな。お前は相当変り者みたいだな。』

「そうだね……変わってるとはよく言われる。……さて、あと十秒位……」  
会話をしながらアリスは魔法陣にさらに魔力を込める。その約十秒後……

「…グオオオオオオオ！」

影龍は再び、天に向かって咆哮した。

『…助かった、人間。礼を言おう。』

「いいよ、お礼なんて。こっちが勝手にやっただけ。多分だけど、怪我させたのも人間でしょ？ だったら私は同族だし。」

『それでも助かったのは事実だ。ありがとう。』

そう言っつて影龍は漆黒の羽を羽ばたかせ、風を起こしながら空に昇っつていった。

「…ヒュー…焦ったあ…まさかこんなところに影龍がいるとは…」

その時、

「こっちだ！こっちに落ちたぞ！」

「本当に大丈夫なのか…？あの影龍だぞ…」

「バカ、そんなのにびびつてたらハンターの名が廃るぜ？」

「だが、万が一バレたらどうすんだよ…」

「バレる訳ねえだろ。ま、万が一バレたらそいつを殺しちまえば良いわけだしな。」

「ちよつと待て、誰かいるぞ！」

「！何…!?ハハ、何だガキじゃねえか。」

男達五人が出てきた。

「…？」

アリスは一応首をかしげておくが、なぜここに来たかは分かる。

要は、こいつらは違法ハンター。さっきの影龍を捕まえ、爪や鱗を売り飛ばすつもりだったのだろう。影龍は捕まえたり勝手に勝手に攻撃したりしてはいけないのだが、こういう違法ハンターが結構いる。

「おう、嬢ちゃん。ここら辺に真つ黒な龍を見なかったか？」

「、見ましたよ。」

「お！どこにいた？」

「逃がしましたけど。」

「…は？」

間拔けな顔をする五人の内一人。

「怪我をしていたようなので、ヒールをして逃がしましたよ。」



「いや、バカな、何でお前みたいな子供が影龍に…」

「？私は真っ黒な龍としか言っていないのに、どうして影龍だと？真っ黒な龍なんてたくさんいますよ？」

「…！」

「まさか、違法ハン「おらあ！」かつ…！」

ガッ

突然、後ろから蹴り飛ばされた。どうやらもう一人いたようで、突然の不意打ちに、アリスは地面を転がった。

「くっ…」

「へっ！」

そのまま口元にタオルのようなものを押し付けられる。同時に意識が遠のいていった。

「……………は…っ！」

目が覚めるとトラックか何かの荷台のなかだった。まあ、最終そこはいい。

「くっ…！…！」

首と両手、両足に枷がはめられていた。

「…毒5魔法…！…ああ、封魔の枷か…」

しかも魔力を封じる素材でできたもの。魔法もろくに使えない。更に、似たような境遇の人たちが十数人、眠って…いや、眠らされていた。

「…なるほど、人攫い…ね…」

違法ハンター兼人攫い。どんな野郎だ。

その後も色々試してみたが、ダメ。何をしても手枷も足枷も壊れるどころか傷一つ付きやしなかった。すると突然、トラックが止まった。そして後ろの扉が開かれると…

「…あ？もう目が覚めた奴がいののか。嗅がせたら十時間は寝たまんまだっつってたのに…まあいい、出る！」

「…はあ…」

ため息を気づかれない程度につき、出ると、そこには…

「っ！」

恐らく1000を超える人の群れ。

アリスが後ろを向くと、他の人も運び出され、何らかの薬で覚醒させられて今の状況を認識させられているようだった。

《本日もお集まりいただきありがとうございます！では、商品。まずは、この少年！ランクは5、力はそれなりに強いものです！魔法の操作は人並みですが、人体実験の被験体など良いでしょう！》

どうやら競り場のようだ。

そうして、一人、また一人と売られていった。が、売れなかった人は再び、トラックに入れられていた。来たのとは違うトラック…《人体処理行き》と書かれたトラックに…

アリスは本当にキレかけていた。この時ばかりはこの手足の枷がなければ皆殺しにしていただろう。

《さあ！本日の一発の目玉商品…この少女！えー…ランクは7以上ほぼ確定！相当腕の立つものです！奴隷にするも、実験台にするも、壊れるまで犯すも、お好きなように使えます！》

「なんと！ランク7以上がほぼ確定…」

「本当なのか！」

「はい。ヒールを使っていた時点でランク7以上はほぼ確定でございますー！」

「こいつは何としてでも手に入れたいものだ…」

「では十万からです！」

「五十万！」

「いや！百万だ！」

「二千万！」

「おっと！いきなり跳ね上がりました！」

「ぬー！二千五百！」

「三千！」

「五千だ！」

「七千五百！」

もう後半は聞いていなかった。とりあえずどうやって全員を救出し、逃がすものか、とばかり考えていた。

流石のアリスも地獄に自分から行くほどチャレンジャーではない。その上、ミスをすれば他の人も巻き込んでしまう可能性がある。

「何をー！一億五千！」

「二億だ！」

「二億！二億が出ました！これ以上はございませぬか！…決定です！二億で落札です！」

「…どうする…考えろ…考えろ…」

しかし、焦っては考えが纏まらない。

「そら、行くぞ。」

しかも中年のおじさんのようだ。よく二億も出せたな、と思ったが、確にお金は持っているらしい。それより、枷を外された瞬間、ぶっ飛ばしてやろうと考えていた。が、男は枷も外さず、じつとアリスを見て、

「何だ？その反抗的な目は…お前は今から俺の奴隷なんだよ。…返事しろ！」

「…違う。私は私。あんたの奴隷なんかにならない！」

その瞬間、横から拳が飛んできた。その衝撃にアリスはバランスを崩し、倒れる。防御魔法も発動しないため、かなりダメージを受けた。

「うっせえな…次そんなこと言いやがったらマジで殺すぞ？」

「この…！」

それでもアリスは何とか反抗しようとするが、

「…分かった。服従しない悪い子には…こうだ！」

仰向けに転がされ、上を向けば、光弾が。

「おらあつー！」

が、

ドドドオン…

「！」

すぐにそれらは爆発し、効力をなさなくなる。

「何…!？」

ふと見ると、昔アベルがくれたあのリボンが淡く光っていた。それが障壁を張ったのだ。が、それもあまり持たず、すぐに割れた。

しかし、男の気を逆立てるには充分すぎたようで…

「…殺す。」

さつきとは桁の違う量の光弾が現れた。すると、それと同時に、

空が闇に包まれた。

## 第一章 魔王討伐(?)

——が仲間に加わりました

「何だ?」

「雲か?」

人々が騒ぎだしたその時、

『哀れな人間ども…!我が恩人にこのような仕打ちをしようとは…いい度胸ではないか!』

「う…うわああああ!か、か、影龍だ!」

闇の中に金色の目。あのアリスが助けた影龍だった。

『金が欲しいならくれてやる!五億だ!』

そう影龍が叫んだ瞬間、影龍は急降下し、同時に空から大量の金貨が降ってきた。と、影龍は光弾をも飲み込み、男を吹き飛ばし、着地した。が、よく考えてみれば金貨は相当重い。それが空から降つてくるとなれば…後はご想像にお任せする。

『ふん!』

ズシイイイイン…

「……………」

アリスが呆気にとられていると、

『…借りは返さねばな。ここから逃げる方法はあるのか?』

「…あるにはあるけど…ちよつとこの人数相手には…いや、30秒あれば…」

アリスははつとし、少し辺りを見回す。杖や剣を装備する人が多数見えたが、アリスがそう言うのと、

『…分かった。30秒だな?』

そう言つて影龍はアリスの手足の枷を黒光りする爪で壊し、真つ黒の球体で包んだ。

「…ありがと。」

そう呟き、アリスは詠唱をする。本来は無い、完全なオリジナルの詠唱だが…

「…ふう……詠唱、七大基礎魔法におきて最たる力を発す火…それは恵みをもたらすと同時に災いをも巻き起こす…我が中に潜み、基礎から外れし魔力を司り、善にも悪にもなりうる力を持ちし御、毒の支配者、一柱…災いと共に乗り、悪しき者を罰し給え、」

外では影龍が黒い炎を吐き、参加者の魔法を打ち消しては戦慄させていた。

「…善し者を守り給え、」

同時に、影のドームが消え始めた。もえ30秒経つたのだろう。だが、アリスの方も完了した。目は二色に分かれている。紅赤と、茶。

「なっ、何だ!?魔法が…使えなくなつた…!?!」

「全てのを救い給え!」

火、毒10魔法、判決の神紫炎!」

そう宣告した瞬間、アリスを中心に紫と黄色の炎が上がり、ものすごいスピードで辺りを焼き尽くしていく。さらに、

「がっ…ぐ、ぐあああ…」

いわゆる毒火。かなり毒性の高い炎だ。それは、その者の業の量によってダメージが増減する特殊な光。

僅か十数秒の出来事だった。

その十数秒でそこにいた犯罪者は全員、罪に見合ったダメージを負った。ただし、死ぬほどではない。

売られた人は解放され、体力や状態異常も回復された。が、反動で全員気絶しているようだ。

『…驚いた。これはまた未恐ろしい。』

「失礼な。」

『だが、そこも気に入った。』

「…?」

そう言うと影龍は自分を影で包み始めた。そして…

「グルル…」

手のひらサイズになり、アリスの手に乗った。

『これは我が意思だ。お前の従者となってやろう。…言っておくが、拒否権はない。すでに契約したからな。』

…ここまで逆に強引な契約があっただろうか。

ちなみに、契約アグリーメントというのは約束を守らせる楔くさびのようなもの。使用した者が死ぬか、破棄しない限りは継続し、破った場合その大きさに応じた罰が下される。罰は設定者が決める。アリスは、どんな内容にしたものやら、と思い契約内容を見てみると、

「この人間をこの影龍の主とす。」

とだけ書かれており、罰の欄には、

「代償…命」

……………どうしてこうなった。

まあ、どう言おうがアリスに選択肢など無く、

「……………うん、よろしく。じゃあ、一つ目。とりあえず契約アグリーメントを破棄しようか。とりあえずこつちで掛け直すから。あと、敬語を使うのは止めてね。柄に合わないから。」

そう答えるより他なかった。多分そのまま掛けなかったとすればまた無茶苦茶な内容になるのは目に見えていた。

『ああ。』

ー契約が破棄されましたー

「……………こうだったかな？」

契約が破棄されたのを確認してから、アリスは朧気な記憶をたどり、何とか再び掛けることに成功。内容は…

「この影龍を契約使用人の友人とす。」

「代償…無」

先程の影龍が掛けたものを参考にして掛けた。それを影龍は確認すると…

『友人…？主従関係を結ぶのではないのか？それなら、代償も無し…契約アグリーメントの意味無くないか？』

そう言うが、アリスは、

「別に私は契約とかそういうのは気にしてないし、そもそも、友人相手に下手な代償求めるものでもないよ。まあ、代償なんか思い付かなかったのもあるけど…」

『…そうか。なら、よろしく頼むぞ。』

「ふふっ…あ、名前とかどうしよう…流石に影龍って言うのは味気ないし…あれ、名前あったりする?」

今更だがアリスが影龍に聞くと、

『いや、無い。ここら辺では影龍は私しかいないものでな。ずっと影龍と呼ばれていた。』

「そっか。うーん…じゃあ…ナイトメア…とか?」

パツと思いついたのを言ってみると、

『悪夢か…私に丁度の名だな。では、そう名乗ろう。影龍のナイトメアだ。』

まさかの承諾された。

「…うん。よろしく、ナイトメア。…そういえば私の名前も言っていなかったね。私はアリス・セナル。ウィルヘルム魔法学校四年生。アリスって呼んでおいてね。」

『ちよつと待った、アリス・セナル?』

「?うん。」

ナイトメアがアリスに聞いた。

『…この間シャドーの中の馬鹿が力量差を凶れずにアリスって奴に挑んでにやられたって聞いたが…もしや、シャドーに襲われたか?』

「あー…うん。ちよつと精神的に参ってた時期にね…」

『なるほど。ちよつと監視を解いたらすぐこれだ。全く…』

ナイトメアはこめかみ辺りを押さえてため息をついた。

「あ、管理下の魔物だったの?」

『ああ。一部の影系統の魔物はこつちで管理しているからな。シャドーもその一種だ。』

「あちゃー…校長先生のバーニングフレアで消えたよ、あのシャドー。」

『あー…校長と言うと…ラシルか。あいつならならやりかねないな』



…つと、そろそろ日が落ちそうだぞ。』

「うわっ！まずい！早く帰らないと…つてそういやここどこ!?」  
本当に今更である。

『アリスの来た方から反対方向に山を二つ越えたところだぞ。』

ナイトメアは平然と答えるが、

「山四つ越えなきゃいけないなくなった…さっきので魔力かなり使っちゃったし…どうしよ…」

『なら、』

パサツ、とナイトメアは飛び、元の大きさに戻った。

『これなら数秒で帰れるぞ。乗れ。』

「…ありがとう。」

『…ふ、ふん。』

あ、照れてる？思いの外かわいいところあるなー、とアリスは心の中で考えておく。

その時、

「アリスー！」

「！お姉ちゃんだ！」

アベルの声がした。

『おつと、人に見られるとアリスとしてはまずいか?』

「あー…お姉ちゃんは大丈夫だろうけど、ダメな人もいるかも。」

アベルはアリスの考え方を肯定してくれている。が、魔物と人間の共生など考えられない、と言う人もいるのだ。

『なら戻っておこう。』

そう言つてナイトメアは再び手の平サイズになり、アリスのポケットに隠れた。

「！アリス！つて、何この状況!?!」

今更感すごいが、確かに言われてみれば、アベルからすれば変な状況だ。何せ妹が大量の屍の中心にいるのだから。

「あ、お姉ちゃん…」

今気づいたような反応をするアリス。

「何でこんなところにいるのー！」

「…誘拐されたというか…」

「…この人達に？」

「あー、うん。」

「全然戻ってこないから…心配したよ…！」

「ごめん…なさい。」

「にしても…よくこの量の人の相手できたね…」

「詠唱を使ったんだ。」

普通、魔法使いは自分のランク以上の魔法は使えない。が、詠唱によつて必要魔力を下げることはできるのだ。そのため、ランク9のアリスにもランク10の魔法が使えた。しかし、アリスの使ったような詠唱は、どちらかと言えば自分の魂（正確には、自分を守ってくれている守護霊…と言おうか）から力を貸してもらったための詠唱に分類されるため、オリジナルの詠唱は相当作り出すのが難しいのだが…

「まあ、最終そこはいいや。早く帰らないと。」

「うん。…あ、あと十何人かいるんだけど…」

「えっ、どこに!？」

辺りを見回すが、どこにもそういう感じの人は見当たらない。すると、ポケットからアリスにしか聞こえないように思念通信で、

『さっき元に戻った瞬間に全員を影の通路に入れておいた。気がついた時にはそれぞれの家に戻ってるさ。』

と伝えた。

「あ、ごめん。見間違いだったのかも。」

「そう…う…ならいいけど、ここから施設までは流石に離れすぎてるか…あ、どうしよう。」

が、アベルはランク3。ランク4の転移魔法は使えない。更に、ここに来る際に使った飛行のお陰で魔力がかなり消耗している。

「…若干時間かかるよ。」

そう言つてアベルは指で地面に直接魔法陣を書く。魔法陣を出現させる魔力を節約するためだ。そもそも魔法陣は魔力を伝達させるための基盤にすぎないため、最終、紙に書いても、そこに存在しているならば魔法は使えるのだ。

「…よし、じゃ、行くよ。」

ヒュン

---

---

ヒュン

「ふいー…まあ、戻ってこれた。良かった良かった。」

まあ、なんとか成功したため、戻ってこれた。

ちなみに、流石に色々ありすぎた上、ランク10魔法をブツパした  
アリスはそのまま寝て、次の日の6時まで起きる事はなかった。

## 急転直下

ある日、施設の庭でいつものように魔法を練習していたアリス。一応ランク2から10までの魔法は一つは作れたため、それを使いこなすための練習だ。すると、

「お嬢さん、ちよつと良いかな?」

「へ、あ、はい?」

いつの間になっていたのか、見知らぬ男性に声をかけられた。20代前半といったところか。

「えーと、僕はこういう者なんだけど…」

すつ、と出した名刺には、

フェンリオ魔法騎士団 団長 クロド・フェル

と書かれていた。

フェンリオ魔法騎士団というのは、この王国直属の騎士団であり、魔物の統括者…魔王の討伐を目的とする団体のことだ。この頃魔王が復活したという話はちよくちよく耳にする。

「は、はい。で、何か用でしょうか?」

「ああ。君、名前は?」

「私ですか?…アリス・セナールです。」

「そうか、アリス。…うちの団に入らないか?」

「……………え?」

結構心の底から、え?が出た。

アリスは見た目は完全に小学生の中、高学年…見られても小6程度だ。確かにこういう団に入団する年齢制限等はないが、それでも10歳前後の少女を入れるような団はよほど人手不足でもない限りそうない。

しかもこの団は王国直属。入ろうと思っても入れるものではない。そのため、勧誘などする必要もないほど入団許可をもらいに来る人が来るはずなのだが…

「…私…ですか?」

「ああ、君だ。」

即答で返された。

「…いえ、私よりも、もつと適任な方がいるはずです。それと、私とこちらでは少し考え方が違うと思いますので。」

「…？考え方が違う、とは？」

しまった、というように口を隠すアリス。が、それでは誤魔化せられないと思い、言う。

「…私は、あなた方のように魔王の討伐などは考えていません。むしろ、それは間違っていると思っています。確かに、魔物達は人間を襲います。でも、あなた方も同じですよ？相手の陣地に入り、魔物を倒す。魔物達から見ても同じですよ。安全な暮らしがほしいから相手を倒すより他ない、そう考えているだけだと思います。相手を恐れすぎるあまり、攻撃という手法がとられているだけであり、冷静に考えることができれば魔物が人を倒すことも、人が魔物を倒すことも必要なくなれるのでは、とっています。何も、倒す事だけが方法ではないということですよ。…人を殺めかけた私が言えた口ではありませんが。」

クロドは、少しばかりポカンとしたようにしていたが、何とか意識を取り戻し、

「…………いや、驚いた。その歳でそんなことを考えられているなんて本当にすごいと思うよ。実は、君の事はこの間の魔法新聞で知ったんだ。名前は載ってなかったけど、親御さんが亡くなったなら施設に預けられるのがほとんどだし、ここら辺には施設は一つしかないからね。その中で、特徴に合う人を探したわけさ。…にしても、ランク7の魔法使い…魔導師をたった一人でのせる実力は相当だ。だから勧誘してるのさ。魔法使いの枠が少なくともあと一人欲しいと思っいてね。入団許可をもらいに来る人はいるんだけど…どうもお世辞にもそんなに強いとは思えなくてね…君のその考え、皆と親父にも言ってみるよ。許可がとれたらまた来る。その時までを考えておいてくれ。」

この場合の「親父」は「国王」である。

それに、魔法新聞と言った。魔法新聞は、かなりの魔力を持つもの

が見られるものだ。言えば前世のスマートフォンで言う有料オプション、と言ったところか。そしてこの見た目でも団長という辺り、中々な実力の持ち主なのだろう、と思っていた。

「……………分かりました。」

承諾せざるを得ず、アリスは承諾してしまった。

「ああ。じゃあ、一応連絡用にこれ、渡しておくね。」

そう言っただカードのようなものを渡された。

「…これは…?」

「少し魔力を込めれば連絡できる代物さ。じゃ!」

そう言っただ飛んでいった。

「……………まずい、どうしよう…」

あまり入団する気はない。そもそもアリスはあまり目立つのも得意でない。が、せつかく誘ってくれたのをすぐに返すのもどうかと思っただのだが、もう少し頭を捻れば良かった、と思っただいた。

「グル?」

「ああ、メア。どうしよう…」

ポケットから出てきたナイトメアに相談するが、

『それは…アリスが決めることだろう? 我が口を出すところでは無い、かと。』

そう言っただポケットに沈んでいった。

「、アリス。どうしたの?…っただそれ!」

と、アベルが出てきて目を剥いて言っただ。

「?」

「そのカード!まさか…魔法騎士団に勧誘されたの?」

「え、何で…?」

何故分かったのか、とアリスは首をかしげる。

「そのカードを持つてるのは魔法騎士団だけなのよ。それを持つてるっただことは…勧誘を受けて考えがまとまっただら連絡してくれ、とか…そんな感じじゃないと持つてるはず無いの。」

「…うん、さつき…」

《かくかくしかじか》

「…って事があって…」

「…え、フェンリ才魔法騎士団？あの王国直属の？」

「…うん、らしいね…。」

そう言った後、一拍――、

「…ルナさあああああん！アリスがあああ！」

破裂した。

「ちよ、お姉ちゃーん！」

何かすごい勢いで飛んでいったアベルをアリスは後ろから眺めるぐらいしか出来なかつた。メチャ速え。この時ばかりはアベルは音速の壁を破つたのだと思う。

ちなみにルナというのはこの施設長。

「ええ…えー…どうしようどうしようどうしよう…！」

なら、無理なお願いを条件にしてみるか、と考える。最もらしい理由をつけて。その時、

「アリスー…うわあああ!？」

「うわつとー！」

バートが来た。同時に曲がり角で猛進してきたアベルとぶつかりそうになった。確認してくれよ、と心の中でアベルに言い、バートの方に行く。

「バート、おはよう…って時間でもないか。」

現在11時。

「でも私起きたの1時間前ぐらいだよ?」

つまり起床時刻10時。

「…何時に寝たの?」

「いつも通り10時半位?」

つまり約12時間睡眠。

「…寝過ぎだね。」

「私も思う。…とところで、何かあったの?」

アベルとアリスを見比べながらバートは聞く。

「?何で?」

「アベルさんの感情がすごい「喜」があふれでてるから…アリスは何か

困ってるみたいだけど。」

その通りである。

「あはは…お見通しだね。実は…《かくかくしかじか》あつてね…」

「…すごいじゃん！入るんでしょ？いいなあ〜」

「いや…そういうのはちよつと…」「すみませーん。」「…嫌な予感がする。」

このタイミング、このさつき聞いた声。…うん。確定。早くないか？

「あ、いた。親父と団員に君の話をしたら驚いてたよ。「確かにそういう話もあるかもしれない」ってね。親父も承諾してくれたよ！」

「…そうですか…」

まさかこんな早く承諾とれるとは思わなかった。別れて10分経っていないにも関わらず団員と国王に話をしてしかも二つ返事で承諾してもらえるとはい。

そしてこういうのは会議とかそういうのがあるのではないのか？と思つたが、そういや国王は時間を操る魔法が使えるらしい。そう考えれば時間はほぼ無限にあつたと考えても差し支えない。

「で、入団してくれる？」

「……………あの、」

「うん？」

これは普通に入りたくないからとかではなく、本当にアリスの願いだ。

「…もう一人、入れられませんか？」

「えっ？…人数としては上限10人だから、あと3人大丈夫なんだけど…誰を？」

「あくまでも本人の許可をとらないと分からないのですが、私の親友です。彼女には心…感情を読むことができます。それをスキルアツプさせることができれば、更に力強い仲間になれるはずです。そして、何より、私を助けてくれた人でもあります。…決して足手まといにはなりません。」

「…そうだね。君の親友ということなら一緒にいた方がいいだろう。」



その子のランクはいくらだい？」

「…4です。」

「4か…まあ問題ないだろう。分かった。返事が来たらそのカードで教えてくれ。じゃあまた後で。」

ヒュツ、

と消えた。その時、

「え、アリス？」

「、？」

「え、私…？」

バートだ。

「うん。だって、バートは私の親友でしょ？友達がいた方がいいじゃん？それに…バートがいれば私もある程度自制できると思うし。」

流石にあんな暴走はあまりしたくない、というのも大きい。その時の記憶はあやふやだが、アリスは、かなりヤバかった、とだけ聞いている。自分のしたことの記憶がないのは結構怖いらしい。

「いや、でも、私は弱いし…」

「いいや。バートは強いよ？誰も持っていない能力ちからがあるじゃん。」

「お、お姉さんとかの方が！」

「お姉ちゃん、自分自身は魔法騎士団とか死んでも入りたくないっていう位だからなあ…」

事実である。アベルはランクは3だが、魔法の精度は天才級に高く、集中すればランク8レベルの複雑な魔法陣もかけるような人だ。そういうところから過去に二度、団に勧誘されたこともあったが、どちらもばつさり断ったのだ。彼女いわく「騎士団とかは私に合っていない」らしい。

「ええ…」

「…もしかして、迷惑だった？前にバート魔法騎士団とか入ってみたって言ってたし、お父さんとお母さんから許可をもらえれば良いかと思ってただけど…」

「う、ううん！その…私で良いのかなーって…」

「いや、バートがいいんだけどね。」

少し驚いた表情になり、ふっ、と笑って、

「……………ありがとう。…パパとママに聞いてくるね！」

「うん。」

アリスも少し笑って返す。

まあ、返事はもちろんのごとくOKをもらい、連絡しようとするも誰もカードの使い方がいまいちよく分かっておらず、途中何か煙が出てきて大変なことになりかけたりしたが、なぜかナイトメアが使い方を知っており、アリスにこっそり教えてくれて何とか連絡が成功し、クロドがクローズラインという魔法騎士団専用の服を二人分持つてきて、明日また迎えに来るからそれまでに準備しておいてねー、と言っただけ消えた。

ちなみにクローズラインというのは、団員専用の服であると同時に防御魔法の魔法式が書き込まれている服だ。しかも周りの大気から魔力を常時吸い込み、例え防御魔法が破壊されても時間が経てば回復、修復されるようになっていられるらしい。さらに、身に付けると透明になるという。

それより、彼は瞬間移動ばかりしているが、歩かないのだろうか、とアリスは考えていた。

王宮での…

「じゃあ、二人とも。」

「はいー！」

「はい。」

アリスとバートはクローズラインを身に付け、施設の前にいた。

「まあ、言っても二カ月位だろうけど、よろしく頼むよ。再度自己紹介するが、団長のクロド・フェルだ。」

「バート・スカービアです！」

「アリス・セナルです。」

「よし、じゃあ、少し待ってね…二人に合った武器を渡すから…とりあえず親父のところに行くか。」

少々揉めたかもしれないな、とアリスは思っていたが、別にそういうわけでもないらしい。まあ、そっちの方がいいのだが。

「じゃあ、かなり離れてるから、転移するよ。」

そういつたとき、

「アリスー！」

「あ、お姉ちゃん…」

「ま、間に合った…！これ…」

すると、アベルはアリスのリボンに触れ、術式を描いていく。すると、リボンに魔力が込められていき…

「あ…」

元々白かったリボンが少し光り、青い模様が浮き出た。

「…お守り。どうなっても私がそばにいますと思ってるね。…私は魔法騎士団とか柄じゃないけど、いつでも見守ってるから。」

「…ありがとう。」

「ふふ…き、行ってらっしゃい！お土産話楽しみにしてるからね。」

その言葉には、無事に帰ってきてね、という意味も込めて、アベルは言った。

「…うん、分かった。行ってきます。」

「終わったかな？じゃあ、この魔法陣の中に入れてくれ。」

指示に従い、円の中に入る。と同時に魔法陣が光り始め、一気に眩しくなった。

で、その光が晴れると、

「うわあっ…！」

かなり大きい建物：王宮の前に転移していた。

「すごい！」

バートもかなり興奮しているようで、目を輝かせている。

「じゃあ、入るから、少し大人しくしておいてくれよ。」

「はい！」

「はい。」

そう返事をするのを聞くと、クロドは少し頷き、扉に手を当てて魔法陣を展開する。すると、

ガチャツ　　ギイイイイ…

何十キロもありそうな扉が重そうな音を立てながらゆっくり開いていった。

その中はまた豪華な造りになっていた。アニメとかゲームでよく見るような城そのまんまだった。

「…規模が違う…」

アリスも、王宮がかなり大きいものとは分かっていたが、さすがに大きすぎやしないだろうか、と思っていた。いくらなんでも規格外すぎる。大体、王宮自体は国王の住所&仕事場の兼用でもあるわけなのだが、こんなに大きい意味があるのだろうか。そもそも何人、人がいるのだろうか。廊下を通るだけでも、アリス達は魔法で作られた人形の従者含め、30はすれ違っている。

「本当だよ。こんなに大きくする必要があったのか、僕も聞きたいところなんだけどね…」

首辺りを少しかきながらクロドは言った。

恐らく聞いた瞬間不機嫌になったりするんだろうな、とアリスは考えておく。流星にそれは子供っぽい気もするが、国王と王子の関係ならともかく、もしかしたら、親子間ではそんな感じなのかなあ、とも。

「…さ、ここだ。」

そんなことを考えているうちに、一際大きい扉の前に着いた。

コンコン

「親父、二人を連れてきた。」

そうクロドが言うのと、

キイイイ

扉が勝手に開きはじめた。

「うむ、入れ。」

「失礼します。」

アリスとバートはちゃんと一言言ってから入る。クロドは特に何も言わずに入り、扉を閉めた。

「さて、君達がクロドの推薦した二人だね？」

「はい！バート・スカービアです！」

「アリス・セナールといます。」

国王は、少し頷き、

「私はケニヒ・フェルだ。少しの間だが、よろしく頼むよ。」

「はい！」

「…ところで…君達はそれぞれ特殊な力を持っているとか。」

それぞれ…？とアリスは思った。毒魔法の事だろうか。

「ああ。バート・スカービアは他人の感情が読める。アリス・セナールは前例のない毒魔法を展開することができるって。」

クロドが代弁する。

「なるほど…面白い。では、バート、といった者。」

「は、はい！」

「私の感情を読んでみなさい。」

「……………」

そう言われると、バートはもう一度、はい、と答え、少し目を閉じ、深呼吸して目を開け、集中する。

「……」「喜」と「哀」…？いや、哀じゃない…「楽」…！」

「…これは驚いた…かなり深くまで読めるようだな、なるほど。…では、アリスという者。」

「はい。」

「君の魔法を見せてみなさい。…そうだね…この魔導人形ゴイレムでいいか。」

「ちよー親父！それは」

ケニヒが一体の魔導人形を選んだとき、クロドが叫んだ。

「いや、問題ないさ。」

が、クロドが言い終わる前にケニヒは言葉を遮って言った。が、アリスは何となく察した。クロドと焦りようとケニヒの謎の笑み。

「（…こりや試されてんのかな…まさかとは思うが嫌われては……ないとは言い切れないか。）」

恐らくあれはかなり上位の魔導人形なのだろう。恐らく普通の子供じゃ相手にならないレベルの。だが、アリスは…

「分かりました。」

そう言って一歩前に踏み出す。

「…よかろう。じゃあ、少しそこに止まっておれ。」

そうケニヒは言って、右手をこちらに向ける。すると、バリアのようなものが現れ、一部…アリスと魔導人形を囲んだ。

「これなら外に無用な影響を出す必要もあるまい。じゃあ、始めるかの。」

そうケニヒが言うと、魔導人形はアリスに飛びかかってくる。が、

横にそれて避ける。

魔導人形はそのまま魔力を形にし、剣の形にして構えて突進してくる。

「くっ…！」

アリスは体を捻り、なんとか避ける。

「なんだ、応戦しないのか？」

「…」

そんな暇があるかよ！とアリスは心の中で反論し、体勢を整える。そして、一瞬できた間を使い、魔法を使う。

「イントウデリリウム…！」

光弾と毒霧が全方向に広がっていく。

「ほう…」

が、剣で弾かれ、当たらなかつた。それに、そもそも意思のない者に錯乱も何もない。

魔導人形が何か言い、アリスに飛びかかる。しかも、速度が比べ物にならない。

「っ！く…」

ギリギリ躲したが、体勢が崩れた。その瞬間、

「！は…」

目の前に火球が迫っていた。アリスは何とか腕を前でクロスさせ、防ごうとするが、

「っ！あつ…っ…！…」

クローズライン自体はそんなに簡単に傷付くものではないが、素肌が出ている手はかなり焼かれた。

「はあ…はあ…っ」

毒は薬にもなる、ということから、手の甲に火傷薬のようなものを出し、治す。が、いちいち治癒が終わるのを待っている暇などないため、反撃に出る。

「…火属性なら…！」ウエーブスネーク！」

水の蛇を三匹出し、一気に魔導人形に猛進させる。回避をしようとするが、別角度から向かわせたものに当たり、怯んだところにもう二匹も当てる。

「…！…」

が、ほぼ全く効いていないようだ。

「！何で…まさかっ…！」

全属性魔導人形。全ての基礎属性の魔法を扱い、それぞれに対して抵抗も持つ特殊な人形。そんなものをぶつけられたのか。

「…（気付いたか。だが、考えすぎだ。）」

「はっ…」

考えたその一瞬、魔導人形がかなり大きな魔法陣を組み終わらせた。

終わったな、とケニヒは思った。が、アリスは少し笑い、

「…かかった。曼珠沙華！」まんじゆしゃげ

アリスがそう言うのと、魔導人形が赤い細かな弾幕の檻のような物に取り囲まれる。

その形は、まるで曼珠沙華。彼岸花

「…チエックメイト。」

そういつた瞬間、

ヒュン！

何かが跳んだ。

「！」

他の魔導人形がバートのところに跳んだのだ。魔導人形は勝手には動かない。そして、ここにそれを動かせるのは一人だけ。

「っ！」

ケニヒだ。

「この…おおおお！」

曼珠沙華を解除し、バリアに阻まれようが一瞬のうちに破り、魔導人形達に…

「毒9魔法…八岐之大蛇！」

横に一閃、バートを取り囲むように青い竜のようなものが放たれ、魔導人形を吹き飛ばす。そしてバートの前に立ち、九つの蛇の頭を前に向ける。

「この…！」

アリスの目がオッドアイになり、右目が赤く光った。その時、

ドドオオン…

どこからともなく…というより、この部屋の至るところから爆発音が。そして、土煙と共に…

約二百の、目が赤く光る魔導人形が現れた。

「なっ…！」

「うっそだろ…！」

「……………何がしたい。」

アリスは聞く。



「…何でバートを狙った。」

ケニヒは困ったような顔で笑うのみ。

「答えろっ！」

その声と同時に全ての魔導人形が体勢をとる。

ちなみに、アリスは魔導人形の動かし方なんか知らない。つまり、これはただアリスの魔力に当てられただけで動いているのだ。

「…お前さんの本気が見たかった。それに尽きる。嘘だと思ってもらっても構わん。が、クロドから聞いた話、君は好きで人を傷つけるものではないと見た。が、感情が高ぶればその真価が発揮される、ともな。お前さんはその友人を守るために本気を出した。それは紛れもない事実…素質ありだ。入団を認めよう。」

そう聞いたとき、正直結構本気でキレるかと思った。そんなことのために友人を傷付けようとしたのか、と。

が、アリスは一度怒りを押さえつけ、深呼吸して落ち着かせる。

「……………」

アリスは何も言わず、魔力を収めて踵を返す。同時に全ての魔導人形達から赤い目の光がなくなり、ドササツ、と崩れ落ちる。

「……コホン、じゃあ、行こうか。」

「……はい……」

「はい。」

「ああ、クロド。後でちよつと来てくれ。」

ケニヒが言うが、クロドは特に反応せずに部屋を出た。

「…本つ当にごめん！親父色々おかしい所があるんだよ…ありやキレても当然だよ。」

「まあ…冷静に考えるとちよつと暴走しかけたのもあれですが…」

今になってアリスは軽い貧血のような症状が出てきていた。毒9魔法に加え、あの量の魔導人形の操作。本来ならぶっ倒れて気を失ってそのままお釈迦になってもおかしくないような量の魔力を使っているのだが…

「…つと、じゃあ、僕は親父に呼ばれたから…おーい！ルーザー！」

すると、ルーズと呼ばれた、がたいの良い肌のやけた男性がすつ、と出てきて一言、おう、とだけ言った。

「みんなのところに連れてってやってくれ。僕親父に呼ばれてさ…」

「なるほど頑張れ。あ、言つとくがちゃんと呼んでこいよ？」

「そりやもちろん。」

そんなことを言つてクロドは少し外す。

「さて、お前達が新しく入るっていう二人か？」

「あ、はい。バート・スカールビアです。」

「アリス・セナルです。」

「オーケー。俺はルーズ。…ルーズだけだ。名字と名前の区別がないからな。とりあえず合流するか…と言うかあいつらどこに行ったんだか…」

「…え、迷子ですか？」

バートが聞くと、

「いや、今は散らばってるから全員を集めるのには少々時間がかかるだけさ。」

全員カードは持つてるしな、と付け足してカードを出して何やら言つた後、とりあえず、と広場に連れていかれた。

## 旅立ちの都&最初の町

「お、来た来た。」

広場で待つことおよそ10分。アリス達を含め、8人が集まった。

「あれ？団長は？」

「国王に呼ばれてるってさ。」

「ふーん。ま、そのうち帰ってくるか。…あ、君たちが新しく入ってきた子達？」

「クロドが推薦したって言ってたけど…何と言うかパツと見あんまり強そうでもないけどな…」

と、口々に言っていたとき、

「悪い！遅くなった！」

団長、クロドが戻ってきた。

「遅いわよ、団長。」

「……………おかえりなさい……………」

「ああ、遅くなった。…じゃあ、それぞれ、名前ぐらい言っておこうか。団長、クロド・フェルだ。」

改めてクロドが自己紹介をする。

「バート・スカービアです！」

「アリス・セナールです。」

続いてバートとアリスも自分の名前を言う。

「副団長のヴァイス・アドジョントだ。よろしく。」

まず、クロドよりも少し背の高い、黒い服を着た男性がヴァイス・アドジョントと名乗る。

「火属性剣士、アレグロですーよろしくね！」

次に、赤い髪で、見るからに元気オーラが出まくっている女性はアレグロと名乗る。

「土属性重剣士、ルーズだ。」

そして、さっきここまで案内してくれたルーズが言う。

「遠距離アタッカーのバレット・アラコ。で、こいつがゼロ。よろしく。」

肩に何か、小さい蛇のような動物を乗せた男性がバレット・アラコと名乗り、肩の蛇のような動物をゼロ、と紹介する。

「タンク兼ヒーラー、ジャンヌダルクよ。呼び方はジャンヌで良いわ。よろしくね。」

杖を持った、銀の装備に包まれた女性がジャンヌダルクと名乗り、  
「…多属性魔導師…マリオネット・レオンブル・シノワーズ…：よろしく。」

最後に、白の混ざった銀髪の、一見するとアリス達より年下にも見えないこともない女性がマリオネット・レオンブル・シノワーズと名乗った。

そして、それぞれの自己紹介が終わり、説明に入る。

「まず、二人はまだ未成年だ。当然、勉強も必要だから、二人の世話係は…マリオネット、良いか？」

「……………分かりました…。」

何と言うか、表情の読めない感じの人だが、団員の人達が言うにはこれが彼女の通常運転らしい。

等々説明を受け、最後に、

「ふむ……………そして、これが最大の問題だが、バトルの場合だ。相手を殺さない場合、どうしてもリスクはかなり高くなってしまふ。何せ相手は殺す気で襲いかかってくるからな。そこはどうするつもりだ？」

クロドがアリスに聞くが、アリスも一応考えてはいる。

「…今考えているのは、それぞれの攻撃そのものに封印魔法をかけておくんです。本来、魔物も凶暴化するものではありませんが、魔王の復活と同時に発せられる邪気によって攻撃性が上がる…と聞きました。そこで、魔王との繋がりを間接的に絶つてしまえば一時的ではあれ、下手に戦う必要もないと思います。…封印魔法につきましては、こちらで前から勉強していましたので、私もそれなりに扱えます。」  
するとクロドは少し頷きながら、

「…なるほど。その手があったか…つまり、封印…というよりは、封印結界内への転移魔法…ということではないか？」

「、その通りです。」

封印の障壁によって区分された場所に転移させる魔法、ということだ。

「ほー…中々考えてるじゃん。それは武器とかに前もってかけとくものなの？」

アレグロが聞くと、

「はい。武器にかけておけば後は継続的に発動してくれるので、下手に魔力を使うことはありません。」

アリスは明確に答える。

「…よし、その手で行こう。皆、武器を出して。」

そうクロドが言うと、全員が武器を取り出す。長剣、大剣、魔導書、弓矢や杖等だ。すると、

「…手伝うわ。それぐらいなら私もできると思う…。」

「あ、ありがとうございます。」

マリオネットも手伝ってくれるという。

「……………」

二人は並べられた武器に手をかざし、魔力を込める。少しすると、武器それぞれに黄色い何かの模様らしきものが描かれていき、消えた。そして…

「……………終わったわ…。」

「、これでか？あんまり見た目は変わらないが…。」

「確かにかったですか？」

「…大丈夫…ちゃんとかかっているから…。」

「マリオネットが言うならまあそうか。」

どうやら結構信頼されているらしい。そしてクロドが…

「さて、そろそろ出発だ。…の前に、さっきこつそり適性を測った後で、二人に合った武器を買っておいたんだ。さっきのに巻き込ませておいたから、こつちにも転移魔法はかかっている。こつちがアリスちゃんので…こつちがバートちゃんのだな。」

アリスには紫に、幾何学模様が白で描かれている本、バートには透明な装飾のついた青い杖が渡された。

「あの、これ何も書かれてないんですが…。」

が、アリスへの本は、中身が真っ白だった。何も書かれていない、未使用のノートのようなものだった。

「ああ、それは自分で魔法を書き留めていくタイプの魔導書ね。」  
と、ジャンヌが横から教えてくれた。

「聞けば専攻してないとか。それじゃあ属性の魔導書なんか持ったところではほとんど使えないしな。自分で使える魔法をそこに書いていけば、いつでも使えるようになるよ。…あ、それ最後の方に基本的な属性魔法が七属性、それぞれ十個書かれてるから、書き込むのは自分の自作の魔法にするといいよ。」

と、バレットが言う。どうやら基礎魔法は元々入っているようだ。向こうではヴァイスがバートに杖の使い方を教えていた。近くの人から聞くに、ヴァイスの優勢魔法は水、特に氷らしい。そうこうして、説明が終わり、出発しようとしたとき、

「クロド団長！一言お願いします！」

「今回は魔王討伐ではなく和平交渉だという話も出ておりますが、本当でしょうか!？」

「あと、10歳ほどの子を団に入れたというのは!？」

「説明はどうかさるおつもりでしょうか!？」

「クロド団長!こちらにも少し!」

「団員の皆さんはどう思っているんでしょうか!？」

マスコミだ。この世界にもアリスの前世のと同じく、ああいうマスコミはいるらしく、しかもどんな魔法を使ってくるか分からないため、その人達より相当厄介らしい。が、今回は想像以上のヤツがアリス側にはいた。

『ええい!うるさいぞ!』

「グオオオオアアアアアアア!」

ナイトメアだ。

アリスのポケットから飛び出し、マスコミの前で元に戻る。

『貴様ら!我が主達に何の用だ!これから忙しくなるというのに貴様らなどの相手などしてられんわ!』

ちなみにだが、影龍は、一応契約上はアリスとの友人となっている

が、一方的に主と呼んでいる。

「か、か、影龍!!」

「嘘だろ…しかも、今我が主達ってことは…」  
が、思考もそこままで、

「…メア。」

『、』

「…勝手に出てこないでって言ったでしょ…あーもう…」

アリスが少々頭痛を感じ始めたところで、

「マスコミの皆さん、退いてください。僕たちにはやる必要があるんです。…もし、まだ続けるといふのなら、ある意味公務執行妨害にも値しますよ。」

「!」

ザワザワザワザワ

一気に更に騒がしくなったところで、

「早く行くよ。今日中には次の町に行っておきたい。」

「二はい!」

「…で、彼の事だけど…」

「……………グルル」

ナイトメアはアリスのポケットから顔だけ出している。体は影にしているため、厚みはないのだ。

「すみません…黙っていて。ちよつと色々ありまして…」

「いやそこよりさ、よく影龍を使役とか出来たねー。それに、ナイトメアだっけ?名前。」

「はい…使役と言いますか、何故か気に入られました…」

「影龍に気に入られる奴なんかそういないよ?大体龍族って単一性生物が多いからさ。契約するのなんか力を認めた奴とかで、友好的な契約するのなんか聞いたこともないよ。」

そう。龍やドラゴンというのは普通、ほとんど友好的ではない。そ

もそも他からの干渉が必要ないため、契約自体しないのだ。たまに龍と契約するものも聞くが、ほとんどは余程の力を認めたか、もしくはデマ。友好条件的な契約はほとんど…というより、あり得ないのだ。「私に位言ってくれても良かったじゃん。」

バートが口を尖らせるも、

「いや、実はこうなったのついでの間なんだよね。それでまだ言えてなくって。」

本当である。アリスがナイトメアと契約したあの事件から、まだ一週間ほどしか経っていないのだ。

「そんな急にねえ…というかクロド、最初の町ってどこなんだよ？」

ヴァイスが聞くと、

「ああ、もうじき着く。そこでとりあえず一泊して、明日からアタックだな。」

「登山かよ。」

ルーズが横から突っ込む。どうやらルーズとクロドは幼馴染みのような感じに見えていた。

そうこうして…

「着いたぞ。とりあえず今日の町、ウームランドだ。」

そこは、アリスが思っていたより豪華な町だった。

その後、ちゃんと宿も見つかった頃には夜になっており、とりあえず町の散策などは明日に回すことになった。

「…は良いんだけどさ、」

「二部屋しか空いてなかったんだよね…男女で分かれて泊まろう。」

そうか、とアリスは思った。

ゲームの中ではそういうプログラムのため、何人仲間がいようと泊まれたし、何ならインペントリのような所に仲間がいる場合もあるが、現実だとそうもいかない。部屋にも限りがあるのだ。そこで、男女が分かれて泊まることとなった。



―部屋―

「あ、そうだ、今のうちにアリスちゃんとバートちゃんに私たちの事知っというてもらおうよ!」

「あー、そうですね。クロドさんとヴァイスさん、バレットさんも呼びますか?」

「レディの部屋に男を入れるわけにはいかないわね。向こうに押し掛けましょ。」

こうしてアレグロは突入計画を一人で練り、一人で実行した。

まあ、突入する直前に外に出ようとしたルーズが戸を開けてそこにアレグロがタツクルを食らわせる事になったのだが。

それを後ろから見ていたアリス達だったが、その中でアリスはプルプルしながら笑うジャンヌダルクと一緒に、初めて、少し楽しそうにマリオネットが笑っているのを見た。

「……なるほど、それでこっちに来たと。」

「…はい。」

「アレグロ、まずお前その元気、過剰過ぎるだろ。元タンクの俺じゃなかったらぶち抜かれてもおかしくなかったぞ。」

「は〜い」テヘ

反省の様子が見られないアレグロを見て、ルーズははあ、とため息をつき、

「ま、でも知ってもらうってのは大事かもな。じゃ、クロドから。」

「え、僕から?」

周りも、まあ団長だし、と同意し、クロドから各々の話が始まった。

## 町散策

あの後団員全員の話聞き、同時にアリスとバートの話もしてから、少し駄弁り、部屋に戻ったのは8時辺りだった。そこから夕食をとり、眠った。

そして次の日…

「あ、おはようございます。」

アリスは目が覚めたため、とりあえずベッドを整理して、少しストレッチ的なことをしていたところ、ジャンヌが起きた。

「アリスちゃん、おはよう。早いね…私まだちよつと眠いよ…」

少しあくびをしながら言うジャンヌ。

「目が覚めたので…うん？」

と、

「……………」

二段ベッドの上からマリオネットが見ていた。

「し、シノワーズさん、おはようございます…いつから起きてました？」

「…おはよう…アリスが起きる…30分前位から起きてたわ……」

「全く気づかなかった…起きるの早いですね。」

「……一日3時間寝れば問題ないの…」

俗に言うショートスリーパーというやつだという。

「3時間…!?私7時間は寝ないと無理…あ、ここで寝てるアレグロさんは起こさなかつたら永遠に寝るよ。」

「永遠に…ですか？」

「うん…まだこの団がクロド団長とヴァイス副団長、ルーズさんとアレグロさんしかいなかったときに、アレグロさん、起こさなかつたら一日半寝てたことがあつたらしいから…」

一日半。36時間睡眠。普通はそんなに寝たら頭が痛くなるなり何らかの不調が出そうなものだが、アレグロは何も問題なかつたらしい。

「ええ…」

「日中元気すぎるからその分の体力カバーしてるのかもね。」  
「……………あり得そう……………」

と、マリオネットが言った後、

「うーん…あれ、」

「、バート、おはよう。」

「え、アリス…？あ、そうだった。」

バートも起きたが、どうやら家だと思っていたらしい。

「さて、ということはアレグロさんが一番寝坊助さんね。」

「まあ、36時間寝るような人なら…」

「え、36時間も寝てたの!？」

「らしいよ。」

「ええ…」

反応もアリスと同じだった。

「さて、起こしますか。」

ジャンヌが腰に手を当てて立つ。そして、

「朝ですよ！起きてください！」

「うわああ!？」

アレグロ…ではなく、アリスとバートが声を上げた。その華奢な見た目らしくない、大声だった。また、声質もあってよく通る声だった。

「ちよ、何で二人が反応してるのっ!？」

若干顔を赤くしてテンパるジャンヌ。

「いえ、まさかそんな大きな声が出るとは…」

「……………でも、まだ寝てるわね……………」

マリオネットが言う通り、アレグロは起きる気配がない。

「…嘘でしょ…私結構頑張ったのになあ…」

「とうかこれ、外に声漏れたりしないんですか…?」

「それは大丈夫。私の大気魔法で音遮断してたから。」

ジャンヌは大気魔法が優勢魔法らしい。

「……………でも、このままだと多分本当に起きない……………」

「そうですよね…団長さんなら起こし方とか知ってるのかな？」

「まあ、事実これまで起こしてたわけだし、分かることは分かるんじゃないや

「…ないかな？」

「じゃあ、永遠に起きない事態にはならなそうだけど…」

その後、バートが揺すったり、ジャンヌが叩いたり、マリオネットが落書きしたり（意外にノっていた。）しても全く起きなかった。

「…降参ね…全く起きないわ。」

「水でも掛けてみます？」

アリスが言うのと、

「……………やってみましょうか……………」

意外に承諾された。で、マリオネットが魔法でアレグロの頭の上に水球を出現させ、

「……………スプラッシュ……………」

パチン

ドドオン…！

水が破裂した。

「ちよ、マリオネットさん！強すぎです！色々流れちゃって…！」

が、水圧が強すぎた。本物の水のため、溺れることもあるし、ちゃんと冷たい。

「……………起きた……………？」

「…Zzzzzz」

「……………起きろ。」

一瞬、マリオネットの目の奥が黒くなった気がした。と、

ドゴオン！

「…へっ？」

一瞬、変な声が出た。

誰の声かは分からない。が、とりあえずアレグロが木で武装された土の拳に埋まっている状況は恐らく普通ではないだろう。ふとアリスが横を見るとマリオネットが下に拳を降り下げている。

「……………不死……………」

それでも彼女は起きません。

「これもう何だかんだ30分やってるのに一向に起きませんよ…もう団長呼びましょう。流石にこれ以上寝ていると出発に支障を来しま

す。」

そう言つてジャンヌは一度部屋を出て、クロドを呼んできた。

「え？まだ起きてないの？…あー、ね。こういうときは…」

と、クロドはアレグロの顔の横に行き…

「ふー」

「ひゃあああああ!？」

と、アレグロが飛び起きた。

「あ、起きた。」

「…とまあ、こんな感じでアレグロは耳が弱いからこうやればすぐ起きるよ。」

「ああ、なんだ起こすなら普通に起こしてくれたらいいのに…」

「それで起きなかつたからですよ。とりあえず顔を洗つてきてください。」

「?うん。」

まあ、その数十秒後、洗面所から悲鳴が響き渡つた。

「何で油性ペンで書くかなあ…」

「……………墨でやられなかつただけマシ……………」

こう見えてマリオネットはSっ気が強いのかもしれない、とアリスは内心思った。墨で。

「さて、全員準備出来てるかな?」

クロドは一度見直し…

「…問題なさそうだね。よし、じゃあ、まずはこの町を見て回ろうか。」  
そうして町の探索に出ようとしたが…

「何でここにもマスコミいんの…」

外に大量のカメラを構えた人達。

「…しようがないですね。変異魔法で姿を変えてから2、3人づつ出ましよう。」

と、言うことで、9人いるため、三組に分かれて出る事になった。

「……………子供扱い……………」

「いや、見た目的に子供役はアリスとバートとマリオネットが最適か

「思ってたさ…」

「もういつそ全員燃やしちやえば良いんじゃないの？」

「その思考はおかしい。」

服装がフリフリになっていいるマリオネット、紳士服装になったクロド、ジャージになっているアレグロ。

クリア。

「えーつと、普通に出て良いんだよね…？」

「た、多分大丈夫かと…」

「こんなに警戒するものなんですか？」

「らしいわ。下手な噂をばら撒かれると色々行動に制限がかかるんだって。」

いつもより軽装で眼鏡をかけたジャンヌ、慣れないワンピースのリスとバート。

クリア。

「…：…なあ、何でこの組だけ男三人なんだ？」

「男二人に女の子を挟ませるわけにはいかないんだって。」

「…：暑苦しいな…」

「お前がルーズ一番暑苦しいわ。」

執事のような格好をしたバレット、ロングコート姿のヴァイス、スーツ姿のルーズ。

何とかクリア。

「…：チェックアウトってこんなに時間かかったっけ？」

「いや、俺の記憶ではすぐ終わるものだったはずだが。」

「まだあの人達張ってるね…：暇なのかな？」

「ああいう仕事だよ…」

等々の話をしながら町並みを見て回る一行。  
と、

「そういや回復アイテムとか買っておこう。無駄な戦闘をしないようにするのなら回復アイテムはかなり必要になってくるだろうし…じゃあ、一旦一時間位自由にしよう。自分に必要なものを買ってきてくれ。」

「了解ー。(はい。)」

と、いうことで…

「けど、何かいるものあるの?」

「どうだろ…回復魔法とかはある程度使えるし…あ、でも魔力回復のアイテムいるかな。魔力は回復できないし。」

魔法で魔力を回復しようとしたらそれを使うのに魔力がいるため、結局意味がなくなる。消費魔力より取得魔力の方が多いなんて事は絶対ならなかったためだ。

「でも、魔力回復のアイテムってどんなのがあるの?」

「さあ…聖水とか?」

「それは状態異常と体力回復でしょ。」

そうなのか、とアリスは思った。

大体ゲーム内の聖水とかそういうのは体力はそうだが、魔力等のステータスを回復するものだと思っていたからだ。

まあ、ここはゲームではないのだが。

「あ、そういや聖獣の血が魔力回復の最上位アイテムって聞いたことがある。」

「……………血か……………」

別にアリスはカニバニズムに目覚めているわけでもないため、血などには抵抗があるのだ。

「まあ、でもあんな高いの買えるわけ無いしね…一個大体500G位するらしいよ。」

「高っ…そりや無理だね。」

この世界のお金は単位がG、ゴールド、S、シルバー、Bとある。ブロンズ

大体1Bが1円、1Sが1000円、1Gが10000円と言ったところだ。

ちなみに、大体の単位としてはBがよく使われるため、お金で単位が言われない場合は大体Bである。

つまり、500Gは500万円と言うことだ。そんなに持っているわけがない。

「でも、それを飲んだら何か魔力全快はもちろんだけど、最大魔力値もかなり上がったたり、何か…特殊スキル？みたいなのも貰えるみたい。」  
「なにそのチート性能。…まあ、それだけ高けりやそうもなるか…その特殊スキルって？」

「ものによつて違うんだって。聖獣って言っても種類があるからさ。」  
「ふうん…いや、そうじゃなくて、特殊スキルっ何なの？」

「あれ、知らないの？えーつとね、魔物を倒したときには、EXPっていうのが入って、それがたまったらLVが上がるの。それで、LVが上がったときにたまにスキルっていうのが身に付くらしいんだけど、それと似たやつでアイテムを使ったときに身に付くスキルがあるみたいで、それを特殊スキルって言っただって。普通のスキルより強いのが身に付いたりするらしいよ。」

ゲームかよ、とアリスは思ったが、魔法自体がゲームとかの世界観だからそういうのもあるか、と納得する。

そういえば某ゲームじゃ、その名称はExcuser point 他者に与えた痛みを数値化したものとLOVE::Level of violence暴力レベルだったよなー、とも思いながら。

ちなみにだが、この世界ではちゃんと Experience pointとLevelだから問題ない。

「まあ、最上位のアイテムがそれってだけだから、普通にポーションとかあると思うけどね。」

結局、500Bのポーションを5つつつ買って、適当に街を見て回ることにしたアリスとバートだった。



## ダンジョン

とりあえずステータスの確認をし、街を出た一行。  
だったが…

「……………」

アリスが何か疲れていた。

「あ、アリス？大丈夫…？」

「…ねえバート、レベルいくつだった…？」

「私？私は今回も戦闘はしてないからレベルは1だよ？HPが70で、魔力値は変わってなかったよ。STRとINTが600、DEFが100でSPDが300だね。ただ…スキルが3つあるんだよね…」

ステータスは完全にアリスの方がおかしい。

「ウォーターフィールドがレベル1、看破っていうのがレベル4、あと…何かよく分かんないけど演算…っていうのがレベル4…おかしくない？」

で、スキルも安定でアリスのほうがおかしかった。

その上、称号について触れなかったということはまだ無いということだろうか。

「アリスはどうだったの？」

「い、言わなきゃだめ？」

「私も言ったんだし、もちろん！」

いい笑顔でアリスを追い詰めようとするバート。これが意識的でないと言うから怖い。

「…レベルが3でHPが300、魔力値はあのままでSTRが800のINTがせ、1400、DEFが300でSPDが900…」

「え、この状態で私全部負けたんだけど…スキルは？」

「よ、4つあって…ポイズンフィールドがレベル3、状態異常耐性がレベル4、気配遮断がレベル1、精密攻撃が…レベル5だね…」

「”。ド。エ？」

「あと、称号が毒魔法使い、龍を従えしもの、自身を宿すもの…だね。

意味が分からないけど。」

「(”。ム。 ) …… エエ?。」

「あれ、なんで二人分…」

「…既に称号が3つ?…」

「く、クロドさん。」

バートの後ろからヌツ、とクロドが出てきた。

「僕でもまだ2つだよ…」

「…(”。ム。 ) エ?。」

「称号自体そう易々と手に入るものじゃないのに…」

「…アリス、何かすごいことになってない?」

「何か凄いこと、で済むなら良いんだけどね…」

実は、と言うわけでもないのだが、魔物たちは強い魔力に惹かれて寄ってくる。即ち…

「グオアアア!」

「っ!また…!火5魔法<sup>フレアデミア</sup>火炎弾!」

ボン!

シユウン

歩いているだけであっちこちからモンスターたちが喧嘩をふっかけてくるのだ。しかもたまに魔獣が混じっている。ウルフゴブリンがいい例である。最初の街襲撃を合わせて既に4体に出会っている。

「レベルはたしかに上がるけど…魔力が足りなくなりかねないからなあ…」

ちなみに、だいたいこういうモンスターに応戦しているのはルーズ、アレグロ、バレットの3人に、たまにアリスとバートである。

クロドは力を温存させとけ、と皆から言われ、ヴァイスも同理由、ジャンヌはタンク兼ヒーラーのため不参加、マリオネットはそもそも魔法の桁が違いすぎるため却下、となっている。

「一体一体はそんなに強くないんだけど…こうも量が多いと中々大変ね…」

「まあ、な。というか、そろそろ職業鑑定しなくていいのか?その二人

の。」

「だから今そこに向かつてるんだけど。」

今一行が目指しているのはダンジョン。

その奥に職業鑑定のオーブがあるという。

「そろそろ…お、あった。」

見た目はいかにもダンジョン、というような洞窟。

「よし…行くか。」

アリス、バートにとっては初ダンジョンである。

「そういえば、このダンジョンのレベルっていくつなんですか？」

ふとバートが聞くと、クロドが、

「基本的に職業鑑定のダンジョンはレベル3だから心配しなくていいよ。これでも僕達の平均レベル25あたりだからね。ちなみに僕は28だよ。」

というような話をしながら進んでいると…

「お、ボスの部屋だ。」

途中でモンスターが出ることなくボスの部屋まで行き着いた。そもそもこういうダンジョンはボス以外ないことも多いのだとか。

「…そうだ、今回のボス戦はアリスちゃんとバートちゃんの二人が主体として戦ってみるか？」

「……えっ?」

突然ヴァイスから提案が飛んだ。

「そういえばまともに二人が戦ってるのあんまり見てないよねー。ちよつと勉強がてらレベリングもいいんじゃない?」

「戦い方に不備があればこっちから補助もできますしね。」

とまあ、話が進んで今回のボス戦は二人が主体となることになった。

「じゃ、じゃあ、開けますね…っつと!」

目に入ってきたのは広い部屋と、その奥にいる普通より少し大きめのオーブ。

「レベルは…5といったところか。いけそう?」

「…やってみます。」

「がんばります!」

上がアリス、下がバートである。

と、オークが跳び、部屋の真ん中でドスン、と立った。

同時にアリスは本を、バートは杖を出し、臨戦態勢を取る。

「ウ”アアアア!”」

「…バート、行くよ。」

「うん!」

と、オークは1メートル程の太い棍棒を振りかぶり、二人に向かって、

ブン!

「いや嘘お!」

投げた。

「っ!水3魔法、ウエーブスピア!」

と、バートは水の槍で弾き返す。そこに、

「毒4魔法、ポイズンベリ!」

アリスが毒魔法を使った。部屋の天井から大量の毒光弾が飛び散り、まあ、綺麗なことになっている。

「ブ、グオ…ブイイイ!」

が、オークは何とか耐え、タツクルの姿勢を取って突っ込んできた。

「!バート!」

とアリスはバートを抱えて横にずれる。

そのままオークは方向を変え、アリス達の方を向いて再びタツクルをする。と、

「み、水4魔法、オーシャンウォール!」

バートが水の壁を作り、その壁にぶち当たったオークは目を回したようにフラフラし始めた。

隙あり!と思つてアリスは上に飛び、両手に魔力を固め、打ち出そうとした瞬間、バートの頭の中に声が流れた。

『「ボスオークがフレイルムブレスを使用します。」』

「アリス！屈んで！」

「え？」

その声を聞いた瞬間、

「ブモオオオオオオ！」

オークが散大した火を吹いた。

「っ！」

それに反応しきれずに、アリスは火の嵐に巻き込まれた。

「アリス！」

「っ！アリスちゃん！」

「待った。」

とつさにヴァイスが飛ぼうとしたが、それをクロドは止めた。

「お前何を……！」

「……あれは……おかしくないか。」

アリスに火の嵐が直撃した、筈だ。

にもかかわらず、

何故火の隙間からアリスの姿が見えない？

と、

「隙ありッ！」

オークの後ろから声がした。アリスがいた。

「ッ！ブ……」

「はアッ！」

と、アリスは後ろから振り向いたオークの顎を蹴り、バランスを崩させたところで……

「……精密攻撃。」

恐らく、攻撃が当たりやすくなるスキルなんだろうな、と思って使用し、再び本を開いた。そして……

「毒6魔法、錯乱への誘い！」

毒霧と魔力弾を大量に展開する。そして、魔力弾が小光弾になったところで……

シユウン

と音を立ててオークは消えた。

そして、バートの所に行くとき…

「や…」

「うん？」

何やらバートが呟いた。そして、

「やったあああああー！」

アリスに飛びついた。

「わっ!?バート!?!」

「びっくりしたよお！アリスが火に飲み込まれてえ…どうしようって思ってた…!」

「そこは…スキルと素早さのステータスに感謝かな…」

あれは、どうということでもないのだが、スキルは口に出せば使えるかな、と思って一か八かで気配遮断を使って、最速でオークの後ろに回り、隙を見て後ろから不意打ちをただけである。

「おーおー、勝ったなあ。やるな!」

「いやー、勝ったね!すごいね、二人とも。」

「あ、ありがとうございます。」

「なかなか…いい戦いだったんじやない?というか多分下手な魔法使いよりいい動きしてたと思うよ。」

と言われる中…

「…手、抜いた…。」

「えっ?」

一人、マリオネットがじつとアリスの方を向いていた。

「…多分…本気で戦ってない…本気出したらこんな物じやないはず…」

「え、えーと、そこについては…ちよつと…」

「…じやあ…後で私と勝負ね…」

「「「「「えっ!?!」」」」」」

「…実力を見ようと思ってたのに…手を抜かれたから本気が見れなかった…教える側として…後で実力を見せてもらおうわ…!」

魔力が漏れ出ている。が、クロドが…

「いや、それはまた今度でいいだろう。どうやら…アリスちゃんが本気を出すのは相当鬼気迫った状態か、キレたとき…みたいだし。」

少し苦笑いしながら言うクロド。恐らく王城でのことを思い出しているのだろう。

「…ふん…」

マリオネットはそう言うと言を縦に数回振り、魔力を収めた。

「…じゃ、職業鑑定といきますか！」

気を取り直すようにヴァイスが声を上げ、部屋の隅にあつた箱を開けた。そして、手のひらサイズの水晶玉のようなものを2つ、持って来た。

「じゃあ…バートちゃんがこつちで、アリスちゃんがこつちね。手に持った状態で魔力をそこに流し込んでみて。」

魔力値測定もこんな感じだったよなー、とアリスは思いながら水晶玉に魔力を流し込んでいくと…

「…うん？」

水晶玉の中に黒い霧のようなものが出てきた。

ふと横を見るとバートのもっている水晶玉の中には青い霧が出来ている。

「うん、黒と青…ね。って、うん？」

ヴァイスが何やら手帳のようなものをどこからか出し、ペラペラとめくり始めた。横からクロドが覗き込んだりしている。

「…あー、なるほど…あ、二人とも、ステータスの確認してみて。」

「え、あ、はい。」

いきなり何だろう、と思いつつもアリスはステータスを開くと、

《アリス・セナール Lv6 HP 600/600 MP 360  
000/526000》

STR 790 INT 1520 DEF 460 SPD  
1050

《職業??》

スキル

ポイズンフィールドLv3 状態異常耐性Lv4 気配遮断Lv  
3 精密攻撃 Lv5

称号

毒魔法所持者 龍を従えしもの 自身を宿す者

「あ、上がってる…」

レベルが3上がっていた。ステータスも特にHP値がレベル1上がるごとに100増える換算になっているし、何気に気配遮断のスキルがレベル3になっている。なんじゃこりゃ。

「あ、レベルが7上がってる!」

と、隣でバートが言った。7?と思ったが、まあ、レベル差の問題だろう、としておく。

「ふむ…じゃあ二人とも、さっきの水晶、割って。」

「え?」

「割ったら職業欄が開放されるはずだから。」

「あ、はい。」

と、バートは水晶を振り落とし、アリスは魔力を過剰注入して割った。と、アリスのステータス欄の一部がグニャリと歪み、職業欄が???から変化した。そこには…

《職業…(暗殺者)》

「…え?」

悲報、魔法使い、それも魔法騎士団員のはずなのに暗殺者だった件



## 初陣とステータス

アリスとバートはそのまま町をうろついていた。と、その時…

「た、大変です！ゴブリンの群れが接近中！」

「ゴブリンの群れ!?どれぐらいの規模だ！」

「数にしておよそ100…ホブゴブリンを筆頭に、槍や弓を使う遠距離のゴブリンまでいる模様！」

「まずいな…！おい！この街のすべての門を閉鎖するよう指示を出せ！急ぎだ！」

「は！」

「伝令！東門がゴブリンの群れによって破壊された模様！」

「なっ…東門といえば…向こうだ！急いで住民に避難指示！戦闘兵を呼べ！」

「了解！」

「ゴブリンの群れ…ねえ。」

普通、ゴブリンと言えば素手や、いつでも棍棒やナイフで突撃してくるものである。それが、槍や弓を扱うことが出来るとは…かなり厄介な相手であることは間違いない。

「…バート、カードでクロドさんに連絡して。」

「わ、分かった。アリスは…行くんだね。」

「…うん。とりあえず少しでも被害を減らすよ。」

そう言ってアリスは猛スピードで飛んだ。

東門といえば、ここから500メートル程だ。すぐに着いた。と、

「きゃあああああ！」

「止めろ…こっちに来るな！」

「皆さん！まずこちらに避難してください！」

「うちの子がいらないんです！このままじゃあいつらに…」

もう既に大惨事だった。

ふと聞こえた伝令では100程だと言っていたが、アリスが見る限りは200を超えている。

「おい！君！向こうはもうゴブリンだらけだ！早く逃げろ！」

アリスは自分に言われていることは分かったが、それで戻る気もなかった。そして、群れを前に本を取り出し、一言、詠唱、及び魔法の名前を言う。

「…毒6魔法、錯乱への誘い…！」

イントウデリリウムの名前をこの間決めたのだ。流石にそのまま使っているのも原作者様に悪いと思ったからだという。魔法の本質は変わらないが。

「!?!」

ちなみにだが、毒霧の動きもある程度制御できるようになってきたため、こちらへんの人には当てずにゴブリンだけ当てていく。そして光弾が命中すると…

「グギャ!?!」

シユウン

消えた。正確には封印結界の中に転移させられた。上手く作動してくれてよかった、と安堵もしつつ、アリスは攻撃の手を止めない。

「…クラツシユ。」

合図と共に光弾が20の小光弾に分裂した。回りながら、その光弾も当たっていく。

シユウン…シユウンシユウンシユウン…シユウンシユウン…

その効果時間が切れる頃には既に2, 30体程しか残っていないなかった。

と、

「ギャア！」

「っ…しまっ…」

後ろから奇襲をかけてきたゴブリンに気づけなく、ナイフを振りかぶられた。が…

「火5魔法、フレアショットッ！」

ゴブリンの横顔に火の矢が命中し、両方消えた。

「!バレットさん！」

「危なかったなアリスちゃん!油断は…禁物だよっと!」

それなりの距離からバレットが炎の矢を大量に乱射し、命中してい



「…火水5魔法…スチームエクスプロード。」

と、マリオネットの言葉と同時にホブゴブリンの背中の部分で小規模な爆発が多数起き、逆にホブゴブリンが起き上がってきた。しかし、それでもまだホブゴブリンは消えなかった。その上…

「ゴウアアアアアア！」

上を向いて咆哮し、そのまま首を下ろし、アリス達の方に火を吐いてきた。が、

「風5魔法、ブロックブロウ！」

ジャンヌの放つ風の壁に阻まれ、そのまま消えた。と同時に、

「貫った！土剣技、ソイルファンク！」

「火6魔法、フレイムトルネード！」

いつの間にも移動したのか、ホブゴブリンの足元からルーズとアレグロが上に向かって茶色い大きな手のような斬撃とその周りを回る火の竜巻を繰り出し、ホブゴブリンを上に叩き上げた。が、

「っ…しぶとすぎ…あそこまで飛ばされたら攻撃が届かない！」

打ち上げられたホブゴブリンは未だ形を保ち、攻撃に転じようと体勢を整えた。

「あの高さなら次で仕留めないと被害が散大する…！」

と、

「ふっ…！」

「っ！アリスちゃん!？」

いつの間にかアリスが落下予測地点まで跳んでいた。本人も何故か分かっていない。しかし、頭の中に出てきた宣告をし、魔法を放つ準備をする。

「毒8魔法…八岐之大蛇の逆襲！」

そして本を開き、足元に大きめの魔法陣を一つと小さめの魔法陣8つを展開し、上に向かって緑と青の混ざった蛇の弾幕を8体、分散させて飛ばし、8方向からホブゴブリンに当て、更に当たったところから空の一部を覆い隠さんばかりの小弾幕が展開された。

「ぐお…ホアウオオオオオ…」

そこまでして、ようやくホブゴブリンは光の粒子と化した。

「よし…なんとかか…」

「うへっ…あの威力の魔法食らったらそりゃ残らんわ…転移魔法かかってなかったら今頃スプラッタだ…。」

クロドが苦笑いしながら言った。

「とうか、B型ホブゴブリンは確かに耐久高いけどさ…あれは硬すぎなかった?」

アレグロの言い分も最もだ。と、マリオネットが…

「…さっきのB型ホブゴブリンの吐いた火のブレスと耐久力…それと、力の強さからして…魔王の影響をかなり強く受けてるんだと思うわ…今回の魔王…これまでとちよつと違うみたいね…?」

「ええ…」

と、

「あ、あれは…勇者様達じゃないか!?!」

「嘘?!いや、でもあの強さを考えると…」

「ああ…勇者様…!」

こんな感じになっていた。

「あ、あはは…やっぱり僕こういうの苦手だなあ…」

少し苦笑いしながらクロドは頬をポリポリとかいた。

「でも一番のファインプレーはアリスちゃんよねー。いち早く到着して被害を最小限にしつつ戦う、牽制の一手だね。」

「それは…言葉を間違えてないか?」

「細かいことは気にしないっ!」

ルーズが言ったが、アレグロは気にしないらしい。

「ええ…」

アリスも苦笑いであった。ゲーム等ではこういう一行はもう少しなんというか…厳格?な雰囲気があつて、ここまで抜けた感じだとは思っていなかった。

「…それよりアリス…よくこんなに早く着けたのね…。」

「え?」

ふとマリオネットが口を開いた。

「…バートから聞いた話じゃ直線距離で行っても500メートル位

…ゴブリンは何気に警戒心が強いから…それこそ飛んで行きでもしたら警戒されて迎撃もされる筈…」

「…たしかに。そこはちよつと疑問だね…リーダーがああのレベルのやつだったら情報が行き漏れるなんてことは無いはずだし…たしかに妙だな。」

ヴァイスが顎に手を当てて考えていると…

「ま、今度でいいんじゃない？とりあえず、今回の魔王退治は今までと色々変わってるから、先も急いだほうがいいと思うよー？」

アレグロが呑気そうに声を上げた。しかし、間違つてもいない。さっきのウルフゴブリンとB型ホブゴブリンの強さからした魔王の強さ、今までとは違う、和平交渉という目的、何より10歳の魔法使いが二人いるのだ。下手に負担はかけられないと思い、クロドは…「そうだね…じゃあ、さっき戦闘に関わってたわけだから…あ、アリスちゃんとバートちゃんにステータスのこと、言つてなかったね。」

「あ、それはバートに聞きました。ある程度の事は。」

「こう見えて一応お父さんが元騎士団だったので、色々聞いてました！」

あ、そうだったんだ、とアリスは思った。ちよつと想像できない。

「…そうか。じゃあ、「ステータス」って言ったら自分のステータスが見れると思うよ。あ、どうやつても人には見えないからね。HPは…大体100あればいいほうかな？MPは普通に魔力値、STRは…700位？INTも同じぐらいか。DEFは200、SPDは…300位か。レベル5を基準とするならね。職業はまだ決まつてないから無視するとして…スキルは、多分自分の優勢魔法の属性。プラスファイールドって付いてるやつとレベルがあるはず。火属性ならファイヤフィールドLv1とか。称号は…まだないだろうし、いいか。」

「(流石にそんな変な値には…なつてないと思うけど。というか普通を一番望んでるのになんでこんなになつてるんだろ。)」

「まあ、じゃあ…」「ステータス」

アリスとバートが同時に言うのと、ステータス画面の様に画面が目の前に出てきた。

《アリス・セナール Lv3 HP 300 / 300 MP 468  
000 / 526000》

STR 物理攻撃力 700 INT 魔法攻撃力 1400 DE  
F 防御力 400 SPD 素早さ 900

《職業??》

スキル

ポイズンフィールドLv3 状態異常耐性Lv4 気配遮断Lv

1 精密攻撃 Lv5

称号

毒魔法所持者 龍を従えしもの 自身を宿す者

…で、正直なアリスの反応がこれである。

「……………はえ?」

人間、本当に訳がわからないことに出会うと言葉が出なくなる、と  
いうのは本当らしい。

## 役職と野宿

「職業確認できた？」

クロドさんが聞いてくるけど、それどころじゃない。

え、暗殺者って…あの暗殺者？え、敵サイドじゃないの？そういうのって。

ちよつと横を見てみるとバートもまばたきを多めにしたり目を擦ったりしている。…役職何だったんだろ。

「二人ともー？」

「あ、はい！確認できました。」

「は、はい。」

「えーと、何だった？」

…バートが目で促してくる…こっちからか。

「えーと、暗殺者…？でした。」

なんかカッコ付いてるけど。

「、暗殺者か…バートちゃんは？」

「し、指揮者でした…」

…うん？指揮者？

「うわあ…二人ともまた難しい役職出してきたねえ…」

バレットさんが若干苦い顔をしながら言ってくる。難しい…？

「えつと、難しい…とは？」

「ああ、説明いるよね。えーとまず、戦術的に、職業によってアタッカー、タンカー、ヒーラー、サポーター、っていう役職があるんだけど、暗殺者はアタッカー、指揮者はサポーターにいる。ここはオーケー？」

問題なかったから首を縦に振る。バートも大丈夫だったみたい。

「うん、まずは…暗殺者。アタッカーの中には更に近距離、遠距離、中距離、遊撃っていうのがあって、まず近距離は接近戦を得意とする人達、このパーティーではルーズとかアレグロとかだね。で、遠距離は遠くから狙撃する感じの人達。ここではバレットだ。で、中距離は近くでもそれなりの距離でも攻撃のできる人達、ここではマリオネット



とかヴァイスがそうか。で：問題の遊撃、これは立ち位置が決まっていなくて、時、場合、状況によって臨機応変に戦える人たち、例で言えば：それこそ暗殺者、あとは忍とか盗賊シヤッフもそうだね。うちの団にはいない。ここまで良い？」

「はい。」

特に問題なかったため、返事をする。

「で、なんで難しいかなんだけど、立ち位置が決まってないから作戦があまり通用しないんだ。その場での判断力が物を言う職業でね、判断力、思考力、あと純粋な俊敏さと戦闘力も必要だ。隙が少ない相手には正確性もいる。攻撃の要にもなるし、補助側にも回る。だから難しい。」

う、うわあ：思いの外重役……

というか、そう考えると精密攻撃のスキルと気配遮断のスキルはかなり強いんじゃない？あれ、最初から暗殺者確定事項？

「じゃあ次：：バートちゃんの指揮者だね。」

で、バートの職業説明に入る。一応聞いておく。

「指揮者はサポーターの要。戦況を確認しながら味方に指示を出す役割だね。」

と、クロドさんがそこまで言う……

「、そう言えばこのパーティー指揮する人いなかったよな。」

「まあ、大体自由にやっていたし、もしものときの指揮は団長がやっていたからねー。でも、一応指揮者ってどのパーティーにも一人か二人いるし、いた方がいいなーとは思ってたんだけど。」

ルーズさんとアレグロさんがちよつと話して、クロドさんの話に戻る。

「：まあ、言えば作戦の司令塔だ。その状況に応じてどう動けば良いのか判断して指示を出す。時には後ろから味方に支援をしながらね。」

「わ、私にそんな重役……」

「：そういえば、こここのオークと戦った時アリスちゃんにフレームブレスを警告できてたよね。なんで出来たの？」

それは思った。

ほとんど予備動作のない魔法をよく察知できたなーと思ってたけど、よくよく考えればなんでだろう。

「あ、頭の中に声が流れてきて…たしか、《ボスオークがフレイムブレスを使用します》って。で、咄嗟に。」

「…うん、指揮者の才能あるかもね。もしかして看破のスキル持っている?」

「あ、はい。もしかしてそれですか?」

「…うん。ただ、それってレベル5になるまで発現しなかった筈なんだけどな…」

「あ、看破のレベル、今5です…」

「…うん、指揮者は任せたよ。それ、「アナウンス」って言ってね、相手の考えを看破して攻撃のときに教えてくれるやつなんだ。入手難度は最高レベルだけどね…」

どこかクロドさんが目を遠くして言う。…うん、色々規格外なんだなあ…

「あ、それと、ステータス表に職業スキルが出たと思うから確認しといてね。」

遠い目をしながら固まっているクロドさんの後ろからヴァイスさんが言う。職業スキル?と思つてステータスを開くと、職業欄が、

《職業 (暗殺者)》

職業スキル

気配隠蔽 Lv4 (気配察知 Lv1) (演算 Lv1) (暗視 Lv1)

に変わっていた。

気配隠蔽…元々持ってたから既にレベルが4…多分最高レベルは10なんだよなあ…

ってか、このスキルのかっこ何?暗殺者、にもかかっているし…ま、特に何も無いでしょ。

「よし、職業確認もできたし、何か質問ある?」  
と、

「あの、ヴァイスさん。」

バートが、ヴァイスさんに聞いた。

「指揮者って武器…杖でいいんですか？」

「ああ、むしろ杖とか本のほうが相性がいいね。ただ…暗殺者は…本とかよりも小武器のほうがいいかなあ…」

あ、やつぱり？

「アリスちゃん、もしかしたら小武器とか出せない？」

む、無茶ぶりだあ…でも、やってみると面白いかも。だいたいこういうのってイメージが大事って言うよね…

目を閉じてナイフの形を想像する。持ち手から刃の先端までどんな形のどんなナイフか…と、何か穴のようなところの中で指先に何か当たる感触があった。それを掴んで引き抜く。

「ふっ！」

と、

「で、出来ちゃった…」

ナイフが作れてしまった。しかも…

「…これ、アリスちゃんの魔力の関係か、毒属性付いてるね。」

「ええ…」

思いの外強武器だった。でも、これめちやくちや集中しないと出来ない。

と、パツ、と目の前にスキル項目が出てきて、一つ増えた。

生成 Lv1

ほんとにスキル手に入っちゃったよ。

で、洞窟を出る。

ふう…

「で、団長、次どこ行くの？」

「そういえば、ここの近くの村でちよっと要請があったな、何でも魔獣が出るとか何とかで。その村にしようと思うよ。」

「おーけー。」

「なんて村ですか？」

「確か…トウキョウって言ってたか。」

「とっ!?!けほっ、ケホ…」

あ、いけね

「、どうしたの？アリス。」

「い、いや、なんでもない。睡が変なところに入った…ケホ」

え、トウキョウ？東京？

マジで焦ったんだけど…つか村って言うてる時点で東京ではないか…県の規模で村になったらそりゃやばい。まあ、東京自体は県面積狭いんだけど…いや、そもそもあのトウキョウではないか。

「ただ…ちよつと今遅いからね…今晚は野宿になるかもね。」

「野宿ー!?!うっそお…」

アレグロさんがガツクリと肩を落とした。

「いや、アレグロは前から野宿もしたことあったろ。元々パーティーメンバーは俺とヴァイス、ルーズ、アレグロだった訳だし。」

あ、そうなんだ。

「まあ…そつか。でも早くついたら野宿しなくていいんだもんね！」

というか、今何時くらいなんだろ。

ふと腕時計を見ると…うん、5時27分。まだ明るいとはいえ日が傾き始める時間。アレグロさんには悪いけど、どうやら今日は野宿らしい。

「…って事でとりあえずテント張るか。」

「はぁーい…」

現在7時ジャスト。残念ながらトウキョウには着かなかつたため、川の近くで野宿となった。

あんまり川の近くって良くないって言うけどそんな急に水が増えることもないよね？

いやまあ、野宿っていうよりキャンプって言ったほうが聞こえはいよね！

…まあ、どう言おうとアレグロさんは気分沈んでるみたいだけど…。

「…にしても…テント張るとは言ったけどよ、お前あれだろ？自動式拡張テントだろ？」

「まーね。」

ルーズさんがクロドさんに言う。

自動式拡張テントとは…？

「それ。」

と、クロドさんが三角錐形の何かを3つ投げると、ポポポン、とい音を立ててテントが3つ張られた。…なにこれ？

「……………え…どうなってるの……………？」

ふといつの間に行ったのかマリオネットさんが眩いた。

「ああ、マリオネットも見たことなかったっけ。これが自動式拡張テント。魔力を含ませて軽く衝撃を与えたら一瞬で広がってテントになるすぐれもの。しかも魔力を抜いたらすぐに小さくなるから回収も楽だよ。」

そ、そんなんあったんだ…今初めて知った。

「さて、晩飯にしようと思うが…クロド、どうするんだ？」

とヴァイスさんが聞くと…

「……………あ、」

あ、これまずいやっじゃ…

「ぎ、材料はあるんだけど…」

「調理法がなけりゃ無茶だろ。どうすんだ。」

…あ、あれ使えるんじゃない？

で、とりあえずイメーヅする。ちなみにナイフを作って投げ作って投げしてたらレベル2になった。

とりあえず毒が混じらないようにまずはステンレスの鍋をイメーヅして手を引き抜いてみると…

「…できた…」

「えっ…うお、もしかして、生成？」

「は、はい。」

できちゃったよ…これ結構まずいやつじや？だって大体の物作れるってことはお金払うことなくなるわけだし、そもそも金貨すら作れるかも…うん。絶対そんなことしない。

「まあ…何とかそれ使えば調理はできるか…誰が？」  
セルフで聞き始めたルーズさん。

「あ、私できますよー！」

で、名乗りを上げたのはジャンヌさん…と、声には出してないけどマリオネットさんもか。

僕？できないことはないけど…多分中の中位？普通だし、こんなところで作ったことない。

「…というか、このお鍋見たことないもので出来てますね…鉄みたいですけど…ちよつと違う…？」

あ、今更だけどここステンレス無かったわ。

「…まあでも、お鍋に変わりないし大丈夫か！」

意外とジャンヌさんって大雑把な所あるよなあ…。

夕食？めつちや美味しかったです。

で、今は寝る時間…なんだけど、ちよつと眠くないから外を歩いている。ちなみに魔物とかに襲われてもいけないからマリオネットさんが结界を張って更にその外側をメアが巡回してます。暗いから周りからは余計に見えない。メアの方が暗殺者向いてるんじゃない？

ちなみに暗視を鍛えるために明かりは何にも付けてません。…まあ、月明かりだけでも十分明るいんだけど。

「にしても気持ちいいなあ…」

風と水が流れる音がしてる。風流だねえ…鼻歌でも歌いたくなってくる。まあ、小声なら問題ないんだろうけど。

「…♪…」

思いの外声響いた…でも問題ないぐらいかな。

「…♪…♪…♪…♪…♪…」

少し大きめの岩に座って川を眺める。そういえば、この世界って月

が2つあるらしい。一日ごとに上る月が違うんだとか。でも、完全に一日じゃないから、一年に一回だけ、一緒に、空に二つ月が上ることがある。その次の日が元の世界で言う元旦らしい。

「…生成。」

手のひらにナイフを出す。多分一番多くナイフは出してるからいちいち目を閉じなくても出せるようになってきた。実はこれ、魔力を固めてるだけのものだから例えば鉄の塊を出そうとしたら、性質を極限まで鉄に似せた魔力の塊ができるんだよね。だからあの鍋も実質ステンレスではない。

まあそこはいいや。とりあえず投げナイフの練習でもしとくかな。ちなみにだけど今はダーツみたいに投げてるけど、練習してる…というかめざしてるのは某時止め銀髪メイドさんみたいな持ち方。あれができると最大三本…いや、頑張れば親指と人差指の間も含めて4本飛ばせるんだよね。効率がいい。しかも使い捨てじゃなくて消えたら魔力になって帰ってきてくれるから無駄にならない。

「…♪」

まあそこはいいか。

鼻歌も再開させて、自主練を開始した。

## トウキョウ

一晩過ぎ、次の日、無事にトウキョウにたどり着いた。

「ようこそいらっしやいましたフェンリオ魔法騎士団の皆様！」

で、村長さんの家で挨拶を受けてるところ。

ふと見回してみると、結構小さい村みたい。人口…500人もいないかな？

「…ということ、数ヶ月前から魔獣が現れるようになりまして…」「うーん…どんな見た目か、とかは分かりますか？」

「はい。闇のように黒く、目は赤く、2メートルほどの大きさ、魔獣なのですが、二足歩行をし、かなり硬い毛に覆われていると…あと、胸のあたりにバツ印のように二本の線の赤い傷が付いている、のことです。」

「っ…その特徴って…！」

ジャンヌさんが少し声を上げた。周りのみんなを見る限り全員それが何か察してるみたいだけど…バートと僕は気付いてない。と、クロドさんがその続きを遮るように、

「分かりました、ありがとうございます。」

「…どうか、よろしくおねがい致します…！」

頭を下げられた。

で、村長さんの家を出て、ジャンヌさんが、

「団長、なんで遮ったんですか？」

「…無闇に言うことじゃない。下手に尾ひれがついたりしたら余計に不安を煽ることになるだろ？…それに、たしかに確率は高いがまだ不確定だ。」

「っ…そうですね…考えが足りませんでした…。」

「あの…」

ふとバートが口を開けた。

「ああ分かるよ。その魔獣は何なのか…だよね。」

ヴァイスさんが答えた。

「…あくまで憶測の範囲内…でも、その特徴的に出てくるのは…。」



魔王軍四天王幹部第二、黒魔獣人、マードアの可能性が極めて高い。」

「つ、魔王軍四天王幹部…!?そ、それってめちゃくちゃ強いんじゃない?」  
「ああ。でも、第四が最高位だから強さは四天王の中で三番。…それより強いのが少なくとも二人…いや、魔王を含めれば三人いる。」

その情報が出てくることは…「奴は四天王の中でも最弱…」は出ないわけか…あれ、第一の人(人ではない)はどうしたんだろ?…いや、まだ出て来てないだけか…

「とりあえず、もしそれがマードアだとすれば、ここで倒しておくのが良いか…?」

「ただ…皆さんはあれでも特に私とバートは今のレベルで足りるかどうか…:うん?」

ふと前を見ると家の影からじつとこつちを見てる子がいた。

「…:うん?」

少し気になって小さく手を振ってみると走っていったのかスツ、といなくなつた。

「とりあえず…その魔獣だけじゃなくていくつかの魔物も乗り込んできてるみたいだからそれもとりあえず倒しながら考えよう。そいつもいつ出てくるか分からない。何人かで分かれて回つたほうがいいかもしれない。」

というクロドさんの提案で二人ずつ村を回ることにした。僕はマリオネットさんと、バートはヴァイスさんと。もうこのセットが師弟関係みたいになつてる。

「…:にしても…魔王軍四天王幹部かあ…」

『確かに、そこらへんに残留魔力が感じられる。大きさに四天王レベルなのは間違いないだろうな。』

あ、メアってそういうのも分かるんだ。

『しかし…なぜこんなところにあいつがいるんだ?それに、残留魔力から推測するにそこまで力も出してないと思われるが…色々と謎が多い。』

「え、メアってその…マörder？って人の事知ってるの？」

「……影龍…に限らず、龍っていうのはかなり位の高い魔物だもの…魔王の居場所までは分からなくとも…幹部位なら知っててもおかしくないわ……」

ふとマリオネットさんが言った。

たしかにメアって魔物としてはめっちゃくちや位高いよね。龍だもん。

『まあ、あいつは人ではなくてどちらかといえば魔獣なんだがな。二足歩行はするものの殆ど話も通じん。それでも戦の強さは確かだからな。』

「なるほどね…」

「……とここでだけど、あなた…そんなところに入って窮屈じゃないの……？」

ふとマリオネットさんがメアに言った。あ、そっか、周りから見たら首だけ出してるわけだから胸ポケットじゃ狭く見えるよね。

「メアは影を操れるから、体を影と一体化させて厚さを0にできるんです。だから窮屈ではないと…」

『うむ。その通り。影さえあれば我は己の体でさえどうとも出来るからな。』

そう考えるとなかなかチートだよねえ…だって理論上は全世界を影で覆うことだってできるらしいし。そうなれば無双だし。攻撃は当たらないけど普通に攻撃されるっていうね。

なんて事を話しながら進んでいると…

「…またあの子だ…」

何かビクビクしながら走っている子を見つけた。真っ黒な髪に黒い目の女の子。歳は…7歳頃だろうか。

「……何かに怯えてるみたいね……」  
と、

『あの子供…もしかやマörderに襲われたんじゃないのか？』

「えっ!?!」

急にメアがえらいことを言い出した。

『残留魔力は結構簡単に体に付くが、あれほど濃く体にまとっているということは、襲われた可能性があるので。だからあれほど怯えてるのかもしれない。』

「…だったら話を聞くぐらいしたほうが…良いのかな…?」

『…いや、確かにそうかもしれないが、聞き方を誤ると傷を抉ることもなりかねん。するなら気を付けるのだぞ。』

「う…」

残念ながらそんな器用な事ができるとは思えないため、ひとまず引き下がろう。

でも…そりゃあ魔獣にいきなり襲われでもしたらトラウマにもなるよね…

その後は特に何もなく、というかちよくちよく出てくるはずのゴ布林すら出てこず、散策は終わった。後から聞いたけど魔獣が出てくるのは大体月に2回、ゴ布林でも週に2回ほどらしい。

そして、その日の夜…

「……………寝れん。」

この頃何故か寝付きが悪い。

「はあ…まあ寝れなくてもある程度はヒールでもかけとけば疲れは取れるけど…」

そういう事じゃないんだよなあ…

「…見回りでもしよっかな。」

何があるか分からない。一応探知結界は村中に張り巡らされてるけど念には念を、ね。

と、

「……………♪……………」

「…ん?」

歌声が聞こえた。少し高めで、小さいけどきれいな声。

「…行ってみようか。」

近づいていくと、歌も聞こえてきた。が、英語の歌らしい。

この世界にも英語はある。：正確には英語とは呼ばれてなくてイグニルって呼ばれてるけど。理由は知らん。まあ、ここイギリスなんて国が無い上、日本語じゃないから英語なんて言い方されないだけだろうけど。

しかも、

「この歌……」

「…The beasts who be hurt rampag  
e in the end world which was b  
roken by the beasts. But he di  
dn't have malicious♪…」

：この世界の母さんがよく歌ってたから、英語が大の苦手な僕も勝手に覚えていた。それとなんとなく曲調が好きだった。

たしか、何かの物語にあった歌だったかな？：内容思い出せないけど。それなりに読んだことあると思うんだけどなあ…

まあそれはさておき、その声の方に近づいていき、同時に村から少し離れると…

「……あ、」

歌が途切れて小さな声が聞こえた。

ふとその方を見ると、昼間に2回あったあの女の子が崖に座ってこつちを見ていた。

「…こんばんは。」

「………」

女の子はふっ、と顔をうつむけた。

「…ちよつとだけ話、聞かせてもらってもいい？」

女の子は何も言わないまま、少し迷ってから首を縦に振った。

「ありがとう。：横、座るね。」

すっ、と横に寄ってくれたのは優しさか遠ざかりたかったのか。

「………歌、好きなの？」

「っ………うん……」

蚊の鳴くような声ってこういう事を言うんだなあ：でも、言葉を出

してくれるのはありがたい。

「…なんで好き？」

「……………楽しい、から…」

「…そうだ。名前、聞いてなかったね。何ていうの？」

「つ……………エ、エル…」

少し声が大きくなった。ちよつとだけ慣れてくれたかな？

「エルちゃん、か。」

「お、おねーさん、は？」

「私はアリス。アリス・セナールっていうよ。よろしく。」

「……………」

さて…どうするか…

「…もしかしてさ、エルちゃん……………魔獣に襲われたりした…？」

「つ……………う、ううん…！襲われてなんかない…！」

必死に首を振って否定するエルちゃん。…こりや…何かあるね…

でも、下手に詮索しないほうが吉と見た。

「そっか、もしもって事があるからさ。何もなければ良かった。」

「……………」

……………うん、死ぬほど空気が重いというか…気が重いというか…

「…歌わないの？私ちよつと聴きたいな。」

「…！…いい…の？下手つぴじゃない…？」

「全然。むしろ私より上手いよ。」

実は…結構僕は音痴だと思う。前世からあまり歌は得意じゃない。

…上手いとはたまに言われることは言われるけど多分お世辞。

「イグニルの歌しか…知らないけど…」

「問題ないよ。」

「……………あ……………」

「……………ふふ、緊張することは無いよ、別に私がないみたいについて通  
り歌ってくれば。はい、息吸って…吐いて…吸って…」

とりあえず深呼吸をさせてみる。好きなこともうまくできないと  
結構ダメージ来るしね。

「スウ…ハア…スウ……………~~~~~♪」

高く、すぐくきれいな声。うまいなあ……

「……………♪……………」

…一曲終了、か…

そつと拍手をする。

「つ、あ、ありが…とう…」

「…やっぱり上手だね。きれいな声。」

「…ほん、とに…？」

「うん。…いつもこうやって歌ってるの？」

「大体…いつも…」

「…じゃあ、たまに聞きに来てもいい？」

「…あんまり…人は好きじゃないけど…おねーさんなら、良い。」

うお、嬉しいこと言ってくれる。というか、エルちゃん可愛いよなあ。あ、いや別にロリコンの気がある訳じゃなくて、普通に。

「…じゃあ、次、おねーさんの番…」

「えっ、」

…あ、そういう感じ…？歌…歌か…そういやこの体で歌ったことなかったなあ。前世が苦手だっただけで案外歌えるかも？

「あ、あんまり上手じゃない…というか、音痴の可能性もかなり高いけど、「いい。おねーさんの歌が聞きたいの。」う、うん…」

お、おう…

「スウ……………♪…」

あ、思いの外歌えるみたい。少なくとも前世の僕よりは上手い。…まあ、あんまり基準になんないけど。まあ、声が高いから歌いやす

い、つてのもあるのかも。詳しくは知らん。

とか、やっていると…

「…スウ…スウ…」

「…ま、そうだよね。」

エルちゃんは眠っていた。まあ、もうすでに0時回ってるっぽいし、むしろこの時間に起きてる方がおかしいか。

ただ、流石にここで寝かせるわけに行かないからなあ…一応今日は僕の所に連れてくしかないか…

で、宿に一度帰り、エルちゃんをベッドに、僕はちよつと考えることがあったため、机に座って色々考えていると、いつの間にか眠っていた。

## 黒魔獣人 マーダー

「……ん、」

あ、座ったまま寝てたか…うつわ関節痛え…

ちよつと伸びをして、体を曲げたりして関節をポキポキ鳴らす。

さて、エルちゃんは…寝てるね。

今…あ、まだ6時になってないんだ。じゃあまだ誰も…いや、マリオネットさん以外は誰も起きてないわけか。あの人シヨートスリーパーだからねえ…多分寝るのは遅いけど起きるの早い人なんだよね。と、

「ん…」

エルちゃんが目を覚ました。

「…っ…っ!?!」

ガバツ、と飛び起きてキヨロキヨロし始めた。

「あー…おはよう。眠れた?」

「…あ、おねーさん…え、わ、私…え?」

あ、だいぶ困惑してるね…。

「あー、あのあと眠っちゃったみたいでね、起こすのもあれだったから一応ここに、って事。別に何もしないから安心して良いよ。」

「あ、そ、そうなんだ…」

「…もう帰る?それとももう少しここにいる?」

「…うん…もう少しここにいます…」

「うん、分かった。」

そつと机の上のノートを閉じて、立つ。

「じゃあ…何か話す?」

こくつ、と首を縦に振るエルちゃん。

「うん。じゃあ…そうだ、今日も夜、歌いに行くの?」

「あ、う、ううん。今日は…ちよつと…」

まあ、そんな日もあるか。

「そつか。また行くときはできれば声かけてくれるといいな。起きてたら行くよ。…あ、もし迷惑だったりしたら言っただけ?」



「う、ううん！迷惑じゃない…今日は白い満月だから…」

後半どんどん声小さくなつてうつむきながら言われたから最後なんて言ったか聞こえなかった。

「ん？なに言った？」

「！ううん！何も！」

あ、全力で否定した…やっぱりなにかあるよね…でも、あんまり詮索しないほうがいいよね。

「そっか。まあ、何かあったら言つてね？」

「…うん。」

こくつ、と頷いたのを見て、また少し話した。

エルちゃんも最初はずつと聞いてたけど、少ししたら色々話してくれるようになった。よかった。

「…そういえばエルちゃん、お家どこなの？そろそろ戻らないとお父さんと心配するんじゃない？」

「…だいじょうぶ。心配なんかされないし…おねーさんと話してる方が楽しい。」

、おつと？これは…

「じゃあ、エルちゃんの家まで案内して？親御さんと話してみる。」

「…それぐらいなら…まあ…いいよ。」

渋々みただけど、分かってくれて良かった。

で、家を出て、エルちゃんについていくと…

「…コンコン…」

「つて、コンコンつて…」

村長さんの家でした。

え、エルちゃんつて村長さんのお孫さん?!いや、娘さん…?それは無いか。というか村長さん自体何歳なんだろう。

まあ…とりあえず、エルちゃんに少し時間がかかるかも、と言つておいて、家に陰に隠れたのを見てノックする。

コンコンコン

ガチャ

「はい…？あ、あなたは…」

「あ、朝からすみません。フェンリオ魔法騎士団のアリスです。その…ちよつとお話がありました…」

「魔獣のことですか？」

「あ、そのことも含めて、です。」

「分かりました。とりあえず、入ってください。」

さて…

「今日、ここに伺ったのは、エルちゃんの事です。」

「…あの子が何かしたのですか…？」

「あ、いえ、逆です。最近何か、エルちゃんについて変わった事とか、妙な怪我をしたとかありませんか？」

「……………ありません。最近、というのがどれ位かにもよりますが、ここ一ヶ月ほどは。」

「持病があったみたいなのは…」

「あー、それならあります。生まれつき、あの子は魔力に対する耐性がほぼ全くと言っていいほど無くてですね…ですが、とある魔術師の方が治してくださったので心配はありませんよ。」

うーん…そうか…？

「そう…ですか。」

「まあ、ただ…昨日から家にいなくて…たまにそういう事はあるのですが。」

いや、たまにあるんならそれはそれで問題でしょうよ。何とかしようと思わんのかね…まあ、その部分もちよつとエルちゃんに聞いてみよう。

「あ、今は私がお借りしている部屋の方にいます。少し事情があったようで…」

「あの子はまた迷惑をかけて…本当にすみません。」

「あ、いえいえ！全く迷惑なんて思ってませんよ。…それと、魔獣が現れるのは月に2回と仰っていましたが、大体どんな日か分かったりしませんか…？」

これはできれば分かるといいんだよね。後々が楽になるし。

「ああ、満月の日ですよ。白い月と黒い月の満月の日に魔獣が現れるんです。…今日が白い月の満月の日なので…おそらく現れるかと。」  
「分かりました。話はこれで以上です。朝からすみませんでした。」  
「いえいえ、こちらとしても依頼している側ですからな。これぐらいの情報提供は致しますよ。」

「ありがとうございました。では。」

で、玄関を開けて外に出る。と、

『あの村長…何か隠してるようだな。』

「え、本当に？」

『ああ。たしかに表面上はなんの違和感も無いように見せているが、少し違和感があった。…それも、かなり重要なことを。それに、あの魔術師とかいうのも気になる。』

「それには同意。魔力に耐性がないだけで、病気じゃないのになんてやって治したんだろう…」

『…我の方でも少し調べてみよう。それに最初、満月の日に出てくる、なんて情報も聞かされずに、月に2日、としか言わなかったしな。』

「…そっか、それも含めて調べないとね…つて、あれ？」

エルちゃんが見当たらない。

「あれ…？」

キョロキョロしていると何か声が聞こえた。

「~~~~、~~~~~~~~！」

「~~~~:~~~~~~~~。~~~~~！」

「…?なんだろう…？」

詳しくが聞こえないどころか、何か言ってる、位にしか聞こえない。近づいてみるとエルちゃんが何人かの男の子に突き飛ばされていた。

「っ！ちよつと！」

「やべつ、人だつ！」

走って逃げ出すも、こっちは一応暗殺者。気配を消して回り込む。

「はい、捕まえた。」

「げっ！いつの間にかここに…」

「さて、何してたのか話してもらおうか。(ニッコリ)」

「……………」

「…人に言えないような事してたの？」

「……」

「はあ…いい？やっつていいことと悪いことつてあるよね？まあ、何をやっつたのかこつちからはあの子を突き飛ばしてたみたいに見えるけど、違うなら違うと言つて。」

「…突き…飛ばした…」

「何でそんな事したの？」

「……………」

「黙ってたらわからないでしょ？胸を張つていいことと言えるならそのままでもいい。悪いと思つてるなら謝る。それぐらいは分かるでしょ。」

まあ…それがまた難しいところでもあるんだけどね…

「…………ごめん…」

「言う相手は私じゃないよね？」

「……」

すつ、と男の子はエルちゃんの方に歩いて行って、謝っていた。

で、その後こつちの宿に戻つて、団員の皆に話もして、エルちゃんと部屋にいた。と、

「…おねーさん、今日だけ、今日だけは夜は絶対にここから出ないで…？」

うん？魔獣の事かな？

「魔獣が出てくるから？」

「っ…そう…だけど…違う…」

「？」

そうだけど…違う…？

「……………理由は…聞かないで…でも、絶対に外に出ちや駄目…！」

「…それは…ちよつと無理かも。私も一応魔法騎士団員だからね…でも、できる限りこころにしかいないようにするよ。…ただし、離れ

ざるを得ない状況になったらその時の判断によるけど…それで良い？」

「っ……うん…それでいい…」

少し悩んだ素振りを見せて、了承してくれた。と、

『…お主、』

「わっ!？」

「…メア、出る時は言ってるば…前触れもなく出てこないで…」

『ぬ、すまない。まあそれよりだが…』

「え、え…ええ？か、影…龍…?」

「あ、うん…。何か懐かれちゃって…メアっていうんだ。別に暴れたりしないから大丈夫だよ。」

「う、うん……」

『話を戻すぞ。お主、その魔獣に襲われたり、襲われてなくとも近付いたりしなかったか?』

「っ……して…ない………」

『……そうか、すまぬ。我の考えは間違っていたようだ。』

うん…少なくとも何かあったのは分かるんだけど…何があったのかまでは分からないね…

そして、その夜…

「…夜は絶対に外に出ないで…か…」

しかし、一応騎士団員である以上、出ないわけにも行かないと、

「…?エルちゃん…?」

ふとエルちゃんが走って森の方に行っているのが見えた。まあ、暗かったから気配探知も合わさって、だけど。

「…すみません、ちよつと行ってきました。」

誰に言うでもなく、こつそりと抜け出し、森の方に走っていく。『…エルちゃんー!エルちゃんー?』

呼んでみるが、返事は無い。見間違いか…?と思っていると…

メキ…メキメキ…ドシーン…バキバキバキ…ザン!

何か音が近づいてきた。

本を出し、メアもポケットから出て大きさを人より少し大きいぐら  
いにし、臨戦態勢を取る。と、

「ガオウアアアオ……！」

「っ!？」

説明を受けていた通りの真つ黒な体毛、血のような赤黒い目、胸辺  
りに日本の傷があり、二足歩行の獣のような姿。

黒魔獣人、マードーだ。

「っ……こいつがここにいて……エルちゃんがないってことは……まさか  
……っ！」

ただ、そんな気はしない。根拠が無いため、自分に思わせているだ  
けかもしれないが、なんとなくその事態は免れている気がする。ま  
あ、それよりまずは交戦をする。

「グオアウオオオオ！」

上に向かって咆哮して、目の前に飛んでくる。何とか躲し、体勢を  
整える。……ちよつと掠ったね……危ない。

「ガウオアアア！」

と、火の玉がほぼ無数と言われてもおかしくない量吐き出された。

まずい、あれ全部避けきるの無理じゃない……？

と、

『ハアツ！』

メアが黒い炎を吐いてすべての火を相殺させた。

「ありがとう！」

『礼は後だ！ともかく何とかしないと！』

と、次は右手を大きく振りかぶって下から上に振り上げた。と、爪  
痕のようなエネルギー弾が飛んできた。

何とか躲して反撃もする。

「っ、生成……はっ！」

毒のナイフを手のひらに生成して、思いつきり投げる。が、

キーン……カランカラン……

「っ、うっそお……」

当たったときに鋭い金属音のようなものを鳴らして、刺さらずに落

ちた。

ナイフだよ？普通刺さるでしょうが：…どんだけ硬いのあの皮膚：いや、毛か。

「しっかし、ナイフが当たらないとなると：…毒魔法で動きを封じてみるか：？」

そんなことを考えた瞬間に影がかかり、黒光りする爪が振り下ろされた。

あつぶな：…1秒でも遅れたら綺麗に裂かれてたかも。

「っ、毒6魔法：錯乱への誘い！」

本をめくり、宣告する。

と、光弾と毒霧が広がっていく。でも、

「うっそ：…」

あの大きな凶体で飛んだり身体を捻ったりして光弾を躲した。：どうなってるの？

ともあれ、かなり劣勢。どんなに威力が高かろうと当たらなければ0ダメージだし、無駄にこっちの体力が削られる。

…それに、エルちゃんの事も分かってない。…どうすれば：…どうしたら：…！

## 撤退

「っ！」

考えてる間もなく攻撃が熾烈さを増す。

ギリギリ見切れてるものの、躲すので精一杯……！

『チツ……ハアアア！』

と、メアが横から黒い炎で怯ませてくれて、何とか離れる。と、そこで一瞬油断してしまった。

「グオアアアアッ！」

「っ！」

ドッ！

ドガアアアン！

怯んだと見えたマードーはそのまま超速で立ち直し、横薙ぎに降った腕に直撃して飛ばされる。で、岩に直撃して、その岩も砕けた。

「カツ……」

そのまま倒れる。

なんとか意識は保ててるけど……！

『ツ……アリス……！』

メアがマードーを尻尾で叩き、距離を取らせてこっちに来る。

『大丈夫か!?!』

「っ……大丈夫……夫……」

『どう見ても大丈夫ではないな……』

さつきから手足に力が入らない。くそ……動け……さつきまで動いたはずなのに……！

「っ……」

「ガアオウアア……！」

『ツ……！我が主に手を出したな……?』

と、メアの体がどんどん形を保たなくなる。正確には、影と同化し始めている。目のあたりが金に光り……

「ウオアアアアガアアアアアア！」

メアが上を向き、大声で咆哮する。



それだけでも吹き飛ばされそうな勢い。…忘れかけてたけど、メアってそういうえば龍族の中でも上位の龍だったよね…

『グガアアア…！グルオアアア！』

『…失せろ…！犬が！』

バゴオオオオオン！

影が圧縮されたような真っ黒なエネルギー弾が飛びかかるマーダーを取り囲み、更に爆発して一気に黒が白に変わる。

『ガアアア…！』

明らかにダメージを負っている。でも…

『メ…ア…！…！』

『っ！アリス、どうした!?!』

あれは…

『攻撃…しちや…駄目…！…！絶対…！』

『なっ…!?!』

『私を…乗せてっ…村まで…連れてって…！一時…撤退…！』

『っしかし…』

『お…願、い…っ！』

と、マーダーが傷ついた体で再び飛びかかった。僕はメアの上に乗っているところで、メアも動けない。

あっちゃー…タイミングが悪かったか…

と、そのとき、

『ガッ…ぐ…ウ…！』

マーダーの動きが、ほんの数秒、止まった。いや、正確にはかなり鈍った。そのおかげで…

バサッ！

ドドオン！

メアが飛んだ瞬間、拳が地面に叩きつけられ、轟音が鳴った。

『…アリス、なぜ止めた…?』

『…多…分…あいつ…マー、ダーは…———なんだと、思う…』

『なん…だと…!?!いや、それなら確かにある程度説明はつくが…なぜ

そんな事になっているのかの理由がわからないぞ。…つと、  
メアが何か言ってるみたいだけど、正直耳に入ってきてない。体中  
が痛すぎる。意識…が…深、く、に……………」

《バートside》

アリスがいなくなった。

さっきまでいたはずなのに…どこに…？と探していると…

「…あれ、メアじゃないか…？」

ふとルーズさんが言った。メア？と空を見ると…

『癒術士を連れてきてくれ！かなり重症だ！』

空からメアが降りてきて、背中に何かを背負っていた…薄々気づいてはいたけど…

「っ！アリスっ！」

ボロボロのアリスだった。胸辺りでクローズラインの防御魔法は完全破壊されて、体が潰されるぐらいのダメージを食らっていた。頭とか足からもすごい血が流れていた。

と、

《危険状況。多量出血により血圧が低下、全身を強打した事などによりかなりのダメージを負い、失神状態の模様。このまま放置すれば命の危険あり。》

えっ…

「は、早く回復をお願いします…このままだとアリスが…！」

「っ！ジャンヌ！」

「回復6魔法、ヒール…！」

ジャンヌさんがヒールをかける。が、

《回復量不足。また、状態異常、出血が重出血に変化。本人の状態異常体制効果により、回復系魔法効果45%ダウン。》

「嘘…」

何その状態異常…!?分からない…何言ってるのか頭が理解しない  
せいで思考が進まない…！そうだ、こんなときアリスなら…うん、落ち  
ち着いて…落ち着いて…深呼吸…出血っていうのが進行して重出血

になって回復しにくくなってらるなら、少なくとも重出血っていうのから出血の状態に戻せばいい…

「ジャンヌさん！状態異常回復の魔法ってありますか!？」

「あ、あります！回復4魔法、スタータスレスト!」

《アリス・セナールの状態異常が重出血、失神から出血、睡眠へと移行。》

よし…!

「今です！ヒールを!」

「はい！回復6魔法、ヒール!」

…良かった…傷が塞がってきてる。何とか効いたみたい…

「いや…まだ…というか、これからが大変なようだな…」

「えっ?」

ふとヴァイスさんの向いている方を見ると、真っ黒な赤い目の獣がゆっくりと歩いてきていた。

「…魔王軍四天王幹部第二…黒魔獣人、マードー…!」

「あれが…!」

これまで出てきたのとは訳が違う。初めて行ったダンジョンのオークも強いと思ったけど、これは…桁が違う。強いなんて次元じゃない…!

「……………」

「…ガルアグウ…グオオオオオオ!」

っ！咆哮が…まるで体当たりされてるみたいな衝撃…!

「っ…」

「これはマズい…だが、行かないと…!」

と、クロドさんが剣を抜いて、飛び上がって斬りかかる。

「光7剣技、ライトブラスター!」

クロドさんの剣の軌道から光の光線が無数に弾け飛ぶ。その全部がマードーに飛んでいくけど…

「はっ!?全部躲されたっ!」

と、

《マードーがリベリオンクローを使用します。》

「クロドさん！上の方に避けて下さいっ！」

「っ…！（マズい…この体勢で避けるのは無理だ…クソっ…！）」

回避体勢を取ろうとしてるけど…間に合わない…！  
と、

「っ！はあああっ！」

「っ!?ジャンヌ!?」

爪跡のような弾幕のの軌道上にジャンヌさんが現れて…

ドガガガガガガガガガガ!

「っ！ジャンヌ！」

「ジャンヌさん！」

その全てを盾で防ごうとしてたけど…途中で盾が破壊されて…

「きやあああっ！」

「っ！」

直撃してしまった。と、ヴァイスさんが舌打ちをして…

「っ！ちっ、第壱氷結術式解除…！」

と、体が氷の鎧のようなもので包まれる。

「はアッ！氷6魔法剣技！フリージンググロード！」

と、剣を一振りして、氷が地面から次々出てきて、マードアのいる所まで伸びていく。そして、

「ツグウツ…！」

マードアの足が凍った。

「っ…！今だ！」

「燃え狂え！火6魔法、ディアボログフレイム！」

「…：火光魔法…フラッシュングインフェルノ…：…！」

「グオオオオアアアアア!?!」

アレグロさんとマリオネットさんの魔法が次々命中する。でも…

「ガアアア…グルオアアアア！」

バキーン!

無理やり足元の氷を砕いて跳躍。で…

《マードアがシャドーイングゲートを使用します。》

「っ！逃げる気です！それと、黒い渦に気をつけてください！」

黒い渦に飛び込んでどこかに逃げるつもりみたい。それに、いくつか同じものを出してそこから攻撃もしてくるはず…!

「っ！待てやアアア！」

ルーズさんが大量の斬撃を繰り出すけど、そのままマードーは逃げてしまった。

「クソっ…何処に逃げやがった…!」

「っ…それより、ジャンヌの回復が先だ！マリオネット！」

「…分かったわ…、怪我がかなり深いわ…私の属性回復魔法でも…傷を塞ぐのが精々ね…草光魔法、ホーリーグラス…。」  
「っ…どうする…唯一のヒーラーがやられてしまったぞ…」

と、

「…っ…」

「！アリス…!？」

《アリス side》

うっ…あれ？どうなったっけ…？確か…そうだ！マードーに吹き飛ばされて岩に激突して…メアに運んでもらってる途中で失神したんだ…

早く起きないと…!

「…っ…」

あ、やべ、体中が痛い…

「！アリス…!？」

「つつつ…ああ…バート。」

「ああ…じゃないよ！何してたの!？」

「それより…先に…お話が、あります…っ!」

「話？」

クロドさんが聞いてきた。

「はい…かなり重要なことです…それによって…明日、村長さんをお呼びして…ちよつとこちらからは出向けそうにないので、と…。」

流星にこの怪我じゃあね…ちよつと動けそうにないんだよね…多

分ジャンヌさんとかマリオネットさんが回復はしてくれたのかな？

「…俺たちもその内容を聞くのはその時、つて事か？」

「…はい…。少し、長くなりますし、今の所確信がありません…だから、村長さんに聞くんです。」

「…分かった。明日の朝に来てもらおう。」

…よし、内容を纏めとかないと…

「…まあそれは良いとして…なんで今回あんな行動を取ったんだ？」

…あ、これ怒られてる…？

「…実は、森の中に…女の子が、入るのを見かけまして…、それで、注意しに行こうと、思って、注意ぐらいならすぐ終わるだろうと森に向かった時に…マードアが出てきた、と、言う訳です。」

「…なるほど…つて、ちよつと待て、じゃあその子は…！」

「いや、クロド、それは無い。あいつを凍らせたとき、血が凍った反応はなかった。少なくとも、食われたわけではないはずだ。」

ヴァイスさんが体の周りの氷をかき消しながら言った。

「…なら、なんとか逃げれた、と考えるのが良いか…」

……………なら良いんだけどね…

「それでも、事前に一言ぐらい言ってから行ってくれよ？こつちじやかなり慌てたんだからな？まるで気配を感じなかったし。多分咄嗟の事で気配隠蔽が無意識に使われたんだろうけど…」

…すみません意図的に使いました。

「まあともかく。ひとまずは今日はここで撤退だ。思いの他相手が上級すぎたからな。作戦を立て直そう。それに…ジャンヌの怪我もある。」

「」「はい。」「」

目をまたいで午前10時。

「……ヒール。」

ジャンヌさんにヒールをかけてみる。が…

「駄目かあ…」

なにかに阻害されているのかうまくかからない。と、

「……アリス……?」

「、マリオネットさん。」

ふと後ろにマリオネットさんがいた。

「……今…魔法宣告…した…?」

……ん?魔法宣告?

「魔法宣告というのは…?」

「……私達が魔法を使う前に言う属性やランク、魔法の名前の事ね…。これを省略して魔法を使うことは出来ないわ……。」

……んん?

「……今…ヒール、としか聞こえなかったのだけれど……。」

「…そうですね。ヒール、としか言っていないです。」

でも、ちゃんと掛けられてる。いや、掛けられてはないんだけど。

「……バートが言うには状態異常の影響でバフ系の魔法が掛かりにくくなってるみたいよ……私のホーリーグラスも上手くかからなかったわ……。」

状態異常…か…

「……それより…魔法宣告の話……!」

あ、そうだった。

「そもそも…よく考えると、魔法って何なんですか?」

法と物理、科学にまみれた世界で生活してた僕にはそもそも魔法自体が何なのかよくわからない。

「……そうね…なら今日は、その事に関する授業でもしましょうか……。」

、そう。最初にクロドさんに言われたように、マリオネットさんは勉強に関しても色々教えてくれる。師匠、もしくは先生ポジションだね。

「……じゃあ…ひとまずバートを呼んでくるわ……。」

マリオネットさんはそう言って部屋を出ていった。

僕?もう怪我の方はだいぶ大丈夫なんだけど、一応怪我人ってことでジャンヌさんと同じ部屋に寝かされてるよ。あんまり寝てすらないけど。

## 何者

「……じゃあ…始めるわね…。アリスには言ったけれど…魔法っていうのが何なのか、って所からね……………」

今、バートと横並びで机に座って座学の時間。

「……まず…魔力っていうのが何なのか、からね。…魔力っていうのは何だと思う……………」

と、バートが手を上げて答える。

「この世界に存在する上で必要不可欠な物…体内で作られるエネルギーの一種、ですね。」

こう見えてもバートはかなり頭がいい。座学は強いんだと思う。

「……そうね…。でも…正確に言うとき少し違うのよ…………。人身ひとみいっしん一神って知ってるかしら？」

と、マリオネットさんが空間に青白い字で『人身一神』と浮かび上がらせる。バートは首を傾げてるし、もちろん僕も知らない。

「……実は…という程でもないけれど…私達は体の中に守護霊的な者がいるの…。その存在は…神に近いもの…義神と言われてるわ…………。…実際それを見たりした人はいないけれど。」

へー…初耳だ。それで人の身に一の神、か。

「……魔力…というのはその義神との結びつきの強さ…義神から力と魔法陣の式を受け取ることでできる為のお金のようなものなのよ……………」

なるほど…だから魔力が大きい、っていうのは力の大きさになるのね。

同時に、ある一定量に満たすとその義神がそのレベルに合った魔法陣を教えてくれるから使える魔法が増える…って訳か。…あれ、それお姉ちゃん凄くない？ランク3なのにランク8の魔法陣描いてたよ？…何で？

「……そして…優勢魔法っていうのはその義神の一番得意な属性によるもの…なの。…私はちよつと特殊なんだけど…そこは今は良いわ……………」



…うん。

「……ちなみにだけど…無属性魔法は例外…。無属性魔法は義神を通さずにそのまま使えるの…。まあ、義神に通す魔力を自分で使うのが無属性魔法…って事ね…。だから…これは人間にしか使えないわ…。魔物には義神がないから…自身が義神みたいなものなの…。生物の特徴として魔法を使う…みたいな感じね…。」

無属性魔法は例外…ね。なるほどなるほど…

「……そして…専攻っていうのはその義神の属性を強くするものでもあるわ…。だから…属性が限られる代わりに魔法の威力が上がるの…。」

なるほどね…。じゃあこの世界には火、土、大気、水、草の属性の義神が多い訳だ。…え、じゃあ僕には毒属性の義神が宿ってるの？

「……で、ここが重要なんだけど…宣告っていうのはね、その義神に力を貸してもらうための儀式的なもの…。で、それを長くしてより強い力を貸してもらうのが詠唱ね…。」

ほうほう…。ん？僕宣告無しで魔法撃つてなかった…？特に最初、父さんのマネをした時に出たファイアボールなら宣告どころか何も言わずに手振っただけだよ？

「……そう…。多分気づいたと思うけど…無宣告で魔法を放つのは無理なのよ…。人間の力だけでは属性魔法を放つことはできないの…。魔法を作るのが難しい、っていうのは…そういう事…。」

「…え、じゃあ私は…？」

「……失礼を承知で言うけど…『異常』…。…そんな簡単に魔法なんか作れないし、使えない…。…ましてや前例のない属性の魔法なんか…義神が簡単に認めるわけがない…。」

う、うーん？じゃあ僕何者？…もしかして転生者だからこういうのがあつたり…？

「……それに…」

「？」

「……事例が少ないからちよつと確証がないけれど…そもそも…専攻しなかった魔法使いは…まともに魔法が使えなくなる筈なの…。」

「……………えっ?」

「……………義神に負担をかけすぎるとよ……………。あなた達も…得意でもなくて、上手くならないとも分かっていることを延々とさせられれば…ストレスがかかるでしょう…?それと同じ…。実際…手元にある前例は50件しか無いけれど…そのうち49件は無属性魔法以外が使えなくなっただわ……………。無属性魔法は前に言った通り義神を通す必要が無いから……………」

…まじか…ん?49件?

「その…残りの1件というのは…?」

「……………義神が宿主を離れて…体が魔力に耐えられなくなって亡くなったそうよ……………」

……………ん?体が魔力に耐えられなくなって亡くなった…?どつかで聞いたことがある話のような…あ、

「……………まあ、つまり…義神がいなければ魔法を使うことは愚か自分の魔力にすら耐えられなくなって死ぬ…という事になるわね……………」

……………まさかとは思うけど…

「……………その義神に力を借りる為に宣告、詠唱があるのよ……………。…だから人間は宣告、詠唱がないと魔法は使えない……………。例外なく、ね。」

……………ここにいますケド…

「…え、でも、アリスは前に宣告とか無しで魔法使ってたんですけど……………」

「……………よく……………?」

「はい。使ってたのといえば…ヒール、フレイム、ブリザード、あと…なんだっけ、あのアリスの作った名前の長い…」

あ、イントウデリリウムの事だろうか。

「イントウデリリウムかな?今は錯乱の誘いになってるけど。」  
「ちよっと待ちなさい。なってるけど?」

…あ、やべ、マリオネットさんの何かのスイッチ押した。語尾とかの間がなくなってる。

「い、色々あって名前を変えたんです。私しか使ってないので、変えて

も問題ないかと……」

「はあ……規格外もいいところね……さつき言った通り、宣告は短縮された詠唱、呪文と同じものなの。勝手に変えたりしたら内容が変わったり使えなくなったりするわ。……口ぶりからして内容は変わってないし、使えるんでしよう?」

「……はい。」

「……ちよつと前例に囚われなさすぎじゃないかしら……」

それはこちらに言われてもどうしようもないですね……。あと口調が戻った。

「……コホン……まあ……普通は魔法を使う場合は宣言、詠唱を行うわけ……。……この言葉が正確かつ、魔法陣の式が正しくないと魔法は使えない訳……。……でも……改良に改良を重ねられれば、魔法に対する力強さは増していく……。そして……」

「……そうやって魔法、魔術を極めて行つて……100%以上の力が出せるようになった魔法があるわ……。魔法使いの中で……記録に残っている中では二人しか使えたものがない魔法……恐らく聞いたこともないと思うけれど……魔法、魔術の最終到達点……始祖神塔魔術と呼ばれるものがあるわ。……内容は高度すぎる上……上位の魔術師……何なら魔導師でも一つの式の断片を読み解くだけでも一生をかけたといかないようなものよ……。……でも、それが扱えられるような事になれば……死者蘇生、次元移動、空間固定、そして……完全神化。……要は……神になれる……という事よ……。……」

始祖神塔魔術。聞いたことだけあった。

内容は、マリオネットさんが言ったように人間の力を遥かに超越したものの内容。

扱うことができれば正しく神。人間を辞め、神になる権利が与えられる上、寿命という概念が無くなり、不老になる。

「魔法使いの最終到達点……ですか。」

「……ええ……。……まあ……もつともこれは有無属性魔法の中なのだけれど……」

「?有無属性魔法……?って何ですか?」

ふとバートが聞いた。僕？…知ってる。この世には大きく分けて魔法は2種類ある。有無属性魔法って言うのは普通に使う魔法の事。もう一つが……

「……それは言えないわね…そもそも普通なら…その名前すら知らないことでもあるのよ……。…まあ…一つだけ言っておくなら…この世には魔法は2種類ある…って事かしらね……。…」

…うん。実は…使いちゃったりするんですよ…これが…。本当にあの家にあつた図書室、誰があの本持ってきたんだろう。まあ…使おうにも魔力が足りないんだけどね。

「……はい…じゃあ今日の座学はここら辺ね……。…そろそろ団長から呼ばれると思うわ……。…」  
と、

「アリスー？終わったかー？」

早々にクロドさんから呼ばれた。

…てかなんで僕だけ？

「女の子が震えながら来たんだが…おねーさん、としか言わないし、辛うじてアリスの名前が聞けたんだが…」

「っー！」

エルちゃんだ。

「分かりました、すぐ行きます。…あと…バート、マリオネットさん、少し出ていていただけますか…？」

「？何で…？」

「……何かしら聞かれると都合が悪いのかしら……。…？」

「…はい、かなり。」

「……分かったわ…バート…出ていきましょう……。…」

「あ、は、はい！」

空気を読んでくれたみたい。良かった。

…さて…エルちゃんには少し話をする事があるからね…本来はあんまり聞かないべきなんだろうけど、ね。

で、玄関まで行くと、

「……………」

服の裾をぐつと握ってガチガチになっているエルちゃんがいる。

「おはよう、エルちゃん。」

と、エルちゃんはビクツとして…

「あ、お、おはようございませす…」

「…何でそんなに緊張してるのさ…ほら、入って。」

頭をポンポンと2回撫でて入るように促す。

と、ビクビクしながらも入ってきてくれた。

「さて…と、今日は何の用？」

部屋に入って対面に座り、聞く。と、

「あ、ああの、怪我…だ、大丈夫…なんです、か…？」

「、ああ、問題ないよ、死ぬ程じゃない。」

肩を回して見せる。

「お、おおおねーさん…！！」

「ん？」

「じ…：…実は…わ、私…：…！！」

「き、昨日、の…魔獣…：…なん、です…：…！！」

## 真実

《エルside》

「……………本当に？」

「っ…うん…！」

「なんで急にそれを話す気になったの？」

「っ…怒ってる…」

「せつかく、仲良くなれたと思ったのに…」

「…魔獣になっても…記憶は、残るから…おねーさんとかにいつばい怪我させちゃったから…！…どうしたら良いのか分かんなくて…！でも…謝らないと…思っ…だから…！」

「…そう。」

と、フツ、と影がかかった。おねーさんが立つたんだ…ああ…叩かれるのかな…怒鳴られるのかな…嫌だな…でも…

「…よく…頑張ったね。」

と、おねーさんは私をギュツてした。

「…え？…何で？」

「なんで…」

「辛かったんでしょ？…苦しかったんでしょ？…私も、もしかしたらエルちゃんも魔獣なんじゃないのかなって昨日考えた。でも、どう考えでもエルちゃんみたいな子は、じつと一人で抱え込んで耐えてたんだろ…な…って思っ…て。」

「…おかしいよ……だ…だ…だ…わたしは…だ…だ…だ…！」

「無理しないで。見てるとこ…ち…ち…ち…まで苦しくな…ちやう。」

「う…う…う…！」

あ…目から…温かい水が…あれ…おかしいな……あれ…いつもなら…こんなの…冷たいだけの筈なのに…暖かくて…苦しい…

「…う…う…わあ…ああ…ああ…ああ…！」

「……………」

おねーさんはわたしが泣いて泣いて泣き止むまでずっとギュツてして、頭を撫でてくれた。

…こんなに…あったかい気持ちになったのなんか…いつぶりだろ

…

「ぐすつ…うう…」

「もう大丈夫？」

「うん……」

「じゃあ…話してもらおつか。あ、やっぱり話したくなかったりしたらいいよ？」

「ううん。…話す…。」

お礼じゃないけど…おねーさんには話したい。

《アリス side》

焦ったああ……

急に泣き出すからどうしたら良いのか分かんなくなっちゃった…

…でも、話す気になってくれたみたいで良かった。

「…わたしは…生まれつき体が弱くて、ずっとベッドの中にいたの。…でも、原因とかも分からなくて、日に日に力が入らなくなっていく。その時に、この村に一人の魔導師さんが来てね、わたしの病気は体が魔力に耐えられなくなるものだって言ったの。だから、お父さんはどうしたらいいのかを聞いたの。そしたら、自分なら治せる、って言うてね、…何をされたのかはよく分からないけど、その通りにわたしは元気になったの。でも…周りからなんでか色々言われるようになって…最初の白い満月の日…突然魔獣になったの。」

「……………」

「そこから、周りはわたしが魔獣だ、って知ってるみたいでずっと避け続けてた。突き飛ばされたり殴られたりすることもあった。そうされればされるほど…魔獣の力が強くなった。そしたらまた酷いことがだんだんもつと大変になってきて…」

「一回、殺され、かけた…。」

「…そっか。ありがとう、ある程度わかったよ。」

なるほどね…凄惨すぎない？色々。

「おねーさんは…わたしが何でこんな体質なのか…分かったの？」

「…ちよつと微妙。でも、これかなっていうのはある。まあ…エルちゃんにはちよつと難しいかな…」

「教えて。分からなくてもいいから、聞きたいの。」

お、おう…眼圧が…

「……分かった。できるだけ噛み砕くね。これは、私の先生から聞いたんだけど、人には守護霊みたいな感じの、その人を守ってくれる神様みたいな人が一人に一人、付いてるんだって。」

「神様みたいな人がわたし達に一人ずついるの?」

「うん。…で、その人達は「義神」って呼ばれてるの。」

「ぎしん…?」

「うん。まあ、名前はいいんだけど、もしかしたらエルちゃんは生まれつきその義神が体に宿ってない、もしくは弱すぎたのかもしれない。それで、エルちゃんが魔力に耐えられなくなつて…って事なんじゃないかな。」

『我もそう思うぞ。』

!?

「わっ…」

「…また…」

また勝手に会話に出てきた…まあでも、今回は助けてもらつたし、いつか。

『それで、その魔導師と名乗る輩はお前の体に義神の代わりにマ―ダーを宿した…だが、それに耐えきれれるほど体が成長しきつてないうえ、奴の邪気が強すぎて、一定周期で表に出るようになった、という感じか。』

「…うん、多分そういう感じだと思う。ただ…そのマ―ダーを宿せるような魔導師っているのかな、つてところはあるけどね。腐つても魔王軍四天王幹部。誰かの軍門に下るなんて…」

考えられないよね…しかも、こう言うのも良くない気がするけど、魔獣の一種だから考える力が乏しいはず。そんなに簡単に…

『ぬ?何を言つておる。一人いるではないか。』

「え?誰が…つてまさかつ!」



…えっ、

『ああ、多分考えている通りだろう。』

「エルちゃん！その魔導師の顔とかがって分かる!？」

「え、あ、え、えーと…黒のフードを着ててよくわかんなかったけど…紫の髪は見えて…あ、何か紫色の髪じゃないつるつるした何かが見えた気がする…けど…」

…うわあ…まさかそれ…

「…多分角じゃん…」

魔族の中でも紫の角を持つのは一種類しかない。

魔王。

そっかあ…魔王ならマードーも操れるよね…それに、村の中に四天王幹部を送り込めるわけだから、その村は比較的簡単に壊せられる…ってところかな。

「まあ…まだそう決まった訳じゃないか…とりあえず、今日、村長さんに話をする。そこで「駄目!」…え?」

「っ…今まで、たくさんの人がここに来たの。…その中には、私の正体を見破った人もいるし、お父さんに直接話をしに行った人もいた…でも…まだ誰も帰ってきてないの……」

「っ!？」

『何っ!？』

嘘…そんなのって…

「おねーさんは…そんな事になってほしくないの…!」

「……………ありがとう。」

「!」

でもなあ…

「でもね、私はそれでも話はしなくちゃいけない。どう考えたってそんなのおかしいからね。」

「そんなっ…!でも…!」

「確かに私はここから見たら部外者だけど、目の前に困ってる子がいるのにそのまま見捨てるってのはねちよつと問題があるしね。それに…私、結構強いんだよ?」

「それでも…お父さんはランク8の魔術師だよ…それに戦いにも慣れてるから…」

『それを言えば、アリスはランク9だぞ。それに影龍と一緒に行くのだ。怖いものはあるまい。』

いや、本来なら僕だけでもいいんだけどね…絶対メア着いてくるし、何ならメアだけでこの村…いや、何なら魔王とか倒してきてもおかしくないかも…

「っ、強いのは…分かってるけど…お父さんが強いのは魔法じゃないって演算能力…っていうのかな…？詳しくは知らないんだけど…魔法陣を読み取って反転させて対消滅させる…とかなんとか聞いたことがある…。」

っ！演算能力って言うかそれって…

「…ああ、演算ではなくそこまで行けば逆算、だな。」

逆算。極めればありとあらゆる魔法を対消滅させつつ、逆転した魔法陣の魔力で反撃もできる最強のカウンター魔術。

『まあ、私の攻撃は魔法ではなく影龍という種族の特徴として火を吐くわけだから逆算されることはあるまいが…』

「あ、でも私魔法陣無しで魔法使える…。」

『はっ？』『えっ？』

「ランク3魔法がギリギリ限界だけだね。」

あの最初に魔法を使った日、魔法陣は使っていなかった。それでの間、もしか、と思って魔法陣を展開せずにやった結果…

試した魔法のうち、ランク3魔法のアイスピア、ランク2魔法のフレイム、ブリザード、リーフエッジ、リバーガンが使えた。

ランク1魔法は無機物操作とか浮遊とか、全般できた。

『ぬ…もう言うところは後にして、しかしランク3魔法までだな…流石にそれでちまちま倒すより、こちらが倒れるほうが先だろうな…』  
「だから…お父さんの所には行かないで…私が耐えてたらそれだけで良いんだから…！迷惑がかかっちゃ…」

「……それだけ？」

「…え？」

《エル side》

一瞬、息が苦しくなった。

「それだけな訳無いでしょ…。」

「っ!？」

な、なんで…!?なんで…怒ってるの…!？」

「いい?私の心配をしてくれるのは嬉しいけど、自分のことももっと大切に。ずっと一人で耐え続けるようなことがそれだけで済むわけないでしょ。そうやって言うって事は私とメアがやろうとしてる事は全部無駄だつて否定してることになるんだよ?」

っ……

「本心で助けてほしいって思ってるんだつたら口に出して言って。迷惑なんて思うわけ無いから…」

「……………」

怒られてる…のに、なんでこんなに…うれ…しい…?」

「っ…助…けて…っ!」

ふっ、と口から声が出た。

大きくない声だけど、おねーさんはちゃんと聞いてくれて…

「分かった。…よく言えました。」

と、頭を撫でてくれた。

でも、これで良かったのかな…

「じゃあ…ちよつと考えようか…。とは言っても、ちよつと案はあるんだけどね。」

『何?あるのか?どうする気なのだ。』

「今日、どっちにしても村長さんと呼んでるんだ。…私一人じゃどうにもならないかもしれないけど、魔法騎士団全員のいる所で、会議っていう名目で集まるから、下手な手出しはできないはず。」

「……………」

「そこで問いたです。もしもがあればメアにも頼むし、最大に警戒はしておく。逆算式は一つの逆算式で一つの魔法陣式にしか作用できないから、何だったら攻撃するときには大量の魔法陣で攻撃してもいい。数があれば相殺される量を超えて攻撃できるかもしれない。」

「…大丈夫…なの…?」

「何度も言うようだけど、私、こう見えて結構強いんだよ?」

…大丈夫…なの、かな…?

「…じゃあ…わたしもそこにいる。」

「…えっ?」

「あんまり役に立たないかもだけど…わたしも手伝いたい…!」

「…うん、分かった。ただし、約束して。怪我とかはしないようにすること。」

「っ…うん!」

怪我…するようなことになるのかな…?…だったらなおさら行かないと…

わたしは、魔法自体あんまり上手に使えない。でも、一つだけまとも…:それなりに上手に使える魔法がある。…:大変なことになったら、3回までぐらいなら使える…:と思うから、助けてくれるおねーさんの…:力になりたい…:!

## 会議

「…では、お話を聞かせてください。」

あれから少し時間が経ち、村長さんが来た。

とりあえず即席の会議室に案内して団の全員が座る。エルちゃんはちよつと直接会議に出てもらうわけにいかなかったから気配隠蔽で隠れてこの部屋にいる。

「…村長さん、まどろっこしい事は全て省いて率直に聞かせてもらいます。」

…エルちゃんは、義神がいないんですね？」

「…っ！な、何の話ですか？わたしは魔獣の件について話がある、と聞かされていたのですが…」

目に見えて動揺してるね。ちなみに、エルちゃんにはいないか、かなり弱いつて言ったけど、多分いないんだと思う。そうじゃなきゃ、エルちゃんに義神が二柱降りる事になるしね。

「ええ、魔獣の件でお呼びしました。その上で聞いているんです、今後の展開に必要ですから。…はい、かいいえ、で答えてください。」

「っ……そこまで言うなら気付いているんでしょう。ええ、そうです。あの子には義神がいません。」

「……それはおかしいわ……義神がいないなら……あそこまで普通の生活はできない筈……」

「はい。村長さん、いない、ではなくいなかった、なんですよね？」

「……君はどこまで気付いている…。」

「ある程度は。憶測に過ぎないので確認のために聞いているんです。」

「……ああ、おそらく君の考えている通りだ。魔獣…マ―ダーはあの子だよ。」

「「「「「!?」」」」」」

…やっぱ皆びっくりするよね…

「でしようね。おかしいとは思ってたんですよ。…なぜ最初に私達にそれを言ってくれなかったんですか？」

「……それはこの会議に関係あるのか？」

「もちろんです。」

間髪置かずに言う。言うのを後々に伸ばそうとしてるのがバレバレだ。

「……本人の前で言え、と？」

「!? ……バレてたか。」

「……流石はアンチメイジ、と言ったところですか？」

と、

ガツッ！

「!」

僕の顔の真横に杖が突き刺さった。

「……貴様……何処でそれを知った……!」

「演算のスキルを超えて逆算を使えるようになるのはアンチメイジのみですし。……逆算のことについては彼女から聞きました。」

「あのガキ……!また余計なことを……!」

ガキ……?

「そこだな!」

ヒュッ、と村長さんがどこから出したのかナイフを投げた。その先にいるのは……エルちゃん。

でも、そんなの届かせる訳ない。こっちからもナイフを投げて弾く。

ガキイン!

「……チツ、暗殺者か……それならここまで上位の気配隠蔽を使えてもおかしくない……だが!」

と、村長さんの足元に大きく一つ、周りに中ぐらいで4つの魔法陣が現れた。

「火7魔法フレイム……」

「遅い。」

が、火が蠢き出したところでこっちは宣告を待たずにウエーブスネークで魔法陣ごと相殺する。

バゴオオン……

シユウウウ…

「!? なっ…!」

「…子供相手に情けない……」

たぶん今使おうとしたのはフレイムランスだと思う。火が槍みたいな形になろうとした。

「む、無宣告だと…そんなまさか…」

「何をほおけてるんですか? というか、あなたの子? 孫? なんでしょう。なんで攻撃を…」

「そんなやつが私の子供なわけ無いだろう! この恥さらしが…魔法一つ口クに使えない泣きじゃくつてればいい無能のくせに…魔獣にそのまま食われでもしてれば…っ!?」

………

「あ?」

…これは…

『おいアリス、落ち着け。今ここで暴ればそれこそ相手の思う壺だ。冷静に周りを判断しろ。』

「っ…」

っ…そうだ。一回…怒りを沈めないと…

一度深呼吸をして落ち着かせる。…よし、

「…あなたの子供ではない、とは? 養子、というやつですか。」

「…ああそうさ。こんな落ちこぼれを押し付けられるなんてツイてないものだと考えてばかりいた。」

…ん? 待った、思っていた…?

「だが義神がいない奴なんて言うのだった。使わない手はないだろう。」

…さつきから若干話がおかしい…?

と、ルーズさんが声を上げた。

「待て、お前まさか…アポストルか!」

「ふん、その通りだ。」

アポストル。

人の中で魔王の味方につこうとする人がたまにいる。原因は様々

だが、多人数に対して何か嫌な事があつたりとか、人に対して何らかの敵意を持っている人がそつち側につくことが多い。

…まあ、アポストルにはそれ相当の力が分け与えられるからその力目当てに、つて軽視してやって、殺される、なんてこともザラだったけど。アポストルになるのは基本的に重罪として処されるみたいだし。

「…なら、話は別だ。これから、村長、ではなくアポストルとして接させてもらう。光6魔法、ライト…」

と、クロドさんが魔法陣を出した…

「バカめ！」

瞬間、魔法陣の色が黄色からオレンジに変わり、逆向きに稲光が貫いた。

「！」

ドドオオン！

「っ…いな、何が!？」

「これが逆算だ。お前の反応速度ぶるとき、屁でもない！」

これは…想像以上。

いくらなんでも早すぎる。逆算式を展開するには相手の魔法陣か何の魔法を使うためのものかを見極めてその式の逆算式を展開、それを相手の魔法陣に滑り込ませて操る、つてのが仕組みだけど…宣告も途中、魔法陣ができて1秒足らずで逆算式を展開した…。

…強いかそんな次元じゃない。

「……………毒6魔法、錯乱への誘い！」

体の周りに5つの魔法陣、村長の後ろに2つ、魔法陣を置いて魔法を使う。が…

「…ふっ！」

光弾が着く前に逆算された。…何なら死角においたはずの魔法陣まで。

…でも、これで分かった。

「なら…毒7魔法、ドロップトキシン！」

村長の周りに10の魔法陣を展開、同時に、一つ、外れに設置して



において、そこだけ無詠唱でアンチマーク…魔力遮断の魔法をかけておく。と、

「何度やっても無駄だ！」

10の魔法陣は一瞬にして逆算された。でも、外れにおいた魔法陣は健在で…

「せつー！」

「なっ…!?!」

ドドーン…

一瞬驚いた表情を見せて煙に包まれた。

「ぐあっ…!?!」

ドロップトキシンの最大の強みは残留ダメージ。一度食らえば継続的に一定ダメージを与えられる。

「ぐ…な、何故…がはっ…」

と、バートがエルちゃんを目と耳を抑えていた。…ナイス。

「…逆算にも限界があります。最強と言われたる所以にも弱点の1つや2つぐらいあるんです。…すみませんが、一度更生を兼ねて封印させてもらいます。」

で、本を取って生成でナイフを作り、一閃した。

シウウアア…

と、村長は光の粒子となって消えた。

本を通さないと本当に殺すことになっちゃうからね。あくまで封印させるのであれば本を通さないといけない。

「…人に対してはやり辛いなあ…。」

にしても、やっぱり人に対して武器を構えるのは罪悪感が…理性があると、ね…

「アリスちゃん…?」

「…すみません、独断です。これ以上続けると周囲に危害が生じると判断しました。」

「おねー、さん…。」

「…エルちゃん…」

「…ありがとう…」

……

「…うん。」

「…ところだが、アリスちゃん、どうやったんだ？魔法陣を死角に入れて隠しても一発で場所を見つけられたし、逆算能力はトップレベルだった。…どうやって攻撃できたんだ？」

「簡単です。あの逆算は、先に微弱な魔力をドーム状に広げて、魔法陣の位置と構造を理解して逆算をしていただけです。…最初の錯乱への誘いの時に一瞬違和感があったので、気付けました。…あとは、上の方に置いた魔法陣にアンチマークをかけておけば魔力の探知にかからずに魔法が使える、と言うわけです。」

それと、あの反応速度の異常さは多分殆どの魔法の魔法陣の式を覚えてるんだろうね。僕の魔法は一瞬じゃ逆算しきれてなかったし。

「…なるほど…だが、アンチマークの宣告なんてしたか？」  
「……………」

あ、やべー、どうしよう。そこまで考えてなかった。無宣告とか言ってもいいけど、原理聞かれたところで答えようがないし何ならその前にウェーブスネーク無宣告で撃つちやってるし言った方が良くないやでも面倒なことに巻き込まれかねないんだけどいやもうすでに巻き込まれてるからいつその事…

なんて超高速で頭をフル回転させていると…

「アリスちゃん…？」

「…まあ…アリスは無宣告で魔法が使えるのよ…この間の授業で聞いたわ…私もちよつと信じられなかったけど…実際にやられると信用せざるを得ないわね…」

マリオネットさアアん！いやそうなんですけど！そうなんですけども！

「無宣告で…はあ…まあ、アリスちゃんだからなあ…もう大体の事はできるように感じてきたよ。」

…なんか納得された…？オーケー？

「…ともかく、ここですべきことはまだ残っています。…エルちゃんの中にいるマörderをどうするか、です。」

まだ一段落しかついでない。本当にここでするべきなのはこれである。

「…そうか…だが、どうすればいいんだ？マörderは今エルちゃんの義神の代わりなんだろ？それを取り除いてしまえば…エルちゃんも死ぬことになる。かといって、義神無しで生きることができないし、ましてや義神を交換するなんて聞いたこともないし、実際できた人は一人もいない。」

「そうですね。義神を下ろすのと入れ替えるのでは難易度の次元が違いますし、そもそも一度下ろされた義神は宿主を離れることはできません。…ならば、マörderから戦闘意欲をなくす、マörder自身の変化をさせれば何とかならないでしょうか。」

「んな無茶な！そんなことできると思ってるのか？これは倒せば終わりの話じゃない。今までの戦いとは一線を凌駕するレベルの難易度だ。…余裕を持ってマörderと戦えるレベルの人がこの人数ならまだしも、俺達のレベルじゃ勝つこと自体が難しい。そんなことにまで気を配れる保証はない。」

一瞬、ルーズさんが声を荒らげた。

…だよね…この間の戦闘を見ればわかると思うけど、私とて勝てる自信はゼロ。皆は…戦いを見てないからどうとも言えないけど、反応を見るに思わしくないみたい。うーん…なら…

「…私が、最前線で戦います。」

「っ…それは許可できない。そんな事してもアリスちゃんが怪我をするだけだ。…最悪死ぬ場合だつてある。」

「その他にできることが無いからです。…確かに策は一応ありますが、魔力が足りない上、机上の空論です。」

確かに、成功すればマörderを鎮静化させつつ義神にする方法はある。ただ…本当に机上の空論。失敗すれば膨大とかいうレベルじゃない量の魔力が一瞬でパー。…流石に…奥の手ぐらいにでもしとかないと駄目だ。

「っ……………はあ……………どうしても、か？」

「どうしても、です。」

「……………分かった。ただし！条件がある。」

長く考えてクロドさんは口を開いた。

「っ、はい。」

「危ないと思ったら必ず引くこと。後方支援だけでも君は本当に有能な人材だから、必ずしも前線で戦う必要はない。本来なら、状況に応じてタイプを変えるのが暗殺者だから。」

「…分かりました。」

次の満月は…確か、一週間後。…それまでに何とかしときたいね…

お願い

「おねーさん、」

あれから少し事後処理をして、各々の部屋で準備をしておくように、ということ今エルちゃんと部屋にいる。

それで、話しかけられた。

「ん、どうしたの？」

「…おねーさん、ほんとに強いんだね。お父さんが何もできてなかった。」

「あはは…まあね。」

まあ…あれはちよつと危なかった所もあったけど。主に暴走しかける、つて意味で。メアがいて本当に良かった。

「それでね、私に魔法を教えてほしいの。」

……………ん？

「え？」

「？あ、私…今使える魔法がいつこしかなくて…でも、おねーさんみたいにになりたいって思ったから、教えてほしいなって…」

「え、逆に聞くけど、私でいいの？他にもっといい人とかいると思うけど…例えば、私の師匠みたいな感じのマリオネットさんって人がいるんだけど、その人の方が…」

と、エルちゃんは首を、ふるふると振って、

「おねーさんに教えてほしい。」

とだけ言った。

何この子かわいい。…まあ、ともあれ。魔法を教えること自体は良いんだけど…急にどうしたんだろ。

「…にしても、何かあったの？急にそんなこと言い出すって。」

「あ、う…な、ないしょー！」

「ん、そっか。」

なんか妙なことを企んだりするわけじゃなさそうだし、問題ないかな。

魔法が使えないっていうのはこの世界じゃ致命的な気もするし。

「分かった。じゃあ…無属性ランク1魔法からかな。とりあえず外出よっか。」

とりあえず無機物操作ぐらいは覚えておきたいところ。何気に便利なんだよね、あれ。

《マリオネット視点》

……………おかしい。

私はあの後部屋に入って魔導書の準備やら何やらしていた。でも、やはり考えるのはアリスのあの魔法。

いくら考えてもやっぱりアリスは異常すぎる。そもそも無宣告魔法なんてのはそもそも理論を根本的に否定した魔法。全身の力を完全に抜いて歩け、とでも言われるようなもののはず。

「なのに…やってのけた。」

…本当に何者なのかしら。いくら調べても無宣告魔法の前例はなし、調べれば調べるほど存在が否定されていってさえない。

それに、まあ無理矢理納得したとしても、更に相手の使う魔法への演算能力ももはや化け物。あの一瞬であの逆算の仕組みをすべて理解するなんて私でも無理。…一応魔導師のクラスまで行ってる私がまだ10年しか生きてない子に抜かされるとはね。

…あの子なら…属性からの拘束を解いた、もう一つの魔法である限界魔法ぐらいなら使えるようになるかもしれないわ。…あるいは、始祖神塔魔術まで到達する可能性も…無くはないわね。

…つと、いけない。

こう考えてばかりだと次の満月の仕事に支障をきたす。

私はそう判断して一度外に出た。外の空気を吸いたかったのと気晴らしに。

…人の相手をするのは苦手。でも、外に出るのは好きなんて変な奴よね。…まあ、それは前々からだし、人の相手をするのが苦手なのはちよつと事件があっただけ。

…そのせいで感情が読めないだの無表情だの言われるんだけど。ま、私は気にしてないから別に良い。

それより作戦。

個人的には今のレベルじゃ、もう奥の手なんて無しで全てをぶつけたとしてもマードラーを相手には倒せるか倒せないかが微妙なところ。それを義神化しているマードラーの戦意を喪失させた上で本当の意味で義神にするなんてできっこない。何か考えがあるにしても、何の代償も無しにそんな大仕事ができるとは考えられない。

…まさかまた体を犠牲にして行動するつもりじゃないでしょうね…？…いえ、しかねないわね。

でも、私に止める権限はない。師匠的な立ち位置であれども境遇が私と似てるから——私には彼女みたいな天才的な力と運はなかったけれど——できる限り、力は貸してあげたい。

………これが愛着かしらね。

「ふふ…」

あー…おかしい。

………！魔力！波長的に…三体程のゴブリンかしら？近くね。今すぐ行けるわ。

タツ…ヒユウツ！

「…いた。」

アサシンタイプのゴブリンが二匹とアーチャータイプのゴブリンが一匹ね。

「！こんナトところにガキがいるゾ！」

「グギギ！ちようド腹が減つてたんだ！」

「ケケ…丁度いいじゃねえカ！」

…はー…またそれか。これでも一応は魔法騎士団内で二番目の年長者なんだけど。いかんせん見た目が義神の影響で固定されちゃつて…ま、いつか。

「………どうであれ…危害を加える気なら…相手するのみよ……」

魔導書、パットアリアを出現させる。…無宣告魔法…できるのかしら。

イメージし、魔力を通らせてみる。

こちら辺で周りに影響を出させないなら水魔法か大気魔法。イメージしやすいのは水魔法ね。

アクアランスでいいわ。…ふう…

イメージ…イメージ…！！

「……………やっぱり無理よね……………」

魔法はおろかそもそも魔法陣が出ない。

まともにやるしかないみたいね…

「何ダ？失敗か？グギャギャ！」

「ガキならアリエるナ！」

「……………ん…水5魔法、アクアランス……………」

空中に水の槍を三本出現させ、それぞれに突き刺す。それだけで何かを言う間もなく光の粒子になって消え、何も残らなくなる。

…封印結界魔法…こんな使い方があって考え方もしなかったわね。そもそもいちいち魔物を助けようとする人間自体見たことがなかったわ。

さて、と。…そういえばアリスとバートは自分の武器に名前はつけたのかしら。名前があるか無いかで強さに差も出るのだけど…また言っておきましょうか。

と…

「ギャー！」

「ッ！」

一匹、隠れていたらしい。あの三匹のうちのアサシンタイプが一匹、隠密に長けていたらしい。

「ふっ！」

なんとかナイフを躲す。…魔法使い系は距離を詰められると本当に何もできないのよね…！

「ギイッ！」

「っ！」

と、ナイフを振りかぶった所に隙ができた。そこを狙って蹴り飛ばす。



「グギ…！」

「もらった。水大気魔法、アクアブルーム。」

風の流れに沿った水が刃物のようにゴブリンの体に傷を付けていき、ゴブリンは消えた。

…こうやって魔法を組み合わせることができるのは私ぐらいのものだと自負しているけれど…それよりも多分遥かに難しい無宣告魔法、ね…

…まさかとは思うけれど…

いえ、それは今度ね。まずは目先の問題。

…最終、全力を出せばマードーなら倒せなくとも止めるぐらいはできる。その間にアリスに任せても余裕でしょうね。…本当に奥の手になるけれど。

…お願いだから、無理だけは…

《アリス視点》

「つくし、」

んー？なんだろう、どつかで噂でもしてるのかな？

「？おねーさん大丈夫？」

「あー、大丈夫。」

それより…エルちゃんの魔法の習得速度がすごい。最初は無機物操作もうまく使えてなかったのに今や既にランク4魔法まで到達してる。ちなみに、エルちゃんの優勢魔法は闇らしい。…義神がマードーだしね。

「…そう、それで…この感覚が掴めたら…そうそう、」

「こう…う…闇5魔法…ダークライト…！」

キイイーン…ズオアアツ！

エルちゃんが杖を振ると真つ黒な弾が飛んでいき、的が闇に飲み込まれた。

…こりやすーいや。

「わー…」

エルちゃんの杖はなんと言うか…木の持ち手の先に、青い水晶玉みたいなのが付いてて、その上に歯車の一部みたいなのが浮いてる感じのやつ。

エルちゃんいわく、二年ほど前にお兄さんにもらった杖だそう。そのお兄さんは世界中を旅してる冒険者で、年に数回帰ってくるんだとか。

「や、やった！見ててくれた？できたよおねーさん！」

「うん、見たよ。すごいね！ここまで上達が早いと私も抜かれちゃうかもなー。」

「それはないよ。おねーさんはもつと強いもん。」

いや…まあ、確かにまだボクの方が強いとは自負してるけど、まじで抜かれそう。

ものの数十分で無機物操作の段階からランク5の魔法まで行ってるからね…ヤバ。

「今は義神があんまり使えないからアレかもだけど、これ本当に魔力量だけで言ったら多分ランク7辺りあるからね…」

多分。

まーすごい事になってると思うよ。

何か…ボクの周りに高ランクの人がかなりいるみたい感じるけれど、ランク6だけでも一般人の中ではかなりレアだからね。7なんてそう出てこない。

…そう考えると母さん凄かったんだよね。ランク6だよ。

「これなら……できるかも…！」

「ん？なんか言った？」

「う、ううん！」

？なんか言ってた気がしたんだけど…気のせいかな。

「よし、じゃあ休憩しよっか。」

あんまり詰めてもだめだしね。

「じゃあおねーさんの魔法見せて！」

、まあ、ボクも訓練はするつもりだったし、良いかな。

「いいけど…ちよつと離れててね。」

何かの拍子に毒霧とか吸ったら危ないし。

「?分かった。」

「…スウ…」

今やろうとしてるのは、毒魔法の完全無宣告魔法。

前までも省略はやってたけど、それはあくまで属性とランクの省略のみ。

完全に無言で使えるぐらいにはなりたい。…まあ、準備運動的な?

「……ふっ、」

体の周りに6つの魔法陣を展開…魔力を通して光弾を散らせて、同時に毒霧を前方に制御しながら流すイメージで通す、で、的に当たった光弾は10に分裂させて回転させながら破裂させる。

………何とかいった。

「わあ…きれいだ…おねーさんすごいー!」

「、ありがと。」

はしやぎながら褒めてくれた。ありがと。

…でも、練習するべき魔法はこれじゃないんだよね…

本当にやらないといけないのは、これよりも大規模で消費魔力も馬鹿にならないレベルのやつ。…まあ、今はいいかな。ただ、ぶっつけ本番で使う気は全く無いから、小規模化させて練習はしとかないな。

「…つと、よし。…そうだ、エルちゃん、最初から使えてた一つの魔法って何なの?」

そういえば聞いてなかった。

「あ…えーと、秘密!あんまり、いっぱい使える魔法じゃなくて…。」

「…ん、そっか。またいつか教えてね。」

使う必要はないんだけど、エルちゃんはある見せたくないみたいだしね。むりやり聞き出すとするのは良くない。

「!うん!」

…さて…あと一週間。それで、終わらせなきゃ。

…自分でいうのもなんだけど、多分自分がキーになる、とは自負し

てる。…その分責任も持たなきや。  
密かに決心を固めた。

## 決戦前

あれから一週間たち、今夜は黒い満月の日。

この一週間の間に、例の魔法の練習も含めた修行をしていた。

そういえば、マリオネットさんから聞いたけど魔導書に名前をつけるだけでも使う魔法の質が上がるんだって。初耳。

それで、私の魔導書の名前は、「リデル」にした。何でって？なんででしょうか。れつつしんきんぐ。

まあ冗談はさておき。それも含めてこの一週間、今日で終わらせられるようにできる限りの事はしてきた。で、いま騎士団の皆さんと会議をしている。

「…それで、アリスちゃん、どうやってマörderを無力化させる気なんだ？」

「…最初の方で前衛で戦い、ある程度消耗させたところで今私が使え  
る魔法の中で最強の技を使います。仕組みとしては、マörderはエル  
ちゃんの体に乗っ取って現れるはずですので、まずマörderを疲労さ  
せて癒着を弱くした上で、彼女の中に結界を作り、その中にマörder  
を封じ込めます。ですが、封印結界ほど遮断するものではないので、  
いわゆる拘束するための鎖と言ったところでしょうか。それならエ  
ルちゃんの魔力を残しつつマörderを鎮圧できます。」

…なんとかこの一週間で6割ぐらいの威力なら影響なしに使える  
ようになってきた。これなら全力で使っても死にはしないはず。

「ですが、それをするにあたって一つ問題があります。式の構築がか  
なり複雑なため、その間ほとんど無防備になってしまいます。その  
上、ほぼ一回しか使えないため外すことも考えられます。ですから、  
少なくとも私が魔法を放つ前後1、20秒の間、マörderの動きを止  
める必要があります。」

「……それは問題ないわ…私が全力で相手をしておく。……ただ…  
ジャンヌが今いないからヒーラーがいない状況……できるだけ素早  
く終わらせてくれると助かるわ……」

そう、ジャンヌさんは、ギリギリ目は覚めているものの怪我の具合

がお世辞にもいいとは言えず…なんて所ではなくて、重症もいいところ、そのため現在強制療養中、今回の作戦には入っていない。

「そうだな…ルーズ、タンクとして、アリスちゃんの守護、頼めるか？」  
「勿論だ。元タンクだからな、腕は鈍ってない…と思う。」

「そういえばルーズさんって元々タンクなんだっけ。」

「バートちゃんはいつも通り後方から指示をお願い。どれ位被害を少なくできるかは君にもかかってる。…あんまりプレッシャーはかけたくないけど、」

「いえ、できる限りがんばります。」

バートもクロドさんが言い終わる前に返答した。

「他も…いつも通りかな。バレットも後方から援護射撃、アレグロはマードアの気を一部引いて戦ってくれ。接近戦ならこの中でアレグロが一番上手い。」

「分かった。…でも流石に一人ではきつそうだから副団長もよこしてくれとありがたいんだけど…」

「、そうだな。ヴァイス、大丈夫か？」

「問題ない。」

…どうやら全員問題ないみたい。さて…

「…だが、その魔法、アリスちゃん自身は大丈夫なのか？そんな高位魔法を使うものなら体が持たない可能性もあるぞ。」

つと、やっぱり聞かれるか…

「…詳しくは分かりません。少なくとも死ぬことはないですが…」

「死ぬことが前提みたいな話になってる事自体がおかしいんだけどな。怪我とか昏睡とかやめてくれよ？」

…どうだろ。でも最悪でも気絶くらいで済むはず。

「流石にそこまでは…予想外のことがあれば別ですが。」

「予想外？」

「はい。…一番大きなリスクとしては、マードアの邪気が現時点で想像できる以上に強化できる状況だった場合、エルちゃんとの癒着を弱くするのが困難になります。どれぐらいかにもよりますが…」

「まあ、あれなら余力を残していると考えるほうが妥当だろうな。多

く見積もっても5割…あれの2、3倍はあると考えたほうが良い。」  
「だよね…こつちで思った感じでも多分3、4割程度…」

「まともにやり合ったら勝ち目なんか無いけど…」

「……なら…その邪気も一緒に振り払ったらいいでしょ……？」  
「！」

と、マリオネットさんがとんでもないことを言い出した。

「いやいや…マリオネット、流石に無理があるぞ。」

「……いえ…出来るわ……。……久々に本気を出すわ。ここらへんで  
も使つてないと錆びつきそうだし……」

「つて、それって…」

バレットさんがなにかいいかけたけど、マリオネットさんはそれを  
遮って…

「…ま、ともかく……邪気の心配は無いわ…私があいつの動きを止め  
ると同時に攻撃を届きやすくしておくから……」

「そ、そうですか。…で、もう一つ、危惧するとすれば…マörderがエ  
ルちゃんを盾にしようとした場合でしょうか。」

「盾に？」

「はい。ああいう型の体の取り込みは、今回ならマörderがエルちゃ  
んの体、というよりは魂を乗っ取っているというのに近いです。です  
から、こちらが魔法を発動する前にその魂を盾にされてしまえば、魔  
法はマörderではなくエルちゃんに当たります。」

「……え、それすごい面倒なんじゃ…」

とバートが言うけど、実際は多分こうはならない。

「まあでも、それを使われる可能性は低いだろうな。」

「そうですね。」

クロドさんも分かってたみたい。ヴァイスさんも頷いてる。

「なんで？敵からすれば人質が取れたようなものでしょ？」

アレグロさんは分かってないみたい。

「盾として他人の魂、しかも子供のまだ小さい魂を使ったところで、こ  
ういう多対一の状況でどれぐらい効力を発揮できたものか、つてここ  
ろだな。1、2方向からの攻撃を防ぐだけのバリアをわざわざ体を維

持するための器を体外に出して自らを弱体化させてまで使うメリツトが無い。」

「！なるほどー！」

でも…

「ですが、今回は訳が違います。私の魔法に気づかれてしまえばそれで防がれてしまう可能性があるんです。…そのために、私が魔法式を組み立てる間、気を散らせてほしいんです。」

「なるほどな。相手からすれば自分を倒しうる攻撃のみを防げばいいわけだしな。」

「そういう事です。」

…つまりは。

自分はこの魔法式の構築中、ほとんど動けない。それによって、慣れてない魔法で急に相手の狙う位置を反転させたりなんて器用なことは流石に出来ない。

つまり、マードーにこいつが自分を倒しうる攻撃をしてくる、と認識されてしまえば防がれる可能性だつてある。

「そういえば…その彼女は今どこに？」

「必死に魔法の練習をしてたよ。…あ、そうだ。アリスちゃん、エルちゃんがこれを渡してほしい、つてさ。」

と、ヴァイスさんが取り出したのは…あの、エルちゃんが使っていた杖。

「なんか直接渡すのが恥ずかしかったんだと。で、それも使ってほしい、だそうだ。」

「……………分かりました。後でお礼を言っておかないとですね。」

…大切なものだろうに。

それだけ信頼されてるのか、他に何かあるのか。

ともあれ、失敗は許されない。絶対に成功させてみせる。



「…1時52分、そろそろだな。多分2時以降に変化するつつたか。」

「そうですね。…そろそろ身構えておいた方がいいでしょう。」

魔導書：リデルを取り出して集中する。

最初は接近戦に持ち込むから魔導書だけだけど、途中からエルちゃんの杖も使わせてもらう。

『アリス、我も少し相手をする。前からあやつの性根は叩き直さねばと思っていたからな。』

「うん、ありがと。」

メアもポケットから出て大きさを人と同じぐらいの大きさにする。

「……………そうだアリスちゃん、その魔法の詠唱ってどれぐらいかかるんだ？」

「…分かりませんね…。ですが、普通の魔法とは詠唱の量は桁違いです。そのため、タメが長すぎるのがネックですね…」

そんな話をしていると…

「！来るぞー！」

クロドさんの声が聞こえた。そして…

バキバキバキ…：ミシ…：ズウン……………

ドゴオオオン！

「来たー！」

森からマードーが姿を現した。…こころなしか前より強いような気がする。そういえば黒い月は魔物の凶暴さが増すとかなんとか聞いたことがあった気がする。…いや、そこは今どうでもいい。

「最初は私も前線に立ちます！私もいる、と相手に認識させないと面倒なので！」

「わかったー！」

マードーは記憶等も一部エルちゃんのを奪っているらしい。私の存在がいないと怪しむだろう。…でも、これであいつの行動も最後。これ以上、好きにさせるわけにはいかない。

……………さあ、

L  
e  
t,  
s  
s  
t  
a  
r  
t  
t  
o  
a  
c  
t  
i  
o  
n.

戦

闘

開

始

だ

## 限界魔法

「グルオオオオ!!」

「っ!」

…やっぱり気のせいじゃない、明らかに前のとレベルが違う…でも、

「っ!毒7短剣技、ポイズンエッジ!」

リデルから百を下らない量のナイフを出現させて飛ばす。当然、マードーは回避行動を取るが、

「おっと、簡単に避けれると思うなよ?氷6魔法、ホワイトアウト!」

ヴァイスさんの魔法で視界が白一色で染められる。更に…

「そこっ!火6剣技、フレイムスラッシュ!」

炎の斬撃が弾けるように大量に飛び出てくる。

連携がすごい。

と、

ヒュヒュヒュンツ!

「グルオツ!」

何本もの火の矢がマードーの足に突き刺さった。

その時、

「ガアアア!!」

「っ!少し下がって視界を広げてください!前から斬撃が飛んできます!」

バートの声。見るとマードーの振りかぶっている腕の先に黒光りする鋭い爪が。しかし、

「ふん!」

バギン!

ルーズさんの大剣に当たり、簡単に砕かれた。そして、その後ろから、

「火光6魔法、インフェルノライト!」

「光7魔法、ライトニングブレイク!」

赤と黄に光る炎の渦と、超スピードで飛ぶ雷が貫いた。

ドドオオンツ！バリバリバリッ！

「ゴウアアツ！」

見事、炎と雷は命中し、一瞬、マードアの体制が崩れた。が、すぐに戻り、体を丸めた。そして次の瞬間、

「！大量に攻撃がばら撒かれます！とりあえず避けることに専念して離れてください！」

「ガアアアアアアツ！」

紫と黒の小さなエネルギー弾が大量にばらまかれた。

つそ…ただでさえ夜で暗いのに相手の弾が見えづらい…！

「っ、錯乱への誘い…！」

光弾で相殺しつつ反撃を試みるけど…うまくはいかない。あまりにエネルギー弾の量が多すぎる…

「…！躲せるなら…躲してみろ！火6魔法、ディアザボルグ！」

隙間を縫ったアレグロさんの剣が炎を吹いて、一直線にマードアを貫いた。ように見えたが…

「っ嘘?！」

その剣をマードアは手で掴んで、軌道を反らせていた。

「ガオオアアアアアアア！」

「隙ありィ！」

そして、そのまま剣ごとアレグロさんを投げ飛ばす…直前に、ルーズさんが後ろからマードアの首を蹴り飛ばした。

それに一瞬怯んだのかマードアは剣から手を離れた。

「っ…硬すぎんだろ…結構まじで蹴ったんだぞ。」

しかし、マードアは全く痛がる様子も見せてない。…これは…予想以上にやばいかも。

「土5魔法、サンドファイールド！」

「氷6魔法、ヒートロスト！」

「光8魔法、サテライトレイン！」

ルーズさん、ヴァイスさん、クロドさんの三人が魔法を撃った。けど、ほとんど躲される。

「っ…！アリスちゃん！そろそろ魔法式の構築を頼む！これは想像以

上にやばい！」

…同感。本音を言えばもう少し削っておきたかったけど、これ以上引き伸ばせば疲労が上回る。

「分かりました！…メア、私の埋め合わせ、お願い。」

『ああ、任せろ。』

それだけ言つてメアは飛んでいった。…よし、

「ルーズさん、よろしくお願いします。」

「了解、任せとけっ！」

と、ルーズさんが大剣を地面に突き刺し、バリアを貼ったところでエルちゃんの杖とリデルを構え、目を閉じる。体の中を流れる魔力を感じ取る。……さあ、詠唱だ。

「みたまのみことわがぎしんのちからいまこのまりよくにかえんたとえてんがはぜようとちがほろぼうとけしてうせることのなきひかりのしんじゆ……」

人には聞き取ることのできない詠唱、人外の魔術。

…ぶつちやけできるとは思つてなかつたけど……できるならやるしかないからね…！」

《クロドside》

アリスちゃんが詠唱を始めた。さて、ここからだ…！」

…と意気込んでも、俺の役目はスキを見つけて攻撃し、ほんの少しでもあいつの体力を減らしながら、アリスちゃんに気付かせないこと。

「ふっ…！」

光をまとつて跳躍、できるだけこつちに視線を集める。

「光7魔法、ライジングストライク！」

雷をまとつた光がマーダーに向かって5本、一直線に飛んでいく。

が、当然のように避けられる。…まあ、これはダメーだが…

「火5魔法、バーニングスネイクラッシュ！」

「氷6魔法、アイシクルキングダム！」

と、マーダーに向かって火の雨が降り、氷の宮殿のような檻に閉じ込められる。

よし、バレットとヴァイスのおかげでマードアの行動範囲を狭められた。

「光6魔法、サンライトネス！」

で、光球を大量に、四方八方からマードアに向けて乱射する。と、

「……………团长……………そろそろ……………こつちも準備するわ……………」

「、そうか、分かった。…気をつけろよ？」

「……………どこかの誰かみたいに……………乱発して死にかけるなんてことは無いわ……………」

「ぐ……………」

俺なんだよなー、これ。マジで掘り返さないでほしい。

「……………ふうっ、」

まあ、こんな所でうだうだやってるわけにもいかず。……………どれぐら  
いあの檻持つだろうか。と…

「ゴアアアアアア！」

「！」

マードアが咆哮した。同時に、魔法の檻にひびが入る。

「！まずい！」

「離れてくださいー！」

バートちゃんの声。逃げろ、と本能も叫んでいる。

「っ！」

バガキイイイン！

「まずっ……………」

あれで2分は持つと思っただがな…！

マードアは跳躍してこつちに飛んでくる。と、

『ふんー！』

バガアツ！

マードアが横薙ぎにぶつ飛んだ。メアだ。

『ようマードアよ、久々に対峙するが……………やはり頭は弱いようだな。我が主の脅威にもならぬ。さあ、我も少しばかり遊んでやろう。』

「グオアアアオオオオ！」

ドンー！

ヒュウツ!

マードーがメアに突撃するが、メアは軽く尻尾でいなして逆に打ち上げた。そして…

『ハアツ!』

黒い炎を大量に吐き出した。うっわ熱がここまで来てる…

少しメアに任せて一瞬、アリスちゃんを見た。と…

「っ!」

体の周り中に、数十にもなる金色の魔法式が同時展開されて体に吸い込まれ、あの杖と本に魔力が行き渡っている様子が見えた。

なんだあれ…あんな魔法見たこともない…

…まあともあれ、アリスちゃんの言うとおりになら、残り数分、それでこの戦いの決着がつく。

…頑張れ…!

《マリオネットside》

…かれこれ前線を離脱して20分経ったかしら。

…よし、そろそろ使えるわね。

アリスの言ったことが本当ならそろそろ私があれを使つてマードーを行動できなくするのに丁度だわ。

「…義神…解放…!」

義神解放。

自分の義神と、姿以外をほとんど同化させる魔法のこと。体にそれ相応の負担はかかるけど、その分強化される。

私の義神は少し特殊で、7属性が使えるようになってる。そんな私の義神は…

「…目覚めよ、禁龍、アトリビュートドラゴン…!」

体中から魔力が吹き出すのが感覚でわかる。

アトリビュートドラゴンは、昔、当時最大勢力と言われていた大陸の一つをたった一夜で壊滅させた歴史上最悪の魔竜の一つ。

私が義神開放を使えば、ランクは一時的に6から9相当に跳ね上がる。

「さあ…行くわよ…!」

今にも暴れだしそうな全身の魔力を押さえつけながら飛ぶ。多分  
：使えるのは二回のみ…しかも、一発は念の為に後に残しといた方がい  
いと思う。でも、私のレベルじゃそれでも倒せないでしょうね。

そもそも四天王幹部は第一でさえ10人いて平均レベルが40は  
いる、なんて言われてるのにこうなったんだか…でも、行動不能ぐら  
いにはできるはず。

「ゴウアアオー！」

…やっぱり抵抗するわよね…！でも、

『余所見をしている場合か?!』

ズガアアン！

戦ってるのは…私一人じゃない。

ゆつくりと押さえつけていた魔力を解放する。が、

「っ!？」

予想以上の体の痛みに止める。…いえ、落ち着いて、マリオネット

・レオンブル・シノワーズ。これぐらいは想定範囲内ですよ…つ

！

「は…っ…!？」

もう一回、解放し始める。…痛い…けど…大丈夫…!

「グアアアアアアアア！」

と、マードラーが咆哮し、こつちに大量の攻撃を散らばらせる。けど

…

「防御9魔法、アンチエインシールド。」

この程度、防げない今の私じゃない。さあ…!

「遊んでる時間はないのよ。…さっさと失せてもらう。世界を構成す  
る7属の魔力…それを操る古魔龍の力、とくと味わうがいいわ…!」

体中の魔力を一つにまとめ上げて放つ、最も単純で、最も強力な龍  
の技…!

「義神術式、オールクリエイションブラスト!」

火、水、大気、土、草、そして光と闇。

7つの魔力が一本の強大な光線となってマードラーに向かって飛ん  
でいった。そして…



ドガゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

「っ！」

我ながらだけど…威力えげつないわね。体の軽い私なら吹き飛ばされそうね…

ただ、直撃はさせてない。体の真横に着弾させた。

と、

「！」

よし、少なくとも気絶まで持つてはいけてる！アリスの方は…つて、何あの魔法式の量。つて、あの魔法式つて…

…はあ…もう……なるほどね。

でも、もう終わるみたいね…アリス、決めてしまいなさい。

そう思った瞬間、光が弾けた。

《アリス side》

「…ルーズさん…っ、ありがとうございます…。」

「、終わったのか？」

「…はい…っ。」

やばい…体中が痛い…！…いや…こんなの…エルちゃんの耐えてきた痛みからしたらかすり傷にもならないはず…！

「バリアを解くぞ。いいな！」

「っ…はい！」

と、ルーズさんが勢いよく大剣を抜いた。同時に周りの空気の間も変わる。荒々しいまでの魔力が手にとるように感じ取れる。でも、こっちだつて負けてない。

「ふっ…！」

エルちゃんの杖とリデルに魔法式を完全に組み込む。

そして…

「…かのせんせきにおきてかりしちからわれすくうべきものにつかひたり…」

もう少し、

「わがなのもとにすくひたまへ…」

もう少し…

「はらいたまへ…」

さあ…

「たけたまへ…!」

喰らえ…!

「かみによりまもりたまへ!」

キイイイイイイイイイイン!

杖、リデル、が光り、目の前にとんでもない量の魔法陣が木のよう  
に、また機械仕掛けの塔のように生み出される。

そして…

「げんかいまほうこうご限界魔法神籠…! しんじゅやどりぎ神樹宿木…つ!」

杖から気絶していると思われるマードアの足元に光の塊が移動し、  
リデルから何本もの金色の線が生まれて、吸い込まれるようにその光  
の塊に近づいていく。そして…

「はああっ!」

半透明の金に光る樹がマードアの身体を包み込むように貫いた。

が、

「ガ…グ…:オオオオオオオオ…!」

「っ…:嘘っ…!?!」

マードアが目を覚ましたらしく、宿木の中で逃れようと足掻く様子  
が見えた。金の魔力の壁の中で、黒い魔力が蠢き始める。

…どうしよう…!まさか…ここまで抵抗力が強いなんて…!

「ぐ…ぐぐ…:…!」

ヤバい、ヤバいヤバいヤバい…全力で押さえつけても…このまま  
じゃ…っ、押し負ける…!

「うっ…:ぐ…:が…:あああ…:…!」

「グオオ…:ガアアアア…:…!」

っ…:…! 駄目…:…! まずい…:…!

まさか…全力で発動するだけでここまで力を消耗させられるとは  
…思ってたなかったから…全力と言えるには程遠いつてもあるけど  
…!これは本当に…っ…:ああ…:クソ…:…!

術式はエルちゃんの手とリデルに組み込んでから、最終、式が

残ってれば魔力を吹き込めばまた使えるけど…そんなの、もう不可能に近い…これで決めなきやいけないのに…!

目の前では、黒と金が内側と外側でせめぎ合っている。

が、じわじわと黒が金の中を侵食していき…

「ガアアアアアアア！」

黒の咆哮が成された、その瞬間――

ピシツ…パリイイインツ!!

――金の壁の一部が、弾けた。

## マードラー戦、終戦

「まだ…です…っ！」

「えっ…？」

と、宿木がマードラーに破られた瞬間、ほぼ尽きたはずの魔力が伝い、その破られたところが塞がってマードラーは再び閉じ込められた。

「アリスさん…！手伝い、ます…！」

ふと声がして横を見ると、強制療養中のはずのジャンヌさんがいた。

「ジャンヌさん!?なんでここに…!？」

「皆さんが…ここまで頑張ってるのに…私だけ戦わないなんていうことは…しません…！なんとか動けるので、今は…彼女を…！」

そう言つて、ジャンヌさんは両手をこっちに向けて魔力を分けてくれた。…少し回復した。

「…そうだな。ほい、俺のも持ってけ。今あいつを倒せるのは、アリスちゃんしかいない。」

ルーズさんもこっちに来て手を前に出した。…また。

「そうだ。頼むぞ…一度、全部賭けてみようか。」

「私達より頼りになるのに間違いは無いしね。」

「その通り。それ、存分に使ってくれ。」

「だから、絶対負けるなよ？」

「…私のも…持って行っていいわ…！」

「！皆…さん…！」

『さあ、主なら負けるわけがあるまい!』

「アリス…！アリスなら絶対に勝てる！頑張つて！」

「……！」

…そうだ、今は、一人で戦ってるんじゃない。いつだってそうだ。仲間が、親友が、みんながいる。…こんなところで…終われるか…！

「…喝…！」

一度自分の頬を叩いて気合を入れる。もう一度構えて…！

「ふう…まだ…終わってない…！」

皆からもらった魔力を体中に通し、宿木により一層強く、また、全てを掛ける。

…どうか――

「…マードー…あなたに罪はないかもしれませんが…今、ここに封印させてもらいます…！宿木術式最終効魔法…！聖樹…」

ユグドラシル!!  
ユグドラシル!!

「ガアアアアアアアアア!?!」

と、金色の樹に少し緑も混じり、更に枝を伸ばして自らを包みこむような形になった。

そして、一層強く光り輝いて、そのまま金色の粉のように散った。そこから、一人の女の子が上に打ち上げられたのが見えた。

「エルちゃん!」

ダッ!

多分あの軌道なら…ここ!

「よっ、と。」

ポス

あ、軽い。すごい軽い。ちゃんと食べてたんだろうか。

そんなことを考えていると、

「おねー…さん…?」

エルちゃんが目を開けた。

「うん。大丈夫?」

「ん…なんか…目の前がちよつとはつきりする…?…おねーさんは…」

大丈夫、だった…?」

「うん、ちよつと危なかつたけどね…みんなが助けてくれたから。」

と、

「アリスー!」

バートだ。…というか全員来てくれたみたい。

「…つと、エルちゃん、みんなにもお礼は言つとかないといけないからね?」

「うん…!」

「大丈夫だったか?」

色々、とクロドさんは付け足して聞いてきた。

「はい、ちゃんと成功です。…皆さん、ありがとうございます。」

「ありがとうございます…ございました…!」

横で一緒にエルちゃんもお辞儀をした。

「なーに言ってるんだか。この戦いで一番頑張ってたのはそれこそアリスちゃんとエルちゃんだろうに。煽り? ん?」

「おいこらアレグロ。今は注意できるほど元気がないんだからはしゃぐな。」

「…まあでも…無事で…何より…ね。」

「本当だよ。ぐ…ちよつと不眠はこの年でもきついなあ…」

「バレット、言ってもお前まだそんな年じゃないだろ。」

「あはは…いつも通りに戻ってら…」

「でも、だからこそいいんじゃないんですか?」

「アレグロさんは…寝てなくてテンションがおかしくなってるだけの可能性もありますけどね。」

『まったく…ぬ、日が昇ってきたな。』

「うえ、もうそんな時間なの!?!」

「……………気付かなかったけれど…もう早朝5時ぐらいよ……………」

「い、いつの間にそんな時間が…」

「わわわっ! まさか今日睡眠時間なし!?!」

「…そうっばいね。まあでも、流石に今日、明日、明後日位はブランク開けるから少し仮眠を取るぐらい、良いんじゃないか?」

「あ、あの……………」

思い思いに話をしていると、ふとエルちゃんが口を開けた。

「少し…こつちに来てくれますか…?」

「? どうしたの?」

「皆さん…私のために色々してくれたので…ちよつと、お礼というか……………したくて……………」

「んー? 別にいいよ? そんな気を使わなくても。」

「いえ…その、いづれ見せることにはなるので…あ、おねーさん、杖…」

「あ、うん、はいこれ。」

少し意味は分かりかねたけど、指示通りエルちゃんの方に少し寄って杖を返す。で、全員がある程度近づいたところで…

「…ふっ…」

エルちゃんが地面に杖を突き刺した。すると、ボク達がいる所の地面に全員がすっぽり入るぐらいの大きな魔法陣が現れた。

で、エルちゃんは何かボソボソと呟いて…

「固有7魔法…アドヴァンスドヒール。」

と、その瞬間、

「っ!？」

「嘘!？」

「…こりやすごい。」

体中の疲れ、痛み、眠気が一瞬で吹き飛んだ。

これは…普通のヒールじゃないね。普通のヒールは、少量回復するのを連続してかけて回復量を大きくする魔法だけど、これは…一回の回復で全快する感じ…かな？

「おねーさん、」

「ん？」

「前に…いっただけ使える魔法があった、って言ったよね？」

「あ、もしかして…」

「うん、これの事。…ちよつと驚かせたくて秘密にしちゃってた。」

「ふふっ、…やっぱり、エルちゃんはすごいね。」

普通にすごい。というか、宣告で7魔法、って言ってたってことは、ランクは7以上…おおう…

「っていうか、固有魔法がその年で発現してるんだね。珍しくない？」

ん？固有魔法っていうと…たしか、一人につき一つしか発現せず、被ることのない魔法だったよね？そういうえば宣告が固有7魔法、だったね。確かに、ボクも発現してないね。

「いや、発現するタイミングは人それぞれだからな。年で変わるものじゃないし、人によっては生まれた瞬間から発現してるパッシブ的な人もいるからな。そこまで珍しくはないだろう。…まあ、少ないのは少ないだろうが。」

とバレットさんが言ったところで、クロドさんがパンパン、と手を叩いた。

「……さて！とりあえず、魔王軍四天王幹部第二を撃破したんだけど……ちよつとここでもやるのが複数残るから、各自ひとまず自由時間、つて事で。……あ、エルちゃんはちよつとこの後来てくれ。」

「はい！」

ん？何かあるのかな……？クロドさんとエルちゃんの声のトーン的に二人ともなんか知ってそうだけど……というか、周りの全員が何か知ってそうんだけど……気のせい？気のせい……かな？

まあ、考えても答えは出てきそうになかったのだ。

ひとまず部屋に戻って何をしようか、と考えていたときだ。

ピコン！

「ん？」

開いてもないのにステータス画面が現れた。同時に、いくつもの画面が出てくる。

《おめでとうございます！あなたは偉大なる功績を残しました！称号が与えられます！》

《新しいスキルが手に入りました！》

《新しいスキルが手に入りました！》

《職業が真職業に変化します！》

「え？待つて待つて待つて。」

え、何これ。待つて色々待つて。

……ひとまず整理しよう。まずこの何かクラスアップした職業つてやつ。

ピン！

職業（暗殺者） ↓ 奇術師

職業スキル

気配隠蔽 Lv5（気配察知 Lv2） ↓ 気配感知 Lv2（演

算 Lv3） ↓ 高速演算 Lv3（暗視 Lv3） ↓ 完視 Lv3

エスケープ Lv1 詐称 Lv1



し、職業と一部を除いた職業スキルからかつこが外れてなんか強そうになつてる…そして新しいスキルが2つ増えてる…どうしてこうなった。

ま、まあ、次に称号。

ピン！

《限界魔法の使い手》

人智を超えた魔法を使用し、神の領域に足を踏み入れました。天使が驚き、祝福しています。

INT+100、魔力回復速度が2倍になります。

…ナニコレ？

ん？どういう事？称号って効果もつくの？…つか壊れてない？これ。

…と、とりあえず最後、固有じゃなくて普通のスキル。これ何だろ

…？

ピン！

世界眼 Lv1

ありとあらゆる情報から、好きな情報があなたに与えられます。ただし、使いこなすのは至難の業です。

不屈 Lv1

パッシブスキル。

自分へのダメージ、デバフを一部カットします。また、一定確率で致死ダメージを回避します。

現在カット率：ダメージカット1% デバフカット1% 致死ダ

メージ回避1%

…：…：…あー…もう…どうするよこれ。

「なんでこうなったー…」

ちよつと疲れた頭で全部考えるのは無理がある。その上、情報量が多い。

一旦整理すると…

職業が暗殺者から奇術師っていうのに変化、同時に職業スキルも変化。



「…ともかく…これは一旦保留だね…」

これはヤバい。とりあえずヤバい。なんの気無しに使ったら最後、めっちゃめっちゃ苦しむ羽目になる。

「はあ………」

まあ、ひとまずそこはさておき……することがないんだよね…。メアも何かちよつと用事があるみたいでないし。

……そうだ、お姉ちゃんに手紙でも出そうかな。近況報告的なやつ。

……そうだ。それと、前から思ってたけど、お姉ちゃんからもらったリボン、ちよつとカチューシャ型にしよう。普通のリボンだと戦闘時に運悪く切れたりするんだよね……頭の上ならある程度警戒できるし。

## 10人目

「……で、これは……」  
なにこれ。

一つの部屋に集まって料理やらなんやらが大量に置かれていた。いや、何をしているのかはわかるんだけど……

「パーティーだよ。クロドが言ってた。……まあ、言い出したのはこの村の人達みただけだな。」

ルーズさんがやれやれ、といった感じで頭を振る。

……なるほどね。魔獣討伐の、ってやつか。

んー……でもなんか、ちよつと複雑な感じはするなあ……正直、ここの人たちってエルちゃんを不当に……簡単に言えばいじめてたわけだし、その人達が色々言っても……って感じなんだよね。

だって、言ってしまうえばマードアの邪気があそこまで増大したのってこの村の人達のせいみたいなどころあるからね。

確か、危害を加えられて……まあ、いじめられたことで負の感情が増えて、そのせいで被害がひどくなって、って事だったから。

うーん……

「！おねーさん！」

「あ、エルちゃん。」

と、向こうの方からエルちゃんが走って来た。なんか、表情が明るい。

「村のみんなとなか直りできたよ！」

「……うん、そっか。よかったね。」

「うん！」

……これで良かったんだろうか。何か……モヤモヤするなあ……

「さて！魔法騎士団の皆様、この度は、この村とエルを助けてくださり、ありがとうございます！楽しんでいってください！」

……

「？アリス、どうしたの？」

「、バート。」

少し経って、バートが来た。

「…なんか…困ってるのか…悲しんでるのか…みたいな感じだけど…」

ああ、感情が読めるんだもんね。バレるか。

「実は…ね、ちよつと思ってることがあって。」

で、バートに今思ってることを言ってみた。すると、

「んー…私にはさ、そんなに難しいことは分かんないけど、アリスはちよつと深く考えすぎなんじゃない？」

「え？」

「それを聞いて私が思ったのはね、多分話ができなかったんだなあ、って思ったんだ。」

「どういうこと？」

「エルちゃんも村の人も、お互いのことを知れなかったんだよ。お互いがお互いをどんなふうに感じているのか、ね。村の人で言ったら、エルちゃんが自分の意志でやってる訳じゃないことを理解できずに、その苦しみを分かってあげられなかった。エルちゃんと言ったら、村の人達が本当はエルちゃんの事を心配していることに気付けなかった。…結局は、会話が出来なかったからじゃないかなあって思うんだ。」

…会話。

確かに、村の人達は安堵していた。それは何も村が助かったから、だけじゃなかった。そんな程度のものじゃない。

本当は、胸の奥でエルちゃんの事を心配していた。本当に、誰よりも。

エルちゃんも、村の人達が本当は思っているより深刻に悩んで、苦しんでいた。ボク達が思ってたよりも、ずっと。

…そうか。

「…自分もまだまだ、か…」

「ん？」

「いや、やっぱりバートはすごいなあ、って。そんなこと、考え付かなかった。」

と、バートは、あははっ、と少し笑って、

「たまたまだよ。私がたまたま感情が読める体質で、そこからふと思っただけ。アリスは深く考え過ぎるところがあるんだよ。物事、そんなに深い意味があることばかりじゃないよ?」  
「確かに。」

自分は考えすぎるのが悪い癖、それは前の世界でもそうだった。考え始めると周りが見えなくなる。

これは…もうそういう物だね。気をつけよう。

「あ、いたいた、アリスちゃん!」

「、はい。」

と、アレグロさんがこっちに來た。何だろ?

「はい、伝達がありまーす!」

と、意気揚々と…いやちよつと違うか。なんか企んでそうな顔をして、胸を張った。…というか既にちよつと酔ってるね。

「つと、その前に…団長!?!こっち!?!」

「あーい!」

と、人混みの中からクロドさんも出てきた。

「何ですか? 伝達って…」

「そうだね…いきなりだけど、一つ質問するよ? うちの団は今何人いると思う?」

今の団員数?

えーと、クロドさん、ヴァイスさん、ルーズさん、アレグロさん、バレットさん、ジャンヌさん、マリオネットさん、あとバートと自分の…

「9人ですね。」

「そう。で、一つの団につき、最大何人まで入れたっけ?」

「10人ですね。」

それがどうしたんだろ?

「えーと、つまり空いてる分の残り1人、うちの団に入ることになりました!」

…ん?…ん?…ん?

まさか…

「おーい、こつちー!」

で、クロドさんが向いたほうの人混みから出てきたのは、黒い髪に黒い目、見覚えのある杖を抱えた少女。

「つて事で、エルちゃんが10人目のメンバーになりましたー!」

「…?!?!え、ちょよ、ま、待って、待ってください!?!」

いやある程度想像はできてたけど!?

な、何で!?

「なんで、つて顔してるね。」

「わ、アリスがすごい混乱してる…」

ちょよ、待ってバートもそつち側!?

「いや…ね、ちょつと前から本人に頼まれててね。だいたい…1週間前ぐらい?」

来て2日。…マジですか。

「で、最初はそりゃ断ったんだよ。でもね…めきめきと魔法が上達するし、固有魔法も出現してる、それも回復系、更に本人の意志も上々。…正直、年齢以外の断る理由がなくなつてね…」

…まさかとは思うけど…その年齢の断る理由が通つたのつて…

「で、その年齢の問題も…アリスちゃんもバートちゃんもまだ10歳じゃん?エルちゃん、今8歳みたいなんだけど、正直そんなに変わらないんだよね…」

はい、自分たちでした。自分で自分の首絞めた…

いや、加わつてくれる分にはなんの反論もないし、むしろ嬉しいっちゃ嬉しいんだけど本当にそれでいいのかつて所が…ね。

いや、それより…

「というか、なんで私には伝達が行ってなかったんですか?」

これである。

バートまで伝達が行ってたらこつちにも来ててもおかしくないと思っただけ…

「エルちゃんがサプライズにしたかったんだつてさ。…あと、最初にアリスちゃんに言ったらとりあえず反論されそう、つてバレットが。…うん、サプライズ精神はいいんだけど、バレットさん、それどう

という意味ですか。

「あー、まあ…私としては言うことは無いんですが…エルちゃんは本当に良いの?」

「うんっ!おねーさんと一緒の方が楽しいし、そのために魔法も教えてもらったんだし!」

…あー、あれこの為のやつだったのね。

それで魔法を教えてほしい、っていうのの理由が話せなかったわけか。

「…まあ、それなら私から言うことは無いです。」

10人目。途中で仲間が増えることはあれど、まさかこんな…ね。想像もしてなかったよ。

まあでも、また賑やかになりそうな…

あ、そうだ。

「それよりエルちゃん、今の所、何か気持ちが悪かったり、体がむずむずしたりとかはない?」

「?無いよ?」

エルちゃんが首をこてん、と傾けて返事をした。

まあ、それなら…

「なら良かった。何かあったら言ってね。」

「どういう事だ?」

ふとクロドさんが聞く。

「ちやんと封印できてるかの確認です。術式にヒビがあったり、欠陥があったりするとそこからまた暴走するかもしれないので…ああ、言っても、すぐに見つけければ、その術式だけ書き換えれば問題ないですよ。」

むしろまずいのは、綻びが長期的に隠されて、そのまま広がっていった場合だ。そうなるともう修復どころの話じゃなくなるから、もう一回宿木をかける必要が出てくる。

…流石にきつい。

「なるほどな。…さて、事前に連絡したとおり、明後日あたりでここを出る。正直想定してたペースよりかなり遅れてるからね。…まあ、こ



んなところで四天王幹部第二と対峙してたんだから、ある意味しょうがないところはあるけどね…」

まあ…ね。

「そーいや、今回の戦いでレベルがなんか21になってた。すごい急上昇…元々10だったんだよ？」

「…で、エルちゃんはまた村の人達に挨拶しておくように。」

「はいー！」

「よーし、じゃあとりあえず四天王幹部討伐祝いに、そしてエルちゃんとアリスちゃんに乾杯っ！」

と、横から途中からどこかに行っていたアレグロさんが入ってきた。…というかもう既に乾杯してますよね…顔がちよつと赤い。

「お、おう、乾杯。…というかアレグロ、それ何杯目だ。」

「樽2つ目。」

!?

「…まあ、酒豪のお前ならそうもなるか…救いなのはここが有名なお酒の産地な事だな。」

「この人と飲み比べしてたんだけど行く人でも樽1つで限界だったんだよねー。」

いやその人もかなりすごいですけど。いや…ええ…？

だって、この樽のサイズってだいたい高さが1メートル、底は…まあ普通サイズぐらい？だよ!?アレグロさん…自分の体の体積より多い量のお酒飲んでる…

「すげ…ここまで飲む人はちよつと始めてみたかも…」

エルちゃんも若干引いてるよ。…まあ…あのアレグロさんだしね

…

と、

「「おおおおおっ!!」」

「ん?」

何か歓声が上がってる。

「あー、向こうでルーズが腕相撲大会やってるよ。さつきちらつと見てきたけど、いい勝負してたよ。見てきたら?」

なるほど…え、ルーズさんってめっちゃ力強いよ？対抗できる人いるんだ…

ちよつと見て来よっかな。

「…わお。」

「ぬっ…！」

「ぐおお…ッ！」

「うおおお！やれー！」

「おらシャン！頑張れ！」

「負けるなよルーズ！」

「「おおおおおお！」」

スタート位置から拮抗してる…というか今バレットさんいた…と、

「ツラア！」

ダンッ！

「「おおおお！」」

ルーズさんが勝った。いやまあ…そりやそうだよね。

「なかなか強いな。だが負ける気はないぞ。」

「ははっ、いやー、結構自信あったんすけどねー。」

いやまあ…腕相撲でルーズさんと互角に勝負できるのは誇つていいと思う。

と、

「お、アリスちゃん、やるか？」

はい？

「つとおいルーズ、いくら何でも…と言いたいところだが、やってみるか？」

つてバレットさんまで!?

さつきから思ってるけど、バレットさんってしっかりしてるイメージあるけど結構面白い方に付く人だよね。

「おお！あの子がああ魔獣をフルボッコにしたっつー子か！」

「あの子がか!?!まじかよ！」

「ああ！なんかバカでかい規模の魔法で魔獣を封印したらしい！」

なんでこんなに広まってるんですかね？

ふっ、とバレットさんの方を見ると目を逸らされた。…バレットさんエ…

「まあ…良いですけど…」

まあ、断るほどのことでもないかな。みんな盛り上がりつつあるみたいだし、むしろ断る方が野暮かな。

「よーし、手加減はどうする？」

「…なしでお願いします。」

今の自分の力を見る良い機会だしね。

「良いのか？…分かった。…あ、言っとくが魔法の使用はダメだからな？」

「分かっていますよ。」

「よーい…始め！」

「っ！」

「ぬぁッ…!？」

「おおお!? ルーズさんが若干押されてるぞ!？」

「なっ!? すげえ…! すげえぞ! 手加減してないのか!？」

「やべえぞあの子!」

「うおおおお! やれ! もっと力入れろ!」

「そのまま押し切れえー!」

「っ…セッ!」

ダンッ

「…わあああああ!」

「あの子! ルーズさんに勝ちやがったぞ!」

「すごいぞ!? 何者だ!？」

あはは…

「やるな、アリスちゃん。まさか負けるとは想定してなかったぞ。」

「ルーズさんも強かったです。ありがとうございました。」

まあ、こんな感じで時間も過ぎていった。

## 出発、2つの再会

《魔王軍、魔王side》

「…なるほど、マードーがやられたか。…流石に予想外だな…」

試しにあの小さな村を内分させてやろうと思っていたが…まさか倒されるとは…その上、アポストルにした村長もあえなく鎮圧。

「はい。その上、両者とも封印措置を取られたようです。」

「…封印措置…。」

…全く、舐めているのか。旅を始めたときからわざわざ誰も殺さずに全ての魔物に対して封印措置など…

「分かった。下がって良い。」

「…魔王様、やはり戦いに慣れていないものを前線に送るのは…」

ヒュッ！

「下がれと言った。」

ゴチャゴチャと煩いやつの首元に魔素で創った黒い槍を突きつける。

「は…い…。」

と、そいつはそそくさと部屋から出ていった。

……にしても…まさかあいつが…か…

まあ、流石にこんなところで諦める気は毛頭ない。こちらとしては、あいつらがここに来てくれれば勝ちが確定するだけなのだ。それまであいつに力を蓄えてもらわねば。…魔王として。

《トウキョウ、アリスside》

「じゃあ、行ってきますー！」

「行ってらっしゃい！気をつけて…無事で帰ってこいよ！」

「魔法騎士団の皆様、どうか、よろしくおねがい致します。」

「はい、任せてください。」

そうクロドさんが言って、出発した。

「エルちゃん、疲れてない?」

「大丈夫!」

歩き続けて30分ぐらい。草原みたいなところに来ていた。

「クロド、次の場所は?」

「シラクナ街だな。ただ、ちよつとばかし距離があるから今日は野宿かも。」

「えー?またー!?!」

「言うと思った。」

予想通りアレグロさんがゴネた。

まあまあ、と数人でなだめていると…

ヒュンヒュンヒュン…!」

「!しゃがんでください!」

バートの声が聞こえた。同時になにかが飛んでくる音も。

「……っ敵襲……!?!」

マリオネットさんが戦闘態勢を構えるも、敵の気配はない。ただ…

「っ!ナイフ!?!」

大量のナイフがどこからともなく飛んできていた。

「つりデル!毒7短剣技、ポイズンエッジッ!」

慌ててリデルを出して、短剣技を発動させ、こちらからも大量のナイフを飛ばして向こうのナイフを相殺していく。が…

「っ、多っ…!」

多すぎる。例えるなら銀の雨、といったところか。

と、

「待て!ストップ!ケイ!ストップだ!」

突然、どこからともなく声がした。同時にナイフの雨が止まる。

「ケイ…?」

ふと横でエルちゃんが呟いた。と、空中に黒髪の男の人と緑髪の男の人が現れた。そのうちの緑髪の人がこっちに飛んできてくる。

「ば、バートか!?!」

「!兄さん!?!」

はい!?!

「あつ！お兄ちゃん！」

「つて、エルか!？」

「はいい!？」

「改めまして、エルの兄のケイ・インラシユグと申します。で…」  
「バートの兄、グリー・スカービアだ。」

エルちゃんにお兄さんがいたのは知ってたけど、バートにもいたんだ。…というかエルちゃんのラストネームってインラシユグなんだ。初耳。

「ケイとグリーってあの…」

「ああ、トップクラスの冒険者、通称ハイランカーの《黒鷹こくよう》と《緑虎りよくこ》の二人だな。パーティーだったとは知らなかったが、それより…」

「二「両者ともうちのパーティーの子の兄だったとは…」」

団員の大半が手で顔の半分を覆って下を向いている一方…

「兄さん、なんでいきなり攻撃してきたの?」

「お兄ちゃん?何で?」

「い、いや、最近こちらへんで妙な連中がうろついてるらしくて、そ、それで、」

「片っ端から攻撃してた、と?」

「お兄ちゃん…?」

「いや、その、な、別に片っ端からってわけじゃなくて、その、」

「分かっているところがあつてる人たちはみんな、つて事?」

「うぐ…」

「…なあバート、もしかして…怒ってるか…?」

「心読んだら分かるんじゃない?」

「…:…うわあ…マジ切れしてる…」

「二二「何あの状況。」」」

同感。ハイランカーのそのまた上位二人が妹二人に石の上で正座させられながら説教食らってる…ええ…

「ぼ、バート、エルちゃん、そこらへんで…」

「むー…」

むー、じゃない。

「つて、ランク9…?」

ふとグリーさんが、眩いた。

「ん?」

「あ、いや、あの子。アリス…つて名前みたいだが、ランクが9…?らしい。バートとエルちゃんの友達…や、エルちゃんの方においては恩人、らしいg……」

「兄さん、勝手に人の心は読まないって言っただけ?」

「……あ、」

「:アクアラグ、水4魔法、ラピッドボム。」

と、バートはあの杖:アクアラグを出してグリーさんの頭の上にちよつと大きめの水球が現れる。

「ちよ、ストツ」

バシャアアアアン!

あー…

「うへー…魔法の操作もうまくなつたな…」

……マジで何この状況。

「まあつまり…フェンリオ魔法騎士団つー騎士団に入団して魔王討伐に向かつてる、と。なるほど、バート、すごいな。」

「まあ、アリスのお陰なのが大半なだけだね。」

ほー、とグリーさんが水を払いながら納得している一方で、

「というかエル、病気の方は大丈夫なのか!？」

ケイさんが聞いた。そりゃそうなるよね。

「うん、おねーさんが治してくれたよ!」

「治ったのか!?!何でああなつてたんだ?」

「ぎしん?…つてというのがいなくなつたんだって。」

「……え?」

「それで、前には魔術師さんが治してくれたんだけど、その時に四天王……何とかつてやつを入れたらみたいで、満月になったら体が乗っ取られてたの。そこから助けしてくれたのがおねーさん。」

「……そうか……ごめん、側にいてやれなくて。」

「ううん！お兄ちゃんがくれた杖のおかげで私も魔法が使えるようになったんだし！」

「そうか、良かった。……アリスちゃん、で良いかな？」

と、こつちにケイさんが来た。

「は、はい。」

「妹を助けてくれて、本当にありがとうございます。……それと、一方的に攻撃してしまったことを魔法騎士団の皆様にお詫びします。」

「まあ、あれは完全にこつちの非だからな。何かしておきたい気もするが……できることがな……」

「あ、それならー、」

と、アレグロさんが口を開けた。

「シラクナ街まで転移させてくれない？確か黒鷹つて転移魔法が使えらるって聞いたことがあるんだけど。」

……ん？転移魔法つてランク4の無属性魔法だから大体の人が使えるのでは……？父さんも使ってたし。

「ああ、それぐらいならお安い御用です。えーと……今ですか？」

「あ、はい。……団長、良い？」

「まあ、好意に甘えるぐらいはいいんじゃないか？よろしくおねがいします。」

「はい。では………転移4魔法、テレポート！」

父さんが使ってた転移魔法と同じ、青い魔法陣が地面に展開される。そういえば……転移魔法つてボクは使えるのかな……？

「……到着です。」

「うわっ!?!つて、ここどこらへん？」

「えーと……シラクナ街の入口の門前だな。警備が厳しいらしいから、ちゃんと門を通って許可証を貰ってないと色々厄介になるらしい。」

グリーさんが教えてくれた。





いや何してるのグリーさん。

「兄さん何してんの…」

「いやちよつと待て。俺は別に威圧したわけじゃない。勝手に体から出てる魔力に当てられてあいつが逃げだしたただけだろ。」

「どうだかなあ。」

バートが首を振って言う。…バート、お兄さんに対して結構当たり強くない？

「あつ、バートお前信用してねえな？」

「そうだけど。」

「クツソ心読むまでもなく即答しやがった。」

「…：…なあ、緑虎ってこんな感じなのか…？だいぶフランクだな…」

何かクロドさんが疲れてる…

「まあ、基本こんな感じですよ。でもまあやるときはやる奴なので。」

そりやそうだよね。

…あれ？この先…：…というかちよつと離れたところの路地みたいなところにゴ布林ぐらいの魔力が3つ…いや、4つ？あるね。1つはちよつと気配が隠されてるのかな。

でも…：…通りに出てくる気配もないし、何かをしてる気配もない。…強いて言うなら何かを待ってるみたいな？

「…スちちゃん、アリスちちゃん？」

「はっ、はい？」

「どうした？…なんか上の空だぞ？」

ヤベ、また癖が…

「あ、いえ、ちよつと考え事を。」

「ほら、宿ついたぞ。」

わーい時間が飛んでるー…。

「ちよつと手続きしてくるから待っててくれ。」

で、クロドさんがカウンターに行った。今回は3部屋取れたみたいですが。正確には、部屋は4つあったんだけど1部屋はグリーさんとケイさんが泊まるそうなので、3部屋だそうです。部屋割りは男性陣の方が固まって一部屋、アレグロさん、ジャンヌさん、マリオネットさ

んで一部屋、バート、エルちゃん、自分で一部屋らしい。

同年代は同年代同士で固まっていた方がやりやすいでしょ、と言われ、さらにアリスちゃんがいたら問題なくないか？と言われてこうなった。信用されすぎてませんかね。

で、その部屋にて：

「あれ、アリス、メアさんは？」

「そうなんだよね、どっか行っちゃって。まあ、メアの事だから多分すぐ戻ってくると思うけど……」

そう、ここ入ったときには居ただけど、いつの間にかメアがいなくなっていた。

と、

コンコン

「ん？アLEGROさんとかかな？」

……まあ、一応魔力を感知してみると……あ、

ガチャ

「失礼します。」

男性。長身のまあ、優しげな感じで、この宿の従業員の制服を来た人。

「わ、どうかしたんですか？」

バートが聞くけど……

「……………何やってんのメア。」

「……………バレたか……」

「そりゃバレるよ。形とか量を変えても魔力の質は変えられないって前に言った気がするんだけど。」

はい、メアです。何か人の形になってました。

「元から人の形にはなれたのだから。あまり安定してなかったのだが、最近形が安定してきたから使ってみたのだが……少しイメージと違ったな。」

なんかというか……優男風。心なしか口調も柔らかくなってる気がする……？気がするだけ……？

メアってこんなキャラだったっけ……？

## 魔王降臨

「…で、なんでそんな格好してるの?」

「何、ちよつとした雰囲気合わせだ。ああ、言っておくが、魔力で作っただけだから盗んだりはしてないぞ。」

まあ、なら良し…? いやそれ以前の問題でしょ。何がしたかったんだか…

「…にしても、やはりこの体は居づらいな。戻るとしよう。」

と、メアの体の周りに影がまとわりつき始めて、元通りの龍の姿（1m大）になった。

『ふう…さて、アリス。一つ連絡がある。』

「…向こうにいた4匹の魔物のこと?」

『気付いていたか。』

「えっ? どういう事?」

と、横のバートから疑問が飛んできた。

「ここからちよつと離れたところにゴブリンみたいな魔物が4匹いたみたいだね、その事。」

「おねーさんよく分かったね…」

「まあね。…で、それがどうしたの?」

『うむ、どうもあいっらおかしい。人間が近くに来て襲いもしないどころか路地から出て来もしない。何が目的なのか正直分からんが、一つ、分かったと言うならあのうちの1匹、気配が消えているやつは四天王幹部第一、バレルだ。』

えっ!?

「えっ? でも、誰もおそわれてないって…」

エルちゃんが言ったけど、

『だからおかしい、と言ったのだ。だいたい何でこんな短い間隔であいつらが主らの前に出てくるのやら。しかも、第二が倒されている状態で第一が、だ。』

…確かに。最初からマörderが出てきてたのも変だけど、こんな所に第一…バレル? がいるのも変な話だよね。…何らかの意図がある

のか、はたまた別の何かがあるのか…

「……よし、ちよつと見てくる。」

「えっ!?危ないよ!」

「そうだよおねーさん!行くんだったら…わたしも行く!」

「えっ、そつち?…まあ、私もアリスが行くんだつたら行くけど。」

え、そうなる?…えー…

「えっ、ええ…」

と、メアがやれやれ、といった風に首を振り、

『なら、我が影の通路を開いておく。ここと繋げておくから危なくなれば戻ってこられるであろう。』

そんな便利なものあるんだ…と思ったけど、そういえばあの人売りの奴らに捕まった人たちを助けてくれた時にメアが影の通路に入れた、とか言ってたね。あれか。

「…じゃあ…ちよつとだけ行こっか。でも!絶対に危ないことはしないように。」

「それはアリスの方が当てはまるんじゃない?」

うぐ、

「…そうとも言うね。」

まあ、ともあれ……

「…相変わらず動いてない……」

一回宿を出て確認したけど、気配察知してみても4匹の位置は変わってない。

「……………」

メアはポケットに入って、バートとエルちゃんは後ろについてくる。…と、路地に近づいたとき…

「!」

4匹が路地から出てきた。

その中で一番前に出ているゴブリン…否、ゴブリンとは言えないか。

ちよつと濃い緑の体はして、尖った耳は持つてるものの、触覚みた  
いなのが頭から2本生えてるし、その2本の間から角が出てる。服も  
普通のゴブリンとは違ってかなりちゃんとした服。

……例えるなら…ドラ○ンボールの、色が暗く、濃くなって角が生  
えたデンドエ…かな？

「…勇者の…おナカマ…で…ヨロシイ…デすか…？」  
「えっ？」

急に喋りだした。その上まさかの敬語&低姿勢。

え？

「そ、そうですけど…えっと？」

「わたくし…魔王軍四天王幹部第一…バレルと…申します…。」

また何かたどたどしい言葉で自己紹介してくるバレルさん。…少  
なくとも、悪意は無い…？

「…アリス・セナルと言います。…えーと、一応四天王幹部…つて  
事で…？」

「はい…デスが、人を襲つたりハ…しません。…元々…私共はソウ  
いっタコトは…好きでナイノデす。…私がココに出てきたのには  
…あナタ方をお願いがアツたたメです。」

お願い…？四天王幹部の人…人ではないか。まあ、なんの用だろ。

「ドウか…どうカ、あノ…今ノ魔王様を…倒してクダさい…！」  
「へっ!？」

え？ど、どう言うこと!?急展開すぎて頭がついていってないんだけ  
ど!?

「アの人は…魔王でハありません…!タダの…暴虐者でス…!我々の  
ことを…駒トしか考えテオリません…!前魔王様は…進め方は間  
違エど…でも、我々ノコとも考えてクダさッテイマシた…でスが、ア  
ノ人は違います…!そもそも…魔王でハないノデす…!」

…どうということ…？

魔王が…魔王じゃない…？

「…アリス…バレルさんの言ってる事…嘘が一つもない…誠意からし  
か言葉が発されてないよ…!？」

「えっ…!?!」

バートからもエルちゃんからも動揺を感じ取れる。

…どういう事だ…駄目、全然頭が理解しない…!

と、その時…

「ん?」

フツ、と空がちよつと暗くなった。

あれ、雲でもかかったのかな?と思ひ、空を見上げると…

黒い雲が渦を巻いていた。

「!主!まずい!影の通路へ入れ!」

メアが叫ぶけど、

「待つて。エルちゃん!バート!二人は先に帰ってクロドさんにとりあえず事情報告して!メア!バレルさんをお願い!…嫌な予感がする。」

その瞬間、

ドオオオオン!

「っ!」

黒い雷が落ちた。

その落雷地点付近に数十もの黒い雷が連続して落ちる。そして、落雷が止まると…  
と、

「な、何あれ…」

黒い雲の渦の真ん中らへんに、一人の人がいた。

…否、人じゃない。

紫と黒の髪に、真っ白な顔、ここまで離れてても禍々しいと感じ取れる魔力。そして…

「紫の…角…!」

まさか…あれが…!

と、

「あ、あアアあ…!」

バレルさんが目に見えて怯え始めていた。…ひとまず…

「バレルさん、落ち着いてください。メア、通路開いて。とりあえずそこにエルちゃんとバートは入って部屋に戻って。……いや、バレルさんも。」

「ーい、いエ、そうイウわけにハ……」

と、バレルさんは否定するけど、正直言わせてもらおうとこつちとしては退いてもらったほうがありがたい。

「……もーアリス！本当に大丈夫なんだね!？」

「少なくともここに全員固まつてるよりは、ね。」

「わかった!」

「ナっ!ちよッ……」

と、バートはバレルさんを抱えて、メアの開いた影の通路に飛び込んだ。続いてエルちゃんも、大丈夫……なんだよね?と聞かれてから入った。……正直大丈夫かどうかは分からない。

それ以前に街の方も混乱が起きてる。

と、

「……いたな。」

と、魔王はこつちにゆつくりと近付いてくる。

何が「いたな」、だ。

……勝てる訳がないけど、リデルを出して戦闘態勢を取る。

「……ここまで警戒しなくてもよかろう。私はお前に用事があっただけなのだ。」

「……何。少なくとも私にはあなたに会うような用事はない。」

と、魔王はニヤ、と笑って、

「クハハハ！そうだろうな！私から一方的にある用事だからな。」

と、魔王は地面に足を付けてこつちに来る。

……すごい威圧……おまけにえらい魔力。足をつけた瞬間体中に電気が走ったみたいな感覚があった。正直、怖い。

でも、体を少し低くして、右足を後ろに少し下げて構える。

「……ほう? おの 慄かぬか。勇ましいことよ。……一応名乗ろうか。私は……フィンという。」

距離……多分10メートル位……っ、名前とかそれ以前に気を抜けば気



絶しそうだけど……！頭の中に……直接声が響いてくる……!?

「ククク……耐えるので精一杯、か。カカカ……ハアッ！」

と、3メートルほどの大きさの魔力弾が撃ち出された。速度はないけど……こんなの、避けたら後ろの方が壊滅、避けなかつたら自分が死ぬ！っ……しようがないっ！高威力魔法でなら……ッ！

「毒ツ9魔法！バタフライリコレクションッ！」

衝突する目前で大きな蝶を模した弾幕を魔力弾に対してぶつけて、魔力弾を少しずつつ押し返す。

「なっ!？」

「そ……れッ！」

もう一度展開し、蝶弾幕をもう一つ追加した。と、どんどん押しつけていき……

ドドドオオオン！

「はあっ……はあっ……」

「っ……カハハハ……かなり手加減したのは確かだが、これは驚いた。」

あれで手加減してたのか……やっぱり、流石にまだ勝てない……どころか、むしろ力の差が歴然としただけ……

「さて、次はどうするかな？」

と、もう一度魔力弾が放たれる。が、

「っ!？」

まさかの、今度は5m程のが5つ。

空に撃ち出され、こっちに吸い込まれるように全方位から飛んでくる。

や、ば……！

と、

「大気8剣技！エアークットラッシュ!!」

「っ!？」

ガガガガガガガガガ！

と、一瞬目の前に蜘蛛の巣のような斬撃が見えて、一瞬にして弾幕が切り裂かれた。

この声……！

「グリーンさん！」

「それ！草8魔法！ソルハーベスト！」

「ケイさん……！」

と、無数の葉っぱのような弾幕がケイさんの周りからフィンに向かって撃ち出される。…いや、違う。あれ弾幕じゃなくて葉っぱみたいなナイフだ。…すごい不規則な動きしてるけど。

「チツ…ハイランカーか…流石に分が悪いな。まあ、そのうちお前もこの方からこちらへ来るのだ。そのときに決めればよかろう。」

「！待ちやがれ！大気8剣技！空牙突！くうがとつ」

グリーンさんがフィンに向かって突撃していったけど、フィンは闇にかき消されるみたいに消えていった。同時に空の黒い雲の渦も散り散りになって消えた。

「っ！クソ…逃したか！」

悔しそうに空を見るグリーンさん。と、

「アリスちゃん！」

「！クロドさん！」

宿の方からクロドさんが走ってきた。

「すまない、宿前でも混乱が起きて…こっちに来れなかった。魔王は！？」

「…逃げられました。分かったのは…フィン、っていう名前があることと…次元が違うレベルで強い事ぐらいですね…毒9魔法2発を手加減した魔力弾で相殺されました。」

と、クロドさんは一瞬目を見開き、すぐに少しうつむいた。

「はあ…なるほど…レベルがレベルな上、属性相性もまた問題だけど…とはいえ、アリスちゃんのランク9魔法2発が簡単に相殺されるとなると…史上最強は伊達じゃないか…」

それは同感。ケイさんが結構本気で撃つた魔法を平然とほとんど躲してほぼ無傷状態にいるし、攻撃力も馬鹿にならない。

…あ、そういえば…

「あ、バレルさんは…」

と、クロドさんはふとこっちを向いて、少し顔を弛緩させる。

「バレル：ああ、事情は聞いた。緑虎さんが心を読んでも悪意がない事は分かったから、敵対する必要はないだろう。」

なるほど、そういやグリーンさんって心読めるんだっけか。バートも読めるみたいだし、血縁なのかな？

と、クロドさんはまた顎の下に指を添えて、呟いた。

「にしても：魔王が魔王じゃない、という証言にうちに魔王の討伐依頼を出してくる四天王幹部：一体何が起こってるんだ：？」

「そうですね：これまでの人達の魔王討伐ってどんな感じだったんですか？」

とりあえずこれまでの感じを聞いてみよう。ある程度は知ってるかもしれない。

「やってること自体は、俺たちの団とは殺すか殺さないか位の違いしか無かったみたいだよ。各地に寄りながらレベルを上げて、四天王幹部を撃破した後で魔王城に行つて魔王討伐。こんな感じだね。」

行動は変わり無し：なら、環境が違う、って事になるらしい。にしても、魔王は自分に用事がある、って言つた。……結局なんの用事だったんだろ。ただ攻撃しに来ただけ、って訳でもなさそうだったけど……

：少なくとも、今回のこの魔王との対峙、イレギュラーにも程があるってことは分かる。

何か：今までとは違うことが起こってる。……これは仮説だけど：何らかの事情に自分が関与してる可能性はもう極めて高い。これは覚えとこう。

## 魔王軍の裏事情

「…で、話してくれるのか？魔王側がどうなってるのか。」

あの後、宿に一回戻ってクロドさんの部屋に一回集合、バレルさんから話がある、と言うことで来てみると、魔王軍が今どういうことなのかを説明してくれるらしい。グリーさんとケイさんはまだ依頼が終わってないらしく、調査に出かけたため魔法騎士団の全員が集まって、床に座ってバレルさんの話を聞く。ちなみにバレルさんは正座してる。…もうちよつと崩しても…

と、バレルさんが話し出す前にジャンヌさんが口を開いた。

「あ、でも少し人間の言葉が話しにくいんですね？」

「はい…これでも15年ほど勉強はしているルのデスが…」

魔物と人間って使う言葉が違うのかな？話しぶりからしてそうだよね。…というか15年…わお。

と、ジャンヌさんが、

「あ、なら、私から言語通訳の魔法を使いましょうか？その方が話もしやすいでしょうし。」

「…ありがとうございマス。お願いをさせたいたく側の者ですが…よろしくおねがいシマス。」

と、バレルさんは申し訳無さそうに少しだけ顔を歪ませて、言った。と、ジャンヌさんは、ふふつ、と笑って、

「この位大丈夫ですよ、お気になさらず。…ランク6魔法、ラングケイト。」

と、ジャンヌさんが指を鳴らすと、バレルさんの体が少し明るく光ってすぐ消えた。

少しバレルさんは自分の体…特に顔らへんをペタペタと触って、  
「…特に変わりはないですが…つと！言葉が…」

目を見開いた。なんかちよつとテンションが上がってる気がする。まあ、それもそうか。ボクも自分が急に英語喋れるようになったら同じ事になると思う。…いや、もつと喜ぶかも。

で、バレルさんは一度だけ咳払いをして、話し始めた。

…顔が真剣だ。

「さて、魔王軍の現状なのですが…一言で言うと酷いものです。まず前提として、基本的には魔物はあまり好戦的な性格ではなく、穏健な種族の集まりです。…まあ、例外もいますが…そこはともかく、魔王様が降臨されると、その魔力、邪気によって私達は好戦的な性格に変わります。」

そうなんだ。後半は知ってたけど前半…基本魔物って好戦的じゃないんだ。まあそこはさておき、…ここからだ。

と、バレルさんは少し表情を暗くして、続けた。

「ですが、今回はそんな事はありませんでした。あまり戦う気は起きなかつたのです。」

…ん？

「そりやまた…何でなんだ？」

とクロドさんが腕を組んで少し乗り出して聞いたけど、バレルさんは首を振った。

「…原因自体は不明です。ですが、これが先程皆様に伝えたこととも繋がるのですが、あの方が魔王様ではないのではないか、ということにたどり着いたわけです。」

なるほど…あれは、地位としては魔王として存在してはいるけど、魔王としての力が無い、魔王がいれば起こるはずの事象が起こらなかった、って事だった訳か。

「…でも、こつちとしては結構な数の魔物に襲われてるんだけど？」

と、アレグロさんが言った。

そう、となると矛盾が生じる。これまでに結構な数の魔物、魔獣に攻撃を仕掛けられてるんだよね。…しかもむしろ不自然とも思えるほどの量。

と、余計にバレルさんの顔が沈み、

「…それに関しては、本当に申し訳なく思います。現魔王様の命令なのです。…片っ端から街に出て人を…特に勇者のパーティーを襲うように、と。そのせいで、戦意のないものも強制的に前線に駆り出されているのです。…幸い、この街は魔王城の方向からはかなり離れ

ているため、結構自由にできるのですが…」

そういう事か…大量にこつちにぶつけてくるから不自然なほど量が多かったのか。

…ん？ちよつと待って。

「…ここから魔王城ってどつちの方向なんですか？」

今、バレルさん「この街は魔王城の方向からはかなり離れているため」って言ってたけど、ボク達ってトウキョウから進行方向は変えずに進んで来てるんだよね？…で、トウキョウにはそれなりに魔物が出てた。まあ、数は少なかつたみたいだけど…でも、ここではそれよりも魔物が人を襲わない、っていうのであれば…

「魔王城の方向は向こうですよ。」

そう言っつてバレルさんが指を指した方向は…さつき通つてきた道の方である。

…つまり…

「…方向…逆ですね。」

「あつちやー…」

と、クロドさんが顔に手を当てて言った。

…だよねー…

「魔力コンパスがバグってたから半ば当てずっぽうでやったらこうなつたか…」

…ん？魔力コンパス？

「魔力コンパス…って何ですか？」

とバートが聞いた。横でエルちゃんも首を傾げている。ボクももちろん知らない。

と、クロドさんは、ああ、と言っつて鞆から本当にコンパスみたいなものを取り出した。…針があつちいつたりこつち行つたりしてるけど。

「これが魔力コンパス。魔王の魔力の波長を捉えて示すための物…なんだけど、この通りなんかすごいことになっててね…」

苦笑いしながらクロドさんが言う。…これはすごいね。最早揺れるどころかグルグル回つてるもん。

と、バレルさんが、

「それも…おそらくあの者が魔王様ではないが故、指し示す方向が無くなってしまっているのではないでしょうか。」

と言った。まあ、そう考えるのが妥当かな。

…でも、

「…でも、フィンには紫色の角がありました。」

あの至近距離で見たからはつきり分かるけど、確かにフィンには紫の角があった。

そして紫の角を持つ種族は魔王以外にいない。…なんでかは知らないけど。

「…そこも、分からないんです。飾りだったりするわけでもないことは分かっているのですが…」

とバレルさんが言うと、ルーズさんも頭をガシガシとかいて、

「むん…不明点が多すぎるな…魔王じゃないはずなのに紫の角を持ち、魔王の魔力をほとんど持つてないはずなのに量や強さは歴代魔王と比べて最強。…そんなやつが本当に存在するのか？」

…ルーズさんの言う通り、ボクも全く分からないどころか見当すらつかない。

そんなのが存在してるのかとか以前に、対峙してみても分かったけどあれは魔物ですらない可能性もある。

力が強すぎる、とかのレベルなら魔物でもあり得るかもしれないけど、それ以前の問題。そもそも、言葉が通じてた。

15年間も人間の言葉を勉強してるバレルさんでさえ人の言葉はあのレベル。その上、言語通訳の魔法は無属性魔法だから人間以外は使えない。なのに、現れて1年も経ってない魔王があんなにペラペラ人の言葉を話せるものか…

と、

『…一つ、可能性として奴の正体の候補はある。』

メアがポケットから首を出して言った。

…と、バレルさんの目が落ちるほど見開かれた。

「かつ、影龍様!?!な、何を…!?!」

と、メアは顔を少ししかめて、

『その言い方はやめろ。今はナイトメアという名がある。…あと、我がこうなっているのはアリスが我が主だからだ。』

…ん？今更だけどこっちとしてはメアの主人になった記憶はないんだけど。友人関係としてアグリーメントはしたけど。

「あつ、主…!?まさか、あの影の通路を開いたのは…」

『ああ、我だ。』

ますますバレルさんの顔が驚きで塗りつぶされる。というか若干仰け反ってる。…メアってそんなに人脈…人？魔物脈あるのかな…？

「それより、見当がついてるのか？そのフィンってやつのは…」

バレットさんが一度メアに向き直して聞いた。

と、メアはうむ、と言って一度ポケットから出て、ボクの隣に着地、1m大になった。

「で、そ、それは…何、なのでしようか…？」

…バレルさん、余計にガツチガチになってる。

『ぬ…こちらとしてはもう少し肩の力を抜いてもらったほうが話もしやすいのだが…まあ良いか。』

メアは、はあ、と息を一回吐いて、話し始めた。

『我が生を受けてからおおよそ500年、その中で25回程魔王が現れた。が…その全ての周期が20年丁度でほぼ一致していたのだ。…全て、魔王が倒されてからの経過日数は全く同じだった。』

えっ…？

「……全て…!?」

「というか、よくそれ気付いたな。」

マリオネットさんが瞠目し、バレットさんが言った。それは確かに。

『500年も生きていれば何もすることの無い年が何年も出てくる。暇だったからいろいろ調べてもいたのだ。』

少し胸を反らせてメアは言った。

ひ、暇だったから…メア、それ自慢することじゃない…と言いたい



所だけど、こればっかりはすごいとしか言えない。

『…まあ、何が言いたいか、と言えばだ。裏で何者かが魔王を作り出している可能性があるのだ。…時間はかかるものの、魔王に値する魔力を魔物に注ぎ込むなり魔力で人形を作るなりすれば20年程で魔王は作り出せる。…つまり、周期年数と一致するのだ。』

……まさか…

『が、だ。今回は前回の魔王が倒されてから30年経って魔王が現れた。…周期から外れているのだ。』

30年…そうなんだ。

「つまり…」

ボクが言うと同時にメアの声が重なった。

『何らかの事故か何かで元々なるはずだった魔王が使えなくなった。』

「だから…その魔王を作る役目の人が魔王役になってる…?…?…つまりフィンは…魔王の製作者…?」

そこまで考えた瞬間、

ズンツ!

「ガツ…か…!?!」

いきなり、脳そのものが殴られたような頭痛に襲われた。頭を抱えてそのままうずくまる。

い…が…あ…たまたまが…!…!…割れ…る…!?!

じ…冗…談…ぬ…きで…やばい…ツ!!

「アリスちゃん!」

「アリス!大丈夫!?!」

「主!どうした!?!」

前を向くどころか…意識を…たも…てない…あ…か…

——…で、僕は死んでいる、ということですか?

『はい、その通りですね。』

——なるほど…それで、何がしたいんですか?わざわざ死んだ僕を

呼び戻すぐらいの事はしている訳なんです。

『何を…と言いますか、あなたと契約をしたいだけですよ。』

……契約。

——そんな簡単にするような物なんですか？

『契約、と言ってしまうと堅苦しく聞こえますか。ちよつとしたお願いですよ。』

…お願い、か。

——まあ、その内容にもよりませんが…無茶苦茶なことじゃなくて、今の僕にできる程度の事であれば、ですね。

『いえいえ、あなただからこそ、できるんですよ。』

…？

——僕だからこそ…？

『ええ。…とは言いませんでも、私があなたに言う事、する事はそれぞれ一つです。私は、あなたを転生させ、別の世界へと送ります。あなたの好きそうな、分からないことだらけの世界へ。…そして、その世界であなたは——という少女と必ず会うことになります。彼女を幸せにしてあげる事がお願いです。』

??イマイチ理解ができない。

——つまり…何をしてほしいんですか？

『まあ、言ってみれば…あなたの好きそうな世界に転生させてあげる代わりに、とある子を幸せにしてあげてほしい、という話ですね。』

——それだけなんですか？

『ええ、それだけ。単純で、難しいでしょ？』

——…そうですね、難しそうです。

『でも、楽しみでもある、といった感じかしら？』

——人の思考読破もお手の物ですか。

『これでも一応——なので。…さて、そろそろ行きますよ。…一つ、言っておきます。』

目の前の——が何かの青い渦を出していると、ふと手を止めてこつちを向いた。

——？何でしょうか。

『あなたは、かなり天才的なポテンシャルを持っています。ですが、それは状況によつては自らの身を滅ぼすことにもなりうる、という事を覚えておいて下さい。』

——…何の事かは分かりませんが、一応肝に銘じておきます。

『そうしておいて下さい。』

そして、目の前の青い渦のようなものに近付く。

それに入った時、ふと後ろから——の聲が聞こえた。

『頑張ってください。あなたの為にも、そして……』

アリスの為にも。』

## お知らせ

「あれ…?」

いつの間にか周りが白くなってる。

いや書き出しといてどんな状況だっけと思うけど、実際そうなんだよね…何にもない感じの世界の中に、一人で浮いてるみたいな感じがする。

それと、不快な感じじゃなくてむしろ心地良い感じ。

…ふと、遠くで何かが光った。

「…なんだろう?」

頭の中で向こうに行こうと思えば勝手に体が進んでくれる。

何かが光った所まで進んでみる…と。

「…へっ?」

…スマホだ。

スマホがあつた。

いやなんで?

手に取ってみても紛れもなくスマホ。リングマークはついてない、アンドロイド端末。電源は落ちてるみたいだけど…つけてみようか。

右側の一つしか無いボタンを長押しすると、機種が映し出された。少しして、再起動が終わる…と。

画面が真っ黒になって真ん中に白いボールみたいなのが映し出された。

いや本当に何?

と、同時。

「やっと起動したあ!」

「ひゃあああああ!?!」

うわ、なんか情けない声が出た気がする…

いやそれより。

「え、え、え、?え?」

「やつほー、???君。…あ、今はアリスちゃんか」

「へ、今なんて?いや、え?」

スマホが…勝手に喋ってる…!?

え、どういう事これ。え?ええ?

「あーいや、ごめん忘れて。それよりね…ちよつとお知らせがあつてね!」

「お、お知らせ…ですか?というかあなた誰ですか…?」

何の…?そもそもこの人…いやスマホだった。いやもうそこはど  
うでもいいけど、これどういう状況…??

少なくとも勝手に喋るスマホなんて見たことないし…あ、いや、も  
しかしたらクリーフオールならあたり…しそうだけどそうだとす  
るならそもそもここどこ!?

「まーまー、勝手にこんな所に呼び出したらそりゃ混乱しちゃうだろ  
うけどちよつと落ち着いて」

どこか聞き慣れたような声。

聞き覚えはないけど…どこか懐かしさは感じる気がする。

「よしよし落ち着いたね?まあとりあえず質問に答えよう。僕は…そ  
うだね、作者、とでも言つとこうか。あ、概要はそつちの頭の中に  
ま入れといたからー」

へ?何の…と思った瞬間、頭の中を大量の情報が駆け巡り始めた。  
でも知恵熱がどうのこうのとかがそういうことは全くなくて、経験と  
して整理された情報が頭に流された感覚に近い。

要するに、これが創作の世界で、この喋ってるスマホが作者さんで  
ある、という感じらしい。

本来なら「はい?」ってなる感じなんだろうけど、腑に落ちるって  
いうか…なんとなく、スツと納得できた。

「まあ…なんとなく分かりましたけど…お知らせってなんです?この  
お話に関する事ですか?」

「そうそう!ちよつと僕、物書きの練習しててね。それでまあどんな  
感じかなーと思って見返してみたんだけど…これ読みづらいね、って  
なっちゃって。改装工事って形で直してただけどこれがまた面倒  
くさくてさ。ってことでもうリメイクしちゃうおう!ってなって」

「リメイク…」

思わず反芻してた。

つまり？と頭を捻ってる間に、作者さんは続けていく。

「まあ読んでくださってた方々から貰ったアドバイスをできるだけ反映しつつ、何とか再度書けないかなーって感じ。で、新しい小説として書こうと思ったんだけどこれ匿名投稿だからリメイクの通達手段がなくなってるね。一話としてこういう手を取った、ってわけ」

「なる…ほど？」

まあそういうことらしい。

と、いうことで。

『普通の人間ですけど…え、天才魔法使い？』改め『転生アリスの魔法譚』！」

「新しい小説のリンクをあとがき部分に貼っておくので、良ければ読んでやって下さいー！」

「ところで、何で名前変えたんですか？」

「小説書いてるのバレた友達に名前がダセえって言われたから」

「ガラスメンタル…」

「そんな言わないで…でも後々言ってみたら言ってみたで僕もダサいと思う」

「まあ感性は変わりますからね」